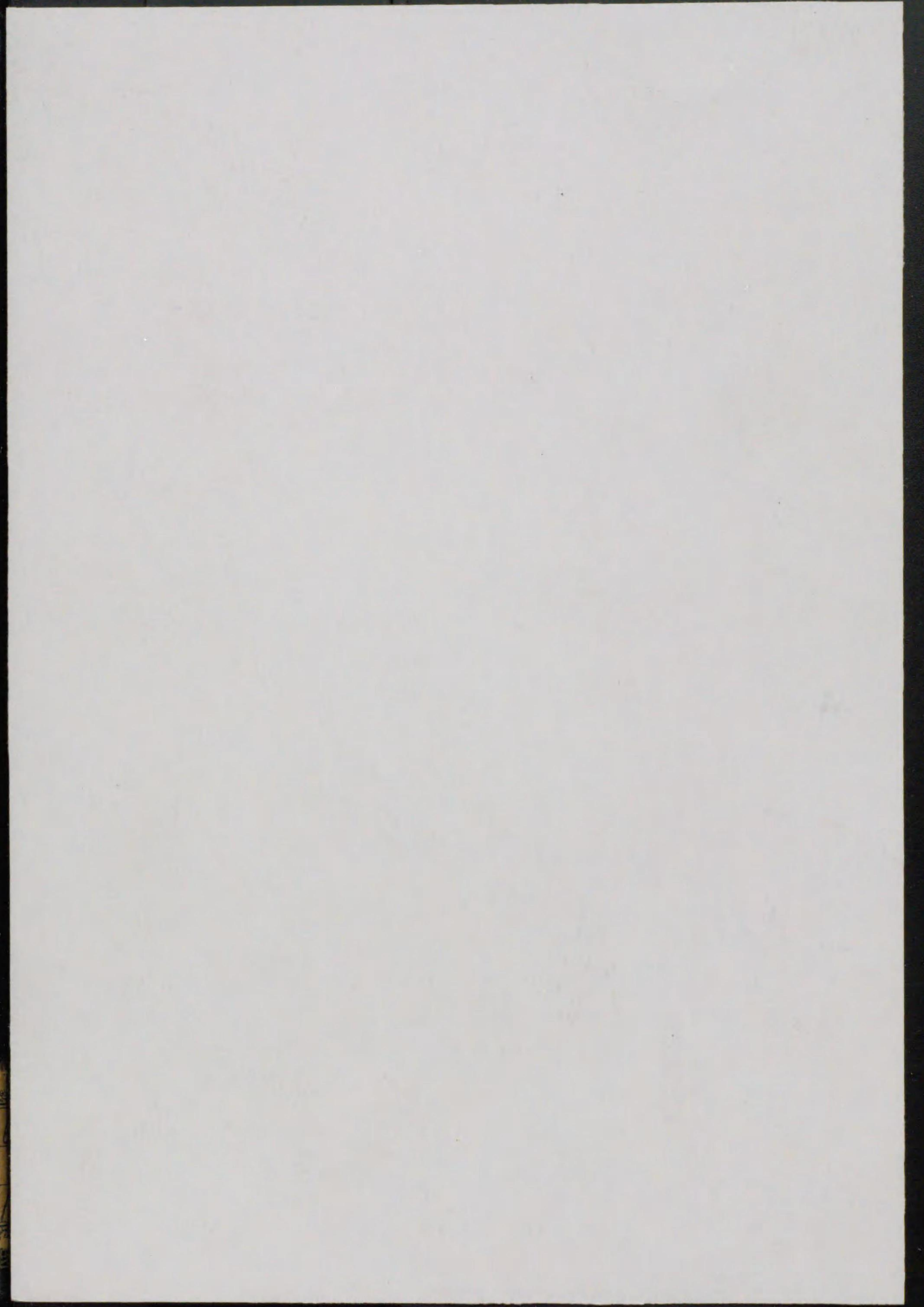


619-182



1200501537288

9  
182



9.9.10



街頭の哲學

文學博士  
松原寛著

東京十ノ行刊



619-182

## 自序

本書執筆のため旅に出る頃、絶えて久しい友人からの電話である。

『君まだ居たのかい。何處へか出かけると云ふから、もう立つたかと思つたんだが』

『あゝ今日あたり行きたいんだ。よく分つたね。』

『新聞の消息欄で知つたのさ。さう云やあ、街頭の哲學とやら、書くに云ふぢやないか。かぶと町に居る友人がそれを聞いて、出たら是非知らして呉れと云つてたよ』

聞けば、さる仲買店の店員の要求とやら、思ひも寄らぬ處で、期待されて居るのに驚いた。去年のヘーゲル講習會にも、あの社會から聴講者のあつた事が

思ひ出される。之では考へねばならぬ。もとより夫等の人は、私に『岡辰押切帳』式のものを持ち設けて居るのではあるまい。實人生に於る悩みをいかに處理すべきか。人生の實踐に處する態度、如何と云ふ處にあるのではなからうか。必ずしも知識としての哲學でもあるまいし、さりとして宗教の門を叩く心にもなれないのであらう。さう云つた人達を心中に浮べながら構想したが、A篇『哲學の實踐』である。

これは謂はば私の身邊雜記に類するもの。過去幾年の間、いかに私が世に處して來たか。又現在いかなる心境であるかの記録なのである。而も見るも惨じめな失敗の跡を、あけすけに書いた。以て人の師表たるべきものでは、斷然あり得ない。だが人が何と笑はうと、私の哲學はこゝから出發し、又こゝに歸つて來るのである。患ひや悩みを同じうする人にとつて、何等かの示唆ともならば、幸ひ之にすぎない。

C 哲學思潮の展開 ..... 一七九

I	哲學の曙.....	一八一
II	哲學の成熟.....	一九七
III	ルネッサンスの頃.....	二一九
IV	知識至上の時代.....	二四七
V	巨星現はる(カント).....	二七六
VI	愛國熱情の哲人(フキヒテ).....	二九九
VII	因縁の理を説く哲人(ヘーゲル).....	三三六
VIII	マルクスより現代へ.....	三四九

A  
哲學の實踐

I 序言  
II 哲學の實踐  
III 哲學の實踐  
IV 哲學の實踐  
V 哲學の實踐  
VI 哲學の實踐  
VII 哲學の實踐  
VIII 哲學の實踐  
IX 哲學の實踐  
X 哲學の實踐  
XI 哲學の實踐  
XII 哲學の實踐  
XIII 哲學の實踐  
XIV 哲學の實踐  
XV 哲學の實踐  
XVI 哲學の實踐  
XVII 哲學の實踐  
XVIII 哲學の實踐  
XIX 哲學の實踐  
XX 哲學の實踐  
XXI 哲學の實踐  
XXII 哲學の實踐  
XXIII 哲學の實踐  
XXIV 哲學の實踐  
XXV 哲學の實踐  
XXVI 哲學の實踐  
XXVII 哲學の實踐  
XXVIII 哲學の實踐  
XXIX 哲學の實踐  
XXX 哲學の實踐

I 愛兒に與ふ

まことよ!

今私は湘南の磯邊なる宿に居る。して今度課せられたる出版物の爲めに、筆を執らうとして居る。もう大分夜も更けて居るやうだが、先づ思ひ出すはお前の姿である。私がうちに居ないので、夙くにお前は床に就いて居るだらう。又チヨコレートの夢でも見て、大きな聲で怒鳴つてはしないかなど想像しても見るのである。こんど私がこの旅に出る時お前はきくやに手を引かれて、角の風呂屋のところに待つて居る自動車まで送つて來た。いかにもお前は元氣がなささうだつた。振り返つて車の窓から見れば、寒さうにしよんぼり立つてるのが憐れだつた。母はなし、一人の父さへ旅に送つて、淋しく七つの正月を迎えねばならぬのかと思ひ遣つて、私は暗然とした。それもね、今年始めて云ふならば、まだ慰められる術もあらう。が、生れ落ちると共にお前はかゝる運命に置かれたのであつた。何たる不運なお前であらう。ほんとうにお前は母なし兒なのだ。死別れとも云ふのなら、命數

如何とも致し方なしと諦められる事もあらう。と云ふのも皆私の罪である。思ふて此處に至る時慚愧に堪えず、只斷腸の念切なる許り。いくら詫びても救はれる道はないのだ。私にして見れば、實は斯うするより他に術はなかつたのだ。今でもさう思つて居る。と云つて夫れがお前に對する申譯にはならない。

お前が生れたのは、私が遠い／＼旅から歸つた翌年位ひだつたらう。松澤村に住んで居る時分だつた。お前が間もなく産れると云ふので、お前の生みの母なる人は、牛込の病院に入つた。そしてこの世に生を享けたのだ。忘れもしない暑い盛りの頃であつた。ちやうど學校は休み中なるを幸ひ、私は身延山に行つて論文執筆のため参考書を漁つて居たのだつた。が、私は急に都に歸つて來ねばならなかつた。出産の期近づいたからではない。うちから呼ばれたのでもない。親しき友から思ひも寄らぬ招電に接したので、あたふたと歸つたやうな始末。來て見れば、なる程私の身邊や、私の家庭を中心として、只ならぬ雲がたれこめて居る。が、生るべきものは生れる。間もなくお前は健やかに世の光りを仰いだ。だが、正直のところそれは私の喜びでも何でもなかつた。世の人々が狂喜すべき長兒の出生も、ひたすらに私に重荷と憂鬱さを思はしめる許りであつた。と云へば全く解け難き謎とも思はれやう。事實世間の常識では解らう筈もない。何と云ふ皮肉な事であらう。今日

が日までその日程痛憤身に染みた事は曾つてない。その頃私は今のやうにN大學で教授の職に在り、相當に重い責任さへもたされて居た。それがその日を以て、それらの地位も、社會的名譽も全く葬らるべき日であつたのだ。もとよりそれらのものは、慢るべき何者でもないしにろ、私にしては身を以つて授けられたものなのだ。無慚にも一朝にして、反逆のために放棄せねばならぬとなつては、胸も裂けよと云はずに居られまい。だがね、何時までも愚痴をこぼして、泣きまろぶ私でもなかつた。さうと決まるからには何の未練ぞや、何の泣き事ぞ、孤兒を抱いて決然都を去らうではないか。放浪は我が運命ぞや、との覺悟をきめた。この決心がついた時程又、愉快な事は稀だつた。

『殺さば殺せ、打たば打て!!何糞つ』と云ふんで、意氣まことに天に沖するの慨があつた。かくてお前の母なる人は、お前の誕生を境として、うちに歸られない筋合ひとなつて了つた。母なき兒としてお前の運命は、お前がこの世に生れ出づると共に始まつた譯である。一生涯不運の地に到らしめたる恨みはもとより盡きない。だけれどね、今はた誰を恨まらう。只私の不徳を責むるのみである。それをお前にいくら詫びても足りなく思ふのだ。いかにお前が私を責めやうとも、私に返すべき言葉はない。子としてのお前に對して、第一に抱いた私の感情は、子に對する煩惱でなく、親の愛情でも何でもなかつた。只この責任感の



みだつた。濟まないと言ふ道徳的苛責の念許りである。だいいち、もと／＼子を生まうな  
どと云ふ感じは、最初から微塵だになかつた。考へても見るが良い。家に一文だつて財産  
があるでなし、之から後とて子のため美田を買ふ餘力があらうなどは、夢にも期待され  
ない。門地なく、一平民の素寒貧。わが思想や學説をば血肉を分てるが故に子に強ひる譯  
にも行くまい。斯う考へて見れば、わが子を儲けばやなどの思ひが起るいわれもない。と  
云ふやうな譯なのだ。

偶然と云へば變でもあらうが、かくしてほんとうに偶然生れて來た。否むしろ皮肉にも  
生れて來た。さう云ふなかで、お前の出生を心から喜んだ人が只一人ある。それはお前  
のおばあさん、私の母であつた。老いの身を厭ひなく、炎暑の中をば三百里の遙か彼方から、  
三等の汽車で二晩まんじりともしないで、驅けて來て呉られたのは、お前のおばあさん  
であつた。母を迎えて、さすがに私はほつとした。併し來て見れば、喜劇悲劇の大海原で  
ある。母子相對坐して、云ふべき言葉もない。私の胸中よりも、親としての母の感慨はど  
うであつたらう。思ふだに涙なきを得ない。併し故郷の實家にも多くの孫を控へて居る母  
は、いつまでも、お前のためにのみ居られない。月餘の面倒から離れて、歸られねばなら  
なかつた。それで數ヶ月は二人の女中に守られて、お前は育つて行つた。それも思はしく

なくて、これからお前の里子の生活が始まつた。斯うした生活が一年近くも續いたであら  
うか。その時分に第二の母として來たものがある。その親切に依つて、母らしき懷に、兎  
も角も歸るを得た。だが平安は永くは與へられなかつた。遂にその人ともお前は分れねば  
ならぬのであつた。どこ迄運命に翻弄されるお前なのか。又まことにさだめ拙きお前では  
ある。又私でもある。もちろん彼女に未練を残して云ふのではない。思ひ去り思ひ來つて、  
感慨轉た切なるのみ。

それに付けても思ひ出す事がある。この夏（昭和七年）であつた。お前の通ふルンビニ  
幼稚園が明日から休みと云ふ日である。夏中の注意を與へておき度いからとの事だつたの  
で、一寸暇ではあるし親としての挨拶もまだしてないしするから、私自身お前を連れて出  
かける事とした。多くは慈母が少くも最初は携えて行くであらうものを、私のうちではそ  
の事もなかつたので、園の方では私かにいぶかしく思はぬではなかつたらしい。そんな關  
係で、旁々私が出かけたやうな譯。その折の話である。或時お前が覺束ない手で繪をかい  
たさうな。まづい乍らいかにもマダムの繪だと云ふんだ。

「誰ですか」

と先生が問ふと

だと答えたと言ふこと。こんな先生の話に依つても、それは云ふ迄もなく、第二の母を髣髴せしむるものなるを知つて私は、人前をも辨へず、自ら眼頭の熱くなるを覺えるのだつた。ちやうどあれがお前の三つの頃であつた。でもその印象が鮮かに残つて居るのを今始めて知つて私は驚いた。生みの母を知らないお前は、只彼女のみを、ほんとうの母と思入つて居るらしい。それは無理もない。それだけならば驚くにも當らぬ。お前は常日頃母の愛に飢えて居る譯だが、それは私にはよく分る。決して私の思ひなしから許りではない。お前は幼稚園に通ふ。やがて私は私にはよく分る。夜は晚い。もう寝て居ると云ふ始末。日曜や休日には來客攻めで一所になる時間とは、殆んどない。今では祖母が面倒を見て呉れて居るものの、やはり親の愛を求める姿が、いぢらしくて仕方がない。かくてありの荒びに可憐な繪となつて現はれたのであらう。それで居ながら口に決して母だマ、だと聞かうとしないのだ。求める素振りでも見せやうとしない。夫れを口にする事は、何だか開いてならぬ玉手箱に觸れるの思ひらしい。そこに云ふ可からざる悲劇の在るのを感じしてるかのやうだ。幼兒の六感の鋭敏なのに驚入るの他はない。『いとほしや見るに涙も止らず、親もなき子の母を尋ねる』のならば、未だ良い。尋ねんとして尋ねられないのは、更に辛い。頑是

なき子供にこの年で居て斯くまで心を勞せしむるか。人知れず私は泣くのだつた。かゝる運命におかれた子には、又格別の知能が授けられるものでもあらう。私は空恐しさに堪えなかつた。

併し有難いことには非常にお前は健康な生れつきなんだ。夫れはどんなに仕合せな事か分らない。母がなく最大逆境に生れたなんぞ、思ふではないよ。もしかして、腕一本足りなかつたり、耳が片方なかつたりしても、不足は云はれないのだ。それが先づ普通の體を惠まれて居るのが感謝でなくて何であらう。頭にしているから、薄野呂に生れついても天命である。でも、今の分では世間並みの頭脳はもつて居るらしい。すば抜けた秀才である要もない。天才でなくも素より良い。普通の人間であれば、それで澤山なんだ。何より結構な話である。そしておまけに病氣一つしないで、醫藥の厄介になるといふ事が絶無と云やあ、いくら感謝しても足りない筈なんだ。それと近頃肥つても來たし、せいも随分のびて來た。營養不良見たいな體つきだつたら、案じもしたが、能く食ひもするので、めつきり發達したやうだ。又暗い影をもつて生れたためか、ひどく内氣なたちで、人なかに出て言葉も云へないし、友達一人もたうとしなかつたのに、近來それも薄らいで、相當腕白もやるし、潑刺たる元氣も出て來た。之は全く幼稚園と云ふ團體生活のおかげだらう。言葉が

きたなくなつたのも幼稚園の賜であるだらうが、そんな事に神経質になつても仕方がない。放ち駒の野育ちで結構だ。今時分から禮儀作法だなんて、京人形ではあるまいし、さうこそくしたつて始まらない。亂暴で親を泣かせる位ひのびやかであつて貰ひ度い。内心それでも困ると思ふには、思ふんだが。

## その二

まことよ

生れぬ前から期待があつたのではなし、生れ落ちても、それが喜びである譯でないし、感情があるにはあつても、只責任感だけだとするなら親の情愛などあらう道理もない。殊に間もなく里子に出るやうな始末では愛情の湧く機會もない。よしんばうちに歸つて來ても一向に我が子だと云ふ實感は出て來ないのである。實のところお前よりも隣近所のちんころの方が餘程可愛かつた。でもお前の口がきけて『お父うさん』と云ふやうになると、さすがに私の氣持ちは動いて來た。それが増々父よくと追ひすがられたのでは、煩惱は次第に募つて來る。それに自分の膝下に斯うしておいて見れば、手足を勞し、心を配らねばならぬこと一通りや二通りでない。時によると疲れきつて熟睡する頃、寝つきが悪くて一晩

中泣き通される夜も一再に止らない。安眠して明日の講義のために頭をよくして置かねばと、あせつて見てもそれが通ずる筈もない。時によるとおしつこの始末を自分でしなくてはならぬ場合もあるし、まかり間違ふとおむつの洗濯さへ辭せられぬ時もある。寒い日にせき一つしても風をひくのでないかと案ぜられ、少し許り食欲が進まなくても苦勞の種である。何もそれは私許りそんな苦をなめて居る譯のものでもなく、世間なべての親達は皆さうである。人間が一人まへになるまでの父母の苦勞と犠牲とは、まことに筆紙につくされぬのを始めて知つた。

かやうな切實な苦勞があればこそ親の愛は深くなる。『はへば起て、起てば歩めの心』も湧いて來る。まことに父が母が、その子に對する煩惱執着と云ふのはかやうに云ふべからざる苦痛や、難儀の結果ではないのか。これは獨り、兒の可愛さに限つた事はない。世事凡てがまさにその通りなのだ。これからお前も一年も経つたら愈々小學校だ。讀方だの書方だの算術だのと、いろんなものを教はるであらう。何も彼も皆出來ると云ふ譯にも行くまい。出來るものは兎に角として、出來ない奴と來たら、頭痛の種となるに違ひない。そんなものに對して、一ヶ月か二ヶ月むやみに熱中して見るが良い。すると、その學課がとても好きになるであらう。一生懸命苦勞したので、そのなかから面白さが湧き出づるのだ。

もちろん私にはこんな経験はいくつも持つて居る。私が生れたのは市から十里許りの寒村であつた。こゝで十位ひまで育つたので、小學校はもとよりその村のだつた。十一のときにN市の小學校に移されたのだが、こゝは開港場の事とて小學校ながら英語が課せられて居た。これまで英語の本はおろか文字さへ見た事はなかつたので、頗る面くらつた。その時間に出て見てもまるで珍ぶん漢ぶんである。おまけに都會育ちの生意氣の子供許りのなかに、山だしのちん入者を得て、皆異様な目どころか、蔑みの眼を見はる。A・B・Cさへ知らないのが物笑ひである。お前は都に育つたおかげで、それに子供雑誌の異常な發達のために、もう夙づくにイロハは愚か、A・B・Cも皆讀めるやうになつて居る。こんなに早く知識をもつのが良いのか、悪いのか未だに私は迷つて居る。とも角私が一度だつて教へもしないのに、何時の間にか覺えて了つて居る。だが私は十一になるまで田舎で英語を見た事がないだから仕方がない。アルファベット一字も讀めない野蠻人だと云ふクラスの者の蔑視は私をむやみに昂奮させた。『何貴様等に敗けるものか』と意地を張り出した。私の意地つ張りは、既にこの頃から芽を出して居たのだ。その氣性の是非善悪はともあれ、今も猶私の性格として残つて居る。それがお前の性分にもちやんと現はれて居る。恐ろしいものだ。それから父に乞ふて英語の夜學に通はしてもらつた。こゝで當時流行のナシヨ

ナル・リーダーを教はつた。もちろん一生懸命勉強した。ものの一學期も通はないうちにめき／＼と上達した。二學期の中頃にもなると、クラスの誰れにも敗けない程になつた。すると今度は餘り英語が出来る生意氣だと云つて、級の腕白小僧からなぐられた事もある。これから英語が非常に面白くて、とても好きになつて了つた。夜學への通學は後に幾年となく續いて、中學の編入に至るまで廢さなかつた。入つた中學はミツシヨン・スクールだけあつて、英語は非常に進んで居たそれでも皆にまけなかつたし、高等學校の入學試験の折にも英語の準備は少しも必要がなかつた。思へば少年時代に痛められたのが藥になつたのだつた。それだから、私は思ふのである。『苦勞は愛の母なり』と。そんなこんなでお前を愛する心は、次第々々に深くなつて行つた。これが親心と云ふものであらう。殊にまたお前が口がきけて來ると、私の姿をば、よしにまれ惡にまれ見出さずには居られないのだ。一向に藝術的タレントはないが小さいくせによく理窟を云ふのだ。全く私の少年時代だ。子はまことに親の延長であり、分身である事を、かうまざ／＼と見せ付けられるに及んでは堪まらないのである。口が利けると云ふのは、言葉の辨へが付いた事なんだ。言葉を理解し、それを表現し得るのは、思想が生れた證據だらう。思想なくして言葉はないし、又言葉のない處に思想はない。思想には個性が宿る。個性のない思想

は死んで居る抽象的な遊戯なのだ。お前の言葉を通じて、お前の思想なり性格なりを讀むことが出来る。そこに私の影、わが個性を發見して驚きを深くするのである。争ひ難きは親子だとの感が強い。私にも猶取柄はあるだらう。良いとすべき性格もたまにはあらう。そんな片鱗をお前のなかに見出した時には、むろん微笑ましさを禁じられない。が自分乍ら苦々しい性分も多分に持合せて居る。それがお前のなかに残されたのを見た時には、自分の醜い鏡を見せ付けられるやうな氣持ちである。我ながらはつと思つては、父の小言を受けるのよりも尙辛い。鋭利なナイフで以つて痛いところを刺されたやうな感じである。わが子を親が教育してるところの騒ぎではない。かうなつては子に依つてどれ程教育されて居るか分らぬのだ。これこそ無言の教育である。教育しようと云ふ教育、所謂職業的教育技巧的教育は力がない。偉大なる教育はかゝる無言の教育でなければならぬ。『勇將兵を談せず、良賈は深く藏す。桃李もの云はず、下自ら徑をなす』との言葉が成程と肯かれる。無技巧の技巧であり、無策が眞の大策だと云ふが、右に云ふ無言の教育と一味相通するものがあるやうだ。

なまじい人間の小知慧を絞つて見たところで、それが何になると云ふんだ。世に功を急いで種々な策動を試みたり、陰謀をたくらんだりする者も尠くない。が結局は命はない。

小供達がこさへた砂の家見たいなもので、果敢なくも壊れては消えて了ふ。計らずたくらまず、それが一番最上の策である。早く偉くならう。急いで功を収めやうとするから、つい陰謀となり、策動となる。でもそんな事で成功したためしがない。功を急いで、目前の小利に走るのは貧乏育ちの常である。貧しいなかに育つた私は兎角あせりたがるのだ。數々ある私の缺點のうちで、これは最大なる缺點だと自ら思つて居る。そこに行くくと裕福に育つた人達は、悠揚迫らざる風格がある。それを私は美しいと思ふのだ。が、富貴門閥に生れたものはおつとりしてから、つきし意地がない。奮闘努力の氣魄がない。これでは豆腐かてんにやく見たいなものだ。ふがいないとすら思はれる。そこへ行くと貧しき兒達は、腕一本で運命を開拓して行く意氣が生れ乍らにして具はつて居る。旺んなる奮闘の精神が燃えて居て、見るからに頼もしい。が残念な事には小利に汲々として居る。まことに慌しい思ひであるところが、私にはこの貧乏人の惡癖が遺憾なく備つて居る。顧みて恥しさに堪えられない。かうした私はそれだから、一瞬たりとも無爲にして居る事がきらひだ。何かしら仕事をして居ねば讀み度いし、讀まねば書き度い。書かねば先輩を訪門すると云つた風で、まるで落付きがない。無理に勝手な理窟をつける譯でもないが、嫌ひな煙草をのみ始めたのも、幾らかでも落付いた氣持を養はんがためであつた。悠々たる時間の楽しみを味つて、

迫らざる風格を養はんとする心からであつた。だがね、いくらあせるからと云つて、陰謀見たいな事はしなかつた。それだけは、いくらか潔癖な性分が許さなかつた。私の身邊は風浪極めて荒い。まるで戦國時代を思はせるものがある。それでもどうやら命ながらへ、首がつながつて居るのは、只その潔癖さのあるが爲めである。これまで私が面倒を見て居た人達が一寸した感情の行違ひや、誤解のために何度となく私に對する陰謀を企てた。併し皆夫等は果敢ないものだつた。それ等の人々は皆かくて自分で墓穴を掘つて入つて行く。まこと心すべき事だ。

かうしたあわてた小人物を作り度くない許りに、私はお前を決して叱からないうちに努めて居る。やれ茶碗をこわしたとか、やれ障子をやぶいたとか、よしんばあつたにしても、悪意あつての事ではない。ほんとうに注意の足りない許りの過ちなのだ。五つや六つの小供に周到な注意を求めやうたつて無理だ。だから怒らうとしても怒られる譯もない。それに又私の方針として——方針と云つて、別に深い教育上の識見も抱負も大してある譯でもないのだが——『してはならぬ』『するな』と云ふ事は一切云はない事にして居る。そんな消極主義は私は嫌いだ。どこまでも、のびく〜と大きくなつてもらい度いのだ。人形の箱詰見たやうな人間になつて、何うする。悪い事なら自分で悪いと覺るが良い。やきもきはたで氣をやんで見たつて仕方がない。自分で覺るのが一番良いんだ。父はね、怒るところか、お前の一切を許し度いと思ふ。それが佛の心ではなかつたか。それが親の慈悲ではないのか。

### その 三

まことよ!

可愛さうにも不幸なお前ではあるが、一步思ひを轉すれば不幸どころか何一つ不足はない筈である。三度々々の御飯も食べられない、所謂缺食兒童と云ふのが、東京の街だけでも何萬と數へ切れない程居よう。この寒空に着るべき衣服なくこゞへて居る者も尠くない。でもお前はまだひもじいと云ふことを知らないし、寒さの辛らさも知るまい。御飯はおろかお密柑だ、チョコレートだ、キヤラメルだ、凡そ菓子でお前のまだ食べない菓子はあるまい。近頃は贅澤になつて、森永のより明治のが良いとか。密柑では駄目だ。ぽんかんをおくれなど駄々を云つて居る。おもちやにした處が、私やうちのものが買つてやつたのは數へる程しかないが、友人達が孤兒を憐れと思つてか、やれ電気自動車だ、やれケーブル・カーだ、やれ競馬と云つた風に積んで山をなす程だ。恐くお前の二疊の室に入り切るまい。幼稚園に通ふにも、きくやだのうめやだのがうつり代り、送り届けては迎ひに行く。物持ちの家

とか華族様なら知らぬこと、何處にそんな贅澤が出来るのだ。歸れば歸るでちゃんとお祖母さんがお三時<sup>つ</sup>を用意して待つて居て下さる。あらゆる物が恵まれて居ると云つて良い。もとより計り難い人生である。殊に何一つ蓄へがあるのでもないのだから何時私の身上に變化があるとも限られない。

が今の分で行つたら出来るだけの教育は授け度いと思ふ。他にお前に譲つたり、遣したりする財産など一文だつてありはしない。今だつて生活の苦しさに喘いで居るし、私の放漫なる性情からして、何時の日になつても財が出来る見込は斷然ない。それが母や親類縁者達の苦にやむ、私の最大缺陷であるさうだが、私はそれ程苦にしては居ない。それどころか私の美點長所だと自ら慢りをさへ感ずる。美田を買ふのが人生終局の望みだと私が思ふなら、最初から私は株屋か御用商人位になつて居る。それで安心出来ないで、今のやうな方向を選んで来た。さらばどうして財のためにあくせく出来やう。と云つて金なんか目をくれて良くないなどと、啖呵を切るものでもない。もと／＼私は無慾恬淡な聖人君子ではない。むしろ人一倍名利に汲々たるものである。それ許りでなく、金のため人に頭を下げねばならぬ事が、どの位あるか分らない。つく／＼と黄金の偉大さを思ひ見る事を一再に止らない。思想だ精神生活だと云つて見たところで、黄金がなければこの世の中で

は發言權が與へられない事も、よう／＼承知して居る。さう云へば私の知人にかう云ふ人が居る。かりにAと呼んでおかう。Aは某地の神學校を出るや某市の教會を牧する事になつた。牧師としての彼は信仰の熱きと忠實なもので、年と共に徳望と信用とが増して行つた。神の奴僕としてよく働いた。どの教會でも執事とか信者總代と云ふ者はきつとブルヂョア級の人である。こんな人は大事にしておかねば、教會の否自分の死活に係るところである。だから愚そかにしないでよく御氣嫌伺ひに罷り出でたものである。今日も今日とて、その總代氏を訪問した。應接に待たさること數刻。ちやうど應接間の隣りが主人の居間になつて居る。彼氏は妻君を呼んで

A 『あゝおいB子、A君が来たさうな、あのわしの古足袋があつたぢやないか。寒いからあれでもやりな』

と、まるで乞食扱ひである。隣室に之をAは聞いて居て熱湯をあびる思ひ。翻然Aは決心した。『神の國がなんだ。信仰がなんだ。金なくて何のこの世に天國ぞや』と云ふ譯で、彼はその日限り牧師をよして、直ちに某會社に入つた。爾來二十年。彼は今日立派な實業家として、結構な活しを立てゝ居る。こんな例は擧げるに違がない。代議士になるのにまづざつと五六萬圓、大臣になるには五十萬から百萬だと云ふ人の噂さ。衆生濟度のお寺様で

さへ、寺の格に依り、住職となり管長となるのも、ちゃんと相場が極つて居ると云ふ話。恐しい事だ。かうなつて來ると、資本主義制度が呪はれるのも無理からぬところがあるやうだ。

頑是もない子供にこんな事聞かして、どうした事だとひと／＼は心配するかも知れない。どうせこの手紙にしてからが、今お前に読んで聞かさうとは思はない。この後二十年三十年たつて、恐らくお前の眼に止るであらう。その時に読んで結構である。その年頃になつて、父としての私の心遣いや氣持が分つて呉れるならば、それで澤山なのだ。そこで先きの話に戻るとしやう。何にもお前に残しておく物はないとして、出来るだけの教育は受けさせておき度い。それが親としての唯一の、そして凡ての責任であり、義務だと思つて居る。考へて見れば、私も教育だけは理想の教育を受けさせて貰つたやうだ。こゝで教育とは學校教育の意味であるが、中學時代基督教の學校であつたのも良かった。高等學校時代東京のを希望して來たのだが、それも許された。大學は京都の教授達をと云ふんで上洛した。先生達には結局容れられなかつたが、良い影響を受けた。年來の宿願たる獨逸留學も協つた。顧みればこの方面では誠に恵まれたものである。それだからもつと何とか偉くなつて居ねばならぬのだが、それはどうにも仕様がなない。と云つて世の人の流行を追ふて、お前は

王篇は昨年中新聞雜誌等に發表せしものより選びとつて、手を加へたものだ。私の現在に於る哲學的立場より、『現代哲學の動向』を眺めて見た。敏感の讀者は、私がヘーゲル哲學を闡明しながら、私自身の哲學へ展開せしめつゝある事を、見て呉れるであらう。ところで哲學が實踐の上から、次第に思想化する時、どうしても哲學史の知識を得んと心が芽生えて來る。かゝる要求のため用意したものが、C篇『哲學思潮の展開』である。それも所謂哲學史になつて了ふと親しみ難いのみか、却つて厭氣がさすものだから、寢るべつて讀める物語風に書いて見た。この篇は日大哲學研究室の平川眞澄學士の手になつたものに、私が加筆整頓するのだった。

序に書いておき度い。本書も他の二、三の勞作のやうに、やはり逗子の濱邊なる養神亭で物せられた。こゝは都より遠くはあらねど、遍旅の氣持を與へるのみか、私にとつて都塵を拂ふに、好きところである。感謝の心さへ覺



えて居る。だが隠遁の場所としては、餘り知られて、訪ひ來る人も多くなりすぎた。かくれる地を、又何處かにさがし求めなくてはならない。

昭和八、二、八、夜半

松原寛

目次

A 哲學の實踐 ..... 一

I 愛兒に與ふ ..... 三

II 亡き父に捧ぐ ..... 二四

III 學窓を出づる甥に與ふ ..... 四二

IV わが後に來る若人へ ..... 六一

V 別れし妻に與ふ ..... 六六

～ B 現代哲學の動向 …………… 九五

I	街頭哲學の論理……………	九七
II	フアッシュズムの論理……………	一二三
III	國家の哲學……………	一二四
IV	『危機』と『戦ひ』の哲學……………	一三二
V	現代哲學の展望……………	一四九
VI	哲學の予望……………	一六五

高等師範の附屬にせねばだの、中學は是非一中にと考へて居る譯でもない。大きくなるにつれ、お前はなるべく自分の好きな學校を選ぶが良い。親の名譽心を満足させるために、あれだこれだと無暗に指圖するのは私は嫌ひだ。お前の職業にしたつてさうだ。父が學徒になつて居るからとて、自分も學者にならねばなど云ふ義理づき合ひは眞平御免だ。自分の好きな仕事を勝手に選擇してもらひ度い。その代り、大學卒業までは、今の分なら、先づ私の責任として、それから先きは私は知らない。どちらの方向にしる、飽迄自分の運命は自分で開拓して行く可しだ。商人になるから資本金を出せと云つたつて、出す金もなからうし、慥さへてやらうとも思はない。必要のものなら自分で工面するが良い。大學まで出してもらつたのなら、此の世の中で最大の幸福者だ。それに何時まで親を頼みとするのだ。何時までながらへる親の命ぞやだ。かくても尙親を頼るやうでは、到底一本立ちは望まれない。私にしたつてお前から老後を養つてもらはうなど夢思つて居ない。死ぬまで私は何かして働かうと思つて居る。お前は親につくす可き事があるやうだつたら、何なりお前の考へに従つてするが良い。

最初から暗い影を擔つて來たお前ではあるが、斯やうに考へて來れば、あな勝ちに悲しむに當るまい。よしこの後どんな運命に遭はうとも、嘆き悲しむ要もなからう。何しろ『與

へられたるものは至高なり最上なり」との心境が一番大事だ。慾を云つたら限りがない。不平を云ひ始めたら果しはない。むかし京は四條の橋である。ちやうど大晦日で、夜は更けても、行き交ふ人がひきも切らない有様。その寒空の夜に親子の乞食が橋の下でこもをかぶつて寝て居たと云ふのだ。親なる乞食が子に向つて云ふやうには

『これ悴見ろよ、有難いことだと思へよ。世間の人達は大晦日と云ふんで、この寒い晩に夜が更けても、坐る事すら出来ないで居るではないか。乞食して居ればこそ、年の瀬も餘所に安閑と寝て居られるのでないか』

と説法したとやら。物は考へやうだ。もちろん乞食になれと勧める譯ではないが、かやうな境涯にも猶満足は見出される。否感謝ですらある。斯様に思へば何の恨む事があらう。よしこの後はお前の母として、どんな人が與へられるかも分らない。又生さぬ仲としてどんな憂き目を見まいものとも限らない。萬が一そんな場合があつたとて夢ゆめ不満なんかもらすまいぞ。さう云ふ事は皆お前の貴い経験でなければならぬ。夏の休みだつたか、いつものやうに私は旅に出た。宿で獨歩全集が見附かつたから、手當り次第に讀んだものだ。彼の有名な『運命論者』なんかを讀むと、作者に暗影がついて廻るものがある。之は私の推量許りではなく、評傳を見てもかう云つた不遇の中に人となつたやうに思はれる。でもさうした彼の經歷は彼特有の性格を形作り、彼の人生觀をなさしむるのであつた。かゝる特有な經歷、かゝる性格、彼の人生觀があつたればこそ、かのやうな作物を生み、作家となれたのだ。不幸だと思へば、世上一切のものは悲しみの種であるし、喜びと思へば凡てが歡喜の現はれである。不幸の反面には幸があふれて居る。されば何事にも思煩らう事はない。風吹かば吹けだ。雨降らば降れだ。嵐の後にはきつと晴朗の日が来るのだ。否波瀾があつてこそ、人生は面白いんだ。暗影があつてこそ、光明の有難さが分る。何をなげき、何を悲しむと云ふのだ。只勇敢なる人生の闘士となれよ。こゝに私の『戦ひの哲學』が生れて来るんだが、もう書くのに勞かれた。又語る機會もあらう。今宵もまどかな夢を結べよ。私も磯打つ波の聲をきゝながら、眠に就かうと思ふ。

## II 亡き父に捧ぐ

### その一

去年の十一月は父上が、永遠の眠に就かれましてから十七週忌に當るので御座いました。くには法要が営まれましたので、私は當然墓參をしなければならぬのでムいましたのに、それも果されませんでした。ちやうど父上の命日に當る日は市内の某所なる本願寺系の寺院で講演する事となつて居ましたゆゑ、出かけました。戊申詔書發布十週年記念のための講演とか申すので、この十年の間の歴史を顧みながら詔書の意義を考へ度いなど、とみちみち案をねつて参りました。ところが會場に出て見ますと大抵六十前後の老人達が多うムいました。お父うさんお母あさんと云つた感じの人達許りでムいました。自然わが父上のありし日の事などが思出されて参るのでた。で私は父上の追憶談を以て講演を終始いたしましたやうな次第、墓參致さなかつた償ひの追善供養と申しませうか。お亡くなりになつたのが、ちやうど私の大學二年の頃でムいました。御危篤だとの急電に接して、秋雨そぼふる京洛の街を七條驛に急ぐのでした。その一二日前の晩に、私は父上の夢を見ました。

夫れで何かしらの豫感を覺えてる頃の電報なので、私ははつと致しました。夢に就て不思議さを覺えたのは、それからの事ではありますが、私が滞歐の折にはよく亡き父上の夢を見たものでした。いつも例の凜然とした態度で、何かしら私に意見して居られるのであります。この夢は外遊に於る兎もすれば荒さまうとする氣持をば、大變緊張させないではおきませんでした。今日でもよくそんな夜があります。迷信だと云つて笑はれるかも知れませんが、斯うして靈の存在と云ふか、死後の生活と云つたものを、否定出来ないで居ります。

先達省線電車のなかでN大學出身のO君に遭ひました。ちやうど今心靈研究の實驗から歸るところだと申して居ました。彼はその心靈研究の菊花會なるものを、同友と共同にやつて居るのです。先頃も宗教問題研究會でその實驗の一端を彼が発表しましたのは、大變皆の注意と興味とを惹いたものでした。電車のなかでの話に依りますと、今度の實驗に顯れた靈は、たしかに故H博士の夫であつたと云ふのです。H博士は昨秋學校の講義からの歸途不慮の災のため亡くられたのでした。H博士が學校の教授であつたのと、又生前に種々面倒を見て頂いた事もあつたりして、關係も深かうムいましたので、お葬式の始末などに就てお手傳ひもしました。つひそんな行懸りから、御遺族の方達をもよく存じて居りますやうな關係で、O君の話には一層關心がもたれました。H博士は生前から、やはり菊花會の

仕事に興味を覚えて居られました様子も聞いて居りました。一昨年帝大で宗教學大會の折にも、この方面に關するH博士の研究發表があつた程でした。今度の實驗では長子なるS氏と未亡人と親しく話が交はされたと申します。その聲も生前の博士のに寸分違はないのみか、こみ入つた家庭のこま／＼な問題に、立入つて話される處なども到底他の人に出來る事柄ではない、とO君は申すのでした。この話を科學者からは、馬鹿なと一笑に附されるかも知れませれが、私の見方は自ら違つたものがムいます。只夢にお姿を見ただけでも、現つてしかない、と思ふやうな私でありますもの。

子たるものが、父母の亡き佛を、夢に現に偲ぶと云ふのは不思議ではありませんが、私の場合には格段に氣になつて仕方がないので。と申しますのは、亡き父上に實に濟まなかつた、不孝の子であつたと云ふ自責の念に、支配されて居るからではないかと思ふのです。兎もあれ電報を手にするや、私は取るものも取敢えず歸省いたしました。そして足らぬ乍ら看護も致しました。安んじて父上は眠に就かれました。それでも私は猶衷心忸怩たるものがありました。父の死を早めたのは私でないかとの念が、當時から今に至るまで消え失せません。八つ違ひの兄と二人きりの我等兄弟でありました。末つ子の所爲もあつたでせうが、私へは格段の愛を濺いで居られました。青年期殊に中學を出るまで私は善良な子で

ありました。旁々以て私には深き思ひをかけて居られました。どんな事があつても、自分の傍を離せないとは、父上の願ひでした。それを振り切つて私は學を志して笈を負ひ上京しました。勿論只ほんの三年と云ふ約束で、御納得をえた上での事でした。愈々卒業となるや、態々老軀を提げて、都まで私を迎ひに來られました。かうなつては、何で私が心を鬼にしても東京に止つて、もつと勉強するんだと頑張ればませう。やれ／＼と父上は心から喜ばれました。共々一緒に國に歸つて參りました。歸宅はいたしましたものの、家に止つて家業にいそむなど、と云ふ氣が私にはさら／＼ムいません。どうしたらば父上を説得して再度上京するかとの事許り、私の頭を支配して居ました。來る日も來る日も私は頑強に説きました。否哀れみを乞ひました。かやうにする事數週間に及びましたが、一向に私が願ひは容れられません。

萬策こゝに盡き果て、逃げるやうにして私は上京いたしました。之に依つて、父上のお怒りは極に達したのも想像に餘りある事でした。東京から不孝を詫びる綿々の手紙を書きました。でもそれが何の役に立ちませう。兄から簡単に勘當すると云ふ葉書が參つたのみでした。勿論私は覺悟の事とは申せ泣きました。家から放たれ親兄弟から見限られ、文字通り孤兒になりました。天涯只の獨りぼつちであります。夫から私の悲惨な生活は申す

までもありません。もとより誰を恨まん術もありません。でも神未だ我を捨て給はざりしものか、どうにかかうにか、望みの如くK大學に入れました。その日／＼の露命をつないで學校に通ふだけには漕ぎつけました。その間或はめしにもあり附けず、風呂錢だになくなつたと云ふ事は、申すだけ愚かで△います。併し石にかじり附いても、我學を捨てない、屍になつても家の門はくぐらないとの決心も致しました。でも最小の安定を得るに及んで、又御報告申上げましたら、寢具と身の廻りのものだけは恵み送られたのでした。それでも異郷にさ迷へる孤兒には無限の感謝でした。が、斯る中に本家なるM家から爾今親類縁者の交りを絶つとの破門状が、書留郵便で以つて送られました。M家ではそれを今では忘れて居るかのやうですが、私は今に猶ほ憤りが身にこたへて居ます。何も不義いたすらの出奔でもない。道樂に血道をあげて居る譯でもない。只攻學の一心に燃えての所行ではないか。でも無斷の家出とあつては、親に對する不孝の罪もとより許さるべくもない。が本家だと云つて、何もM家から彼是云はれる筋はない。今の私の窮状は見えすいて居る。態々破門状だの、縁絶状だのとは何事だと云ふのが私の腹でした。それに年來M家は好意と深切の名のもとに、父上を壓迫して居たんだ、と云ふやうなお話しを、耳に致して居りましたので、餘計に私の神経を尖がらしたもので△いました。

かうしてももの二三ヶ月も経ちますころ、思ひもかけぬS氏の名前で書留郵便を手にするのでした。不思議に思ひ乍らも開封しますと、それは父上から不自由をして居るであらうとお心遣ひから、兄に内密で送られた爲替で△いました。親が子を思ふの情はかうも深きものかと、私の感は切なるものでした。私は泣きました。父の情に打たれた事、この時ほど強かつた事は△いません。不孝の罪も今は責むるでもなく、只切々たる私への濃まやかな愛が書き記されてあります。勘當と申しますのも、只兄や嫂に對する手前の義理から許りだと云ふ事も窺はれました。お前がそれほどまでも學問がし度いと云ふものを、何で拒ばうなど思ふものか、とも書かれて△いました。今三年大學の課程を待てと云はば待たぬでもない。併し大學を卒えなば又外遊の旅に出度いと知れ切つて居る。だが、いつまで、ながらへる私の命と思ふか。私の願ひは只お前のそばで死に度い許りなのだ。だのにお前は學問だ／＼と云つて飛んで行く。只お前をのみ頼りに生きて來た私であつた。お前を遠い地に送つて、私は何を望みに生きて居やう、とも書いてありました。之を見てどうして泣かないで居られませう。それとも知らず、只一片の希望に燃えて、無我夢中に行動いたしました私の浅慮、今猶悔いられて仕方が△いませんでした。兄が家に在つても、父上とはしつくりしなかつた事も、承知して居りました。よく意見の衝突なども△いまし

た。その是非を論らうまでもありませんが、双方の人生觀の相違や性格の違ひから、それは避けられなかつたものでういませう。自然私は父上から只一人の思ひ子となり、常々私への期待は誠に大きくなつたのでういました。それなのに、こんな始末を仕出かしたのでういますから、失望落膽もとより想像に難くないのであります。愚かな私は當時そんなに深く省察いたす暇もういませぬ。それが父上にとつては、命をもぎ取られるやうに辛かつた。人生に對する意氣をさへ沮喪せしむるものでした。遂にその死をさへ早めた、と思はずには居られない譯でういます。夢幻しのうちに昔し乍らの嚴然たるお姿を見まつるのも、全くこの自責の念の現はれでもういませうし、又延ひては靈魂永に地上に在りと思はないで居られぬ次第であります。カントが靈魂の存在は、良心の要請だと、申しましたのが思出されます。

## その二

心血を濺いで愛した子に叛かれねばならなかつた父上の一生は、まことに憐れにも、不幸なものでういました。恵まれない、痛ましい御一生でういました。それ許りでなく現世の幸にもつたなかつた、と申す外はういませぬ。もとより商家に生れ育ち、御自分も商人として終始されたのでういました。無論負債山積とか、破産の浮目を見ると云つたやうな悲劇はういませぬでした。人に迷惑をかけない、信用は傷けない、との處世の方針は一糸亂れやうもありませんでした。N市に店舗を開かれて以來、堅實な基礎を確立して逝かれたのでういませぬから、もとより失敗や不運とは申されませぬ。手堅い一方で、山師的な華々しさがなかつたのみでういます。父上はもちろん商人としての一生に、露聊かの疑惑をもつてお出でではありませんでしたが、私の今の眼から見ますと、商人としては、實業家としては餘りに勿體ない人だつたと思はれます。餘りに律義な道德家で在りました。それに整然たる論理の體系さへもつてお出でになりました。商人や實業家と云ふものが、懸引と政策の一點張りで嘘八百を並べねばとは申しませんが、こゝに商人たるべき、ハンディキャップがあつたのではういませぬか。私は父上のお叱りを受けたのは、誠に少なかつた。恐くは五指を屈するに足りない位、寥々たるものであります。その代はり一度叱られると決して、一時間や二時間では濟まない。一日二日に亘ると云つた風でういました。それ程辛辣峻嚴を極めたものであります。その論旨は實によく整つて、些の無駄がない。少しも反抗どころか嚴然と一貫せる論理の前には、只々頭の下がるのみであります。どう云ふ場合に、どんなに叱られたか今でも尙明らかに記憶に残つて居ります。それは私を育てる大きな力でういました。尙私を作る最大の力とさへなつて居ります。かう考へて來る

と父上は立派な教育者であつたと思ふのです。小さい事などには一向に小言も云はれず、まるで知らないかと云つた風です。が一度事件があると、過去一年でも二年でもの間になした私の非行をば凡て覺へて居られる。よくもこんなに記憶されて居るものだと、實に驚嘆する許りです。だから、こちらでは益々以て恐縮して頭は上がらない、一言の文句も云へない、と云ふ譯で非常に効果的であります。こんな處が教育家となられたらば、素晴らしいものであつたらうにと、思つたり致します。

それに父上には仁侠の精神があつた。弱者を見て援ける、強者や特權階級に對して飽迄たてつく、斷じて頭を下げない、と云ふ稜々の氣骨があつた。親分肌があつた。これが凡そ實業家として立つに、不都合な氣持ちのやうでした。今頃私はもし自分が徳川時代に生れて居たら何になつて居たらう、と時々考へて見るのですが、どうも私は俠客にでもなつて居たらうと思ふのです。之ぞと云つて外に私のなし得る仕事はなかつたらうと思ふのです。やれ正成だの、やれ時宗だのと人は申すやうですが、我等平民の子は、忠義貞節を盡くさうたつて、盡くす機會もないし、與へられもしますまい。かと云つて、草履取りをして風雲を狙らう秀吉の如き忍耐も、氣略も私には望めません。ところが俠客だどすぶの素町人で良い譯ですし、強者に双向つて弱者の味方となる彼等は男の中の男と、思はれて仕方がありません。尤も世を渡る術として、賭博をやらねばならぬやうですが、之には一寸弱ります。と云つて賭博は罪惡だ、法律ですら禁じて居るではないか、と云ふ道學者を氣取る譯では無いまい。資本主義と云ふのが既に曲者でして、一種の賭博見たいなものではありますまいか。現に馬券を許し、株式の投機を公許されて居るでは無いまいか。だのにさいころをころがす事のみ罪だ、惡だと云ふのが、私には分らないのです。が、どちらにせよ、私には博才がからないんです。第一勝負事が一切嫌ひなのです。碁將棋を始めとし、玉突麻雀など凡そ興味が無いんです。何ちらかと云へば、デレツタントに近いまで種々な事に興味を覺える方でいます。學問よし、藝術よし、政治よし、世上一切の事に對してあらずもがなの關心が持てますが、勝まけの事にはまるきり趣味が見出せません。先達もある青年が、

『あなたは勝負事は餘りやりませんね』  
と申しますんで、

『人生その者が勝負ぢやないか。別に碁や將棋でもあるまい。』  
と申した事でございました。

少し理窟めいて參りますが、序にもう少し俠客に就て考へて見させて頂きます。と申し



ますが、彼等の存在は全く日本特有の存在ではなかつたかと思ふのです。英國で云ふ Knight 獨逸で申す Kavalier などは、何でも十字軍の頃から現はれたさうで、之等の騎士なるものは、基督教的人道主義から生れたやうに聞いて居ます。やはり弱者を援けると云ふところに基調をおいて、遂に婦人の尊敬と云ふことまでなつた。一寸日本の俠客道と似て居るやうなものの、俠客道は日本の武士道的精神を根柢にして、あの徳川の封建制度を背景として生れたと思はれます。しいたげられた民衆の味方となり、そのため萬丈の氣焰をあげるあの風格に至つては、私はたまらなく好きです。騎士に於てはかゝる風貌、かゝる氣骨は現はれて居りません。俠客に於る功利打算を超越し、一身を賭して顧みない態度は、むしろ崇高に近いものがあるではないか。明治の維新と云ふのは徳川の武門政權に對する金權の擡頭であつたと私は觀ます。資本主義制度の進出であり、その發展であつた。經濟思想としては、資本主義精神であり、倫理道德の思想としては、功利主義である。かかる時代に俠客道は、其の威を振ふことが出来なくなつた。俠客を失つた明治以來の社會を、私は淋しくも思ふのです。而も彼等には溢るゝ人間味があつた。熱い血熱い涙が通つて居た。少くも彼等は偽善者ではなかつた。朗かさをもつて居た。近代明朗色の味がある。現代に於てはその倂を現政友會總裁鈴木喜三郎氏に見出す。或る知遇を氏に得て居るの故を以て私は云ふのではない。陰險邪惡とすら見られる現代政治家に於て、男らしき男、否男のなかの男を氏に見出さずに居られない。犬養總裁逝いて後繼問題紛糾の折『おれが總裁になり度いんだから、俺にやらせろ』と云ふんです。誠に男らしいではありませんか。露骨なる人間味を出して、ひた押しに押して行つた。この朗らかさが私は好きです。餘り長々と俠客論でもありますまいから、よしませうが、今一度現代に於て俠客華かなるの時代を現出して見度いと思ひます。尤も賭博を奨励しろと云ふのではなく、あの氣骨、あの氣分が見度いのです。

かうした氣持はやはり私は父上から享けたものと思ひます。さきに私は父上がよき私の教育者であつたと申しました。私を今日まで教育して呉れた人々には、小學中學の先生達を始めとして、大學の教授方乃至は基督や釋迦やカントやヘーゲル等を數へねばなりません。併し何と云つても、父上は最大の教育者であつた。私の今日を作る根柢を與へた人は、父を措いてないのです。父上の性格、その氣稟又は處世の態度に至るまで、凡て脈々として私のなかに生きて居ると思はれるのです。私と云ふ人間なる建造物の製圖をこしらへ、鐵筋や鐵骨などの骨組をちやんとしたのは父上の他にはなく、他の諸々の人は只コンクリートであり、室内裝飾をして呉れられたのに過ぎないのではありますまいか。斯やうな骨

組を作るについて、母上を逸する事は出来ません。母上から得た最大なものは、宗教的情操でありました。母上には理窟は一つもなかつた。只宗教の實踐でした。母上の父上に對する絶對服従の姿にも私は打たれました。父上は家庭に於て、否母に對して暴君でした。或夜なんか深夜煙草を飲まうとマツチをすられたら、一寸したはづみで、少し火傷をされた。すると父上はやけに怒られた。果てはマツチの置き所が悪いんだと云ふんで、ひどく母上を叱られた事なんかをいまだに覚えて居ます。もちろん少しも母上に罪とがあらう筈はありません。こんな無理難題であつても母上は露聊かも反抗だの口論だのされなかつた。只

「私が悪うムいました」

と平身低頭の詫びである。之では喧嘩になりやうもありません。こんな風ですから、父上と母上とのいさかいなど、私達の記憶には少しも残つて居ません。いかにも母上は賢妻ではなかつたかも知れません。況んや賢者を振まく人ではなかつた。でも、

「幼にして親に従ひ、嫁して夫に従ひ、老いて子に従ふ」

と云ふのを理窟ぬきに實踐された人であります。トルストイだつたかの作物に出て来る或る王様があつた。この王は何か感ずるところあつて、百姓にならうとした。すると王妃は何か譯は分らないが「糸は針について行くものだ」と云つて、百姓になつたと云ふ話です。

母上がその夫たる父上に對せられる態度は、まさにこの王妃であつたのです。

一體父上はA家から出てM家にどうして養子として入られたものか、今に至るまで分らないのです。父上から承はりませんでした。母上に今お尋ねしても良いんですが、何だか變で伺ふ譯にも行かないやうです。M家に大した財産があつたでもないし、かと云つて懇望されるやうな美人と云ふ譯ではないし、養子にならねばと云ふ複雑な事情もなさうだし、兎も角、私には分りません。併し家に於る様子は所謂「小糠三合の養子」ではなかつた。氣兼ねや遠慮どころか颯爽たるものでした。否タイラントでした。暴君と申しましたが、酒癖が悪いのでもありません。酒を嗜まれなかつた。晩酌されるやうな事もなかつた位です。我儘な癩癩持であつた。この父を御して行かれるのは母上でなくば出来ない藝でした。御すると云へば何かしらの指導原理をもつた方法論なので、賢明さを必要としますが母上のは、賢明さから来る制御の意ではなかつた。自らなる服従でした。ただこれ命従ふと云ふのは、原理も道徳論もない習ひ性となつた、母の徳でありました。母上の態度や氣持は、全く婦人道德や「女性の鑑」を超越した宗教の域に入つて居た、と申して良いのであります。いかにも父上は世運に遭はず、子に恵まれない不幸な一生であつたと申しました。でも温順貞淑その者の妻たる母上が居られたのは、まことに恵まれた家庭であつた。殊に

不遇なる私の家庭生活を顧みて、愈々その感を深かうするのであります。

世に良妻賢母と申しますが、婦人は只々良き妻であれば、それで澤山です。夫に仕へて良き妻であるならば、悪き母たる筈がないのです。私は母上からああだ、こうだと教はり致しません。只目のあたり見せられたのが、夫に仕ふる實踐でありました。之がどれだけ私を教へて呉れたか分りません。孟母は孟子の教育のために、三度び居を變へたと傳へられて居ます。私の母には、それ程教育上の理論や抱負があつたのではない。沈黙は偉大だとも申します。母上は云はんと欲して、強ひて沈黙を粧ふ技巧家ではなかつた。只黙々として夫に従ふ。夫れが母の全部であつた。之がいかに宗教的氣分を味はして呉れた事か分りません。理窟のない、只單なる婦徳の實踐で良い。それが子にとつて最良の教育でなくて何でありませう。私は教養の足りない女性を妻として失敗しました。又所謂教育ある婦人を娶つて再び失敗しました。あらゆる結婚生活に於て破産した私です。夫婦生活に就て云ふべき何の資格がありません。併し敗軍の將として、もし後車の戒めとも意味で云ふ事を許されるならば、女性には理窟は一切要らないと云ふ事です。婦徳の實踐だにあれば、それで結構だと思ひます。婦徳とは「從順」を意味します。男はその性能として外で働かねばならない。人生に於ける闘士であります。云ふに云へない苦戦をいかに多く嘗めね

ばならぬ事か。それだのに家庭に入つてまでも妻から、がちや／＼と理窟を云はれたら、やり切れたものではありません。理論のないところに家庭の樂園がある。と申せば女を人形にするものだ、奴隷にするものだ、近代教育の女性から異論が出ませう。でも從順の徳は人形の道德ではない。寛容であります。信頼であります。否心愛です一旦許した以上何の理窟ぞやです。文句があるやうだつたら最初から夫婦にならなきや良いでせう。「法然にすかし參らせて地獄に陥ちなん」とも云ふやうな氣持にこそ、眞に夫婦の愛がある。かうなつては單なる道德ではなく宗教の世界でありませう。かくてこそ、ほんとうに、家庭が人倫の出發點であり、その最初の舞臺となり得ませう。人間が作られ、育てられる道場となり得ませう。

母上は説かず語らず、不言の上を示されたのでした。私は全くよき父、よき母を與へられました。限らない感謝で△います。と申せば徒らに自分の親達を賞めすぎるものだと批難されるかも知れません。これに就て私は犬養健氏の言葉を尊いものと思ひます。一體氏に關して私は多くの興味を持つものではありませんでした、いつか父毅氏に關する「わが父を語る」との一文を讀んだ事があります。その中に「自分の親をけなすも馬鹿だし、又自分の親を賞めるも馬鹿だ。同じ馬鹿なら賞めて馬鹿になり度い。」との言葉がありまし

た。この語は大變私の氣に入つて氏に對し好感をもつに至つた。私も亦健氏の愚かさを學び度いのでありますが、總じて世のあらゆる父、凡ての母はその子らに取つて最も良き教育者であると思ひます。今一つどうしても母上の美德を擧げておかねばなりません。母は自ら一文不知を以て任ずる人であります。わが知わが賢を慢らうなどの事は、藥にし度くもありません。謙讓の徳とは母上にのみ許される事でありませう。従つて決して傲つた生活がない。粗衣粗食をもつて無上の恩寵だと思つて居られます。國に歸られる時でも、決して二等の汽車に乗らうとされない。況して寢臺など、とんでもない話です。切符を買つて上げても、どうしても三等のと買ひ換へなければならぬ。『どうせ着く時間は二等も三等も同じだらう』と云はれるのです。この天真なる警句には頭が下がります。いつかも四谷に居ました頃、住居を移し度いので、方々に家を求めた結果麻布に頃合のものを見付けました。して之を母に報告して、更に言葉を附して、

『ですが遺憾ながら坂を下りたどん底でしてね』と申しますと

『坂下ならばこれから上るんだから良いぢやないか』

と云はれます。かうした一寸の言葉にも、母の人生觀の片鱗が窺はれて有難くなるのです。顧みますと、父上を私が殆んど悶死せしめたやうな形でゐいますから、もとより何一つ

孝行らしい孝行をいたして居りません。それは若氣の至りで、先づ是非なきものとしても今老いたる母上には如何？ 再び顧みて云ふべき言葉を知りません。母上はもとより國なる兄の家に在らるべきであります。ですが私の憐なる家庭生活のために、乞ふて上京を求め都に且暮を送られて居ます。それもはや四年に及んで居ます。幼な兒の保育に當つて居られます。母のこの地に於ける不便なる生活も、全く私の便宜に出でたもので申譯もありません。話相手もないし親類縁者の行き來はないし、國との生活様式はまるで異うて居ますし、どんなに苦痛な事でゐませう。まことに想像される次第であります。どんなに難儀な生活であらうと、不平一つ不満の一語も漏されない母なのです。坊やのために良き母を見出したらば、早く國に歸り度いと念も切りに動いて居るやうです。が、浮世はこゝにも亦儘ならず、未だに母の意を安んずる能はざる有様でゐいます。いつの日か安心を得させ参らし得るか、感慨久しうするのみでゐいます。否、私の破産的な性格を以てしては、遂に之れも仇なる望みとさへ思はれて、再び長大息するのであります。

父上に捧ぐる一書は思はずも懺悔の文となつて了ひました。併し亡き父の靈の前に出では悔恨の涙のみが先きに立つのです。ふびんなものと思召し下さい。憐れと思召し下さい。今十年も経ちましたら、も少しは纏つた人間になり得るでゐませうか知ら？。

### III 學窓を出づる甥に與ふ

#### その一

Hよ

お前も今年たつと大學の學窓を出でやうとして居る。お前の友達は休み毎に故郷へ歸省するんだが、お前は上京以來數年の間も國へは歸れない。不遇な自分をかこつ事もあらう。思遣りのない私だと恨みに思ふ事もあらう。併し早いものだ、あたふたと時は流れ去つた、もうあと一年で學士さまになれるんだ。待ち遠しい五年ではあつたらう。國なるお前の母がどんなに待たれる事か、妹達が、どんなに首を長うして居る事だらう。何にしても試験は何課目受けたか知れないが、あとは論文だけだ。論文の如何は終生つき纏ふものだ。點數だの卒業成績だの必ずしも問題ぢやない。が、あらん限りの努力を捧げておくがよい。兎もあれ學窓生活もまさに終らんとするのである。卒業の喜びもあるが、又他面之で愈々學生生活に分れを告げねばならぬか、と思へばうら悲しい思ひも禁じられまい。まあ悲喜交々と云つた形であらう。常日頃同じ家に起臥して居るものの、話と云つては事務

上の事許りなので、こゝにお前の中學卒業以來を顧み、又學窓以後の生活に就て、語つておくのは無駄でもあるまい。

お前が始めて上京して來たのは、何でも中學四年になつた許りの春休みであつたらうか。たしか見學のつもりであつたやうだ。文學的の興味があり、繪心がある事や、なんぞの事を前々見知つて私は正直のところ囑望すること尠からざるものがあつた。中學を出て、その年に一高に入れるやうだつたら、私が一切責任をもつてもよろしいと約束したのだつた。と云つてお前に對する教育の方針や、將來の進路に就て、それまで、お前の父と私はまるで話すことはなかつた。が口にこそ出さね、私は心中獨りでお前に多少の期待を豫ねてからもつて居た。お前が上京して、種々メンタルテストをやつて見て、私の期待は一層強められた。うちの家の周圍には皆實業だ、商賣だと云つて儲かる事許りに忙殺されて居るので、少しは學問や教養を心懸けるものがあつても良いに、それも望めないしと内々感じた折柄、お前の存在は私をして微笑せしむるに十分であつた。さては中學卒業後の學窓生活を喜んで豫約するのであつた。但し一高の入學と云ふ條件が付いて居た。無論お前は大きな鞭撻と將來に對する大きな希望とを得て、欣然國に歸つて行つた。二年たつと愈々卒業の日が來た。お前の祖母はひよつこり上京して私を訪ねられた。兄のうちが、財界不況をくつて家

業思はしからざるを訴へられるのであつた。それにはもつと勉強し度い一念であるので、私に引受けてもらい度いと相談である。母から態々相談を受けるまでもなく、私の胸中既に期するものはあつた。が、私のうちの状勢はこの前お前が上京した頃とは違つて来て居る。よしんば経済的にその負擔に堪えられるにしても、私の獨斷專行は許されなくなつて、私は自分の家計ながら氣兼ねなければならぬ破目になつて居る。併し何にあれ今はいざこざ云つて居る場合でないで、母の申出でをば快く承知した。お前からは、ところが、往年の約束の履行をば命令的に迫つて来るやうな始末。私は少々むつとした。何も命令的に要求される謂れはない。當然の權利だと主張されても困る。そんなに世間知らずの坊ちゃんでは案じられる。だから私かに覺悟はして居るものの返事も出さなかつた。だが有無を云はさずお前は遂にやつて来た。で四年五年時代の學校成績を調べて見ると、案に相違して大變に悪いのである。一高に入れるかと聞いて見れば、全く自信がないと云ふ。W大學の文科にでも入らうと云ふのである。お前は自分の要求だけを主張して、約束は少しも完ふして居ない。そこで私は怒つた。もうすぐにも國に歸れと云ふのだつた。喜び勇んで来て見るとこの見幕である。希望も期待も全く裏切られて、お前は啞然とした形ちである。一夜お前は泣き通した。今更のやうに世間の恐ろしさを知つたやうだつた。私にして見れば、

必ずしも見榮や外聞のために、一高に入れと云ふのではない。一高に入らなければ學問が出来ぬと云ふのではもとよりのない。それ程の勉強も、準備も努力もして居ない事を責めるのである。自分の責任はほつたらかして置いて、さて豫ねての約束を履行して呉れと云へた義理でもなからう。約束や義理などは、まづ兎も角として、中學でろくに勉強もしないで、安易の道のみ目ざして上の學校に進んで見たところで、夫れで何になる。只會社員か官吏になると云ふのなら夫れもよからう。だが文科となるとさうは行かない。ほんとうに學問に興味を見出す人のみ來るところである。でなくば無意味なのだ。將來學問研究の資格ありや否やは、中學の素地如何に依つて決せられる。然るにお前はそれを立證すべき何者もないのだ。私が怒つたのも無理もないであらう。それにしても、少し辛らく私は當りすぎたやうである。と云ふのも、私が獨り合點でお前の上京を許したと云ふので、内心穩かでなかつた且子が居たゆゑ、彼女に對する申譯のやうな、當つけのやうな氣持も多分に含まれて居るのだつた。でも何としても今では國に歸る顔はないと云ふ。それも尤もな事ではあるし、今更商人となるべきお前の性格でもない。事態容易でないのを充分知らしめておいて、勉強し度いならば、學問させる他に道はないと。例へ事情が何であらうとも、私もさうは心を決めて居た。

かうして之からお前のN大學豫科の生活が始まる。中學時代の成績不良なのを懲りて居るので、私は勉強しろと絶えず注意したものであつた。ところが一學年の終りの結果は、甚だ以て思はしくない。それだからと云つて、穴勝ちやかましく云へた義理ではない。何故つて私も見事高等學校に、一度で通るには通れたものの入つてからはやたらに怠けた。出来るだけ學校はさぼつた。ほんとに學校がつまらなかつたからでもあつた。當時の氣持は舊著『宗教の門』や『哲學の門』のなかに書いておいたから、こゝに詳述するでもない。かく、學校を怠けむやみに種ろんな著作を涉獵した。ろくに分りもしない難しい哲學書を耽讀したのは、云ふまでもないが、文學ものもあさり廻はしたものだつた。外國文學は申すに及ばず、國文學にしたつて、私が専門に研究した事はないのだが、今でも大學で文學概論の講義を擔當して居るのは、多少無理は無理にしても、あの頃の濫讀が大いに素地をなして居るやうに思はれる。とは云へ、爲めに學校の成績と來たら、まことに慘憺たるもので、まあお情け及第と云ふところであつたらう。そんなみじめな有様で三年間卒業まで通して了つた。かう云ふ仕儀なのでお前を叱るなどと云へたものではないが、將來を案ぜられたし、それでは私への義理も濟まない譯だらうし、中學の事もあるのだから、こゝ一番雪辱の意味もあらうでないか。でなけりや面目も立つまい。だが、一向にお前はその舉に

出でやうともせず、まことに恬然たるものであつた。そこで私は盛んに怒鳴つた。「一體これはどうする積りか」と。元來お前は他に對しては、どうか知らないが、私の前に來ると黙して了つて、少しも口をきかない。この時などはどうしたのか、兎も角しやあゝとして、あなたの時は英雄主義の頃であつたらうが、何もヒロイズムのみが唯一の人生觀でもあるまい。學校の成績もよくし、天晴れ秀才とうたわれて、華かに社會に送られて行く。とん／＼びようしに運命を開拓して行くのもよからう。が、それは畢竟ヒロイズムの夢ではないかと云ふのである。私はがくつとした。さうだ私には私の人生觀でもつて、世に處して來たが、お前は又お前の人生觀がある。兎や角云ふのが間違つて居る。これまで私の人生觀をば無理にもお前に強ひやうとした。それは私の誤りであつた。爾來一切何も云はない事にする。その時さう私は決心するのであつた。尤も大學になつてからは、お前も大いに反省するかして大變面目を改めたやうではあるが、殊にそれからと云ふものは何も云はないで來た。従つて凡ての責任はお前自ら負はねばならぬ。餘りに目にあまる事があつたかして、お前の祖母はたしなめて呉れとの事一再ではなかつた。でも私はほつて置くのみだつた。それではあまり不親切だと云ふ風に考へられるやうだが、仕方がないんだ。例へば戀愛問題のやうなことにしても、老母は大變心配して居られるやうだが、私は別に案じ

でも居はしない。又彼は干渉がましい事も云ふまいと思つて居る。お前の人生觀から割出して行動するが良い。勿論善かれ悪かれ凡ての責任はお前に歸つて行くのだ。

さて私のところから、通學するとして、私のうちではお前をば、坊ちゃんやお客分として遇する事は出来ない。お前とて家を飛び出して來たからには、運命開拓の心懸けがなくては協ふまい。なまじい血縁を頼るやうでは仕方がない。絶えずその氣持ちで私は鍛鍊して來た。うちでは先づ玄關と電話の取次をやらされたものだが、これが物になるまでは四年餘りもかゝつたやうな有様。ほんとうにむづかしいものだと思ふ。玄關や電話に出て主人の意を満足せしむるものは、まづ一人前だ。何をさしても大丈夫だと思ふ。近頃になつて、やつと我意をお前は幾分満すやうになつた。まあ八十點位ひのところだらうか。それでいつまでも玄關でもあるまいと思つて最近處をかへさした譯である。お前とした事がまたずば抜けて非實用的で、且つ非事務的に出來てゐる。物を云附けても三つ云附けると、二つはきつと忘れる。計算は間違ふし、文字は嘘字當字許りで、先づ役に立つ事殆どないと云つて良い。でもそれで以て人間としての價值判斷される譯でもないし、にわか善悪は決し難い。私なんども、給仕もしたし、小僧もやつたし、銀行事務員の經驗もあるし、それ／＼よく間に合つて來た。だから細く氣がつくし役に立つ。でもそんなでは人間が小器用に過ぎて

所詮大をなす器でない。出來るだけ今はぼうつとしたやうな顔をして居るのは、つまらないお里を見られ度くないとの見榮もあるが、一事務家に終り度くないと云ふ努力からでもある。併し先づ大事なのは役に立つ人間である事だ。でなくば第一パンが得られない。大人物許りさう／＼世の中は必要としないんだ。右から左に間に合ふものでないと、この就職難の激しい時代には、生活能力なきものと諦める他はあるまい。お前などは役に立たない事夥しかつたものの、没常識な行爲や舉動がなかつたのが、まだましである。あの〇縣から來て居たSなどはひどかつた。彼が玄關に仕事してる頃、餘りきたないぼろ／＼の着物を着て居るので、それではいくら何でもひどいから、私の古いのを上げよう。それを着た給へ。と云はうものなら、「何之で良いです。バプテスマのヨハネを見なさい。きたない毛衣をまとうて居たではありませんか」と斯うである。良寛や芭蕉の崇拜者であつたが、彼等は肉類一切食はなかつたと云ふんで、意地になつて、肉類を口にしない。これなんかはまだ良い方として、ちやうどその頃留學から歸朝間もない時分で、牛込のK家の隣りのうちを借り住居して居た。K家とは親類續きと云ふ關係から、安く貸してもらつて居た。それ許りでなく、何の彼のと面倒を見てもらつて居た。ところが相當な家なので、市内としては立派な庭園をもつて居るのである。Sのプロレタリア意識から見れば、このやうな庭



園など持つて居るのは生意氣千萬である。彼とその家とは何の交渉もないに係らず、それがしやくに障つて仕方がない。私が留守になると彼はこの庭のどこに出で行つて、「貴様等ブルジョア階級はこんな庭をもつて、……」なんかと演説をぶつ始めると云ふ騒ぎ。お前のイデオロギーはまだ聞いた事はないが、こんな、馬鹿氣た眞似をしないのは、まだ私にとつて仕合せと云ふもの。

## その二

Hよ！

そこでさきの常識の問題なんだがね、右のSは俳人たり詩人たらんと願つて居るので、作句作詩に常識はいらないと云ふんで、今以て新聞すら讀まうとしないのだ。彼は幾年か前N大學の高等師範部を出て、間もなく九州M縣だつたかの中學に赴任したまではよかつたが、例の氣性なんで、間もなく校長と喧嘩してよされて了つた。かう云ふ調子なので、私もむやみと紹介する事も出来ないで弱つたものだ。さうした病癖はあるにしても、私は彼にひどく感謝してゐる事もあるし、大に尊敬さへして居るのである。忘れもしないあの震災の時である。ちやうど九月一日に大ゆれだつたのだ。八月中は東北地方に講演に出

かけて居た。講演料も相當に貰つたので、妻なるH子も帯同して行つたので、講演が済むと十和田湖を周遊したり、その他東北温泉廻りをやつたりして、歸京したのが八月三十日だつた。そんな有様であとは例の通り。全くすつからかんなのである。それが越えて一日するとあの地震なのだ。一切の經濟機構は杜絶して了つた。一文の貯えもないのに、米屋も酒屋もてんで出さうとしない。凡て現金である。僅か一兩日の糧食を残されて居る許り交通も全く破壊されて居るんだし、どうにもならない。今はよし地震や火災から命免れたとしても、これでは餓死を待つのみ状態であつた。ところが三日の日である。まだ餘震切りに至る最中に二十餘里も離れて居るC縣の田舎から、徒歩で野越え山越えして、米とつかけ物とをかついでやつて來たものがある。それがSである。全く地獄に佛の思ひ。之が普通の人に出來る仕事かい。彼はさう云ふ純情至誠の人だ。彼は偽りが出來ないたちなんだ。彼が窮した折、うちに引取つて通學させたのも當時を思ふ感謝の一端であつた。彼がひとり身ならば、中學が首になつても私の家に住む事も良いが、もう妻子もつ身となつて居る。どうにも仕方がない。どつかの中學か乃至は小學校の先生にと思つても、長續きが出來るかど案じられる。一時の仲人口をきいておく事も出來ない。種々奔走もあつせんも試みたが、どうも旨く行かなかつた。だが幸ひどこか地方の小學校の代用教員かを勤めて居るやう

だ。かく純情至誠ではあるにしても、常識を馬鹿にするものの悲哀である。

彼としては無論手れん手くだを弄して、世の榮達を求めるのは潔としないんだから、代用教員もとより結構であらうと思はれる。ところが案外さうでもなく、眼を患つても醫藥の費がないと啣ち、大いにプロタリアーのイデキオロギーを振廻すのである。現代の良寛今様芭蕉がマルクス・ボーイであるに至つては、地下の彼等が喜ぶか悲しむか我之を知らずだ。現代に處して物質問題を兎角云爲するやうだつたら、矢張り現代に伍して行くの外はないだらう。現代生活に伍するためには、現代の常識は缺いでならぬ旅費であり、糧食であらうと思ふ。それを馬鹿にするやうでは今日の旅は渡れまい。その常識を超越して「我々の粟を食まず」と云つた伯夷叔齊を氣取るならば、代用教員がどうの、月給が足りないなど云つてはなるまい。詩人や思想家や乃至は學者は兎角常識を馬鹿にして、自分獨り偉いと思つて居る。「俗人どものやる事は」と妙に奇行を弄したがる。誠に以て片腹痛い次第だ。K大學の先輩に××の専門の學者が居る。相當知名の博士なのだ。彼はその奇行逸事を以ても知られて居る。教室に入つてから先生の机でも學生の机にでも、むやみに腰かけたり、教室で煙草飲んだりするのはまだ良い。試験になつてその擔當學科目の試験問題を出してもらひ度いと頼むと、「試験は與太なんだから」と云つて狂歌を一首書いて寄越すと云ふ風である。こんな事では人間がまるでなつて居ない。彼の奇行逸事は良いとしても、夫は自然の人間から流れ出でてるものではないんだ。不自然なる作り物である。賣名の宣傳的行爲である。いくら考へても、それなどを尊敬する氣になれない。

常識とは何ぞや。人間普通自然に必要な知識である。詩歌も、哲學も、宗教も、常識を離れてはあり得ない。英國に曾てコンモンセンス・スクール(常識學派)なる哲學の一學派があつたが、大變意味ある事だと思ふ。併しなる程哲學が常識を離れてはないうして、哲學が常識に止つて居てはなるまい。街頭哲學と云ふのもつまり常識哲學と云ふやうなところに要求があるのでないだらうか。誰れにでも分るやうな哲學、現實の生活に役に立つやうな哲學と云つたところではないのか。宗教にしても何も天上はるけき處に在るのではない。現實に悩みの多ければこそその宗教である。人が煩惱具足の凡夫であればこそ佛を求めろのだ。この憂き繁き娑婆なればこそ神の要求も旺んなのである。哲學もとより亦然りで、浮世離れた奥山に哲學の要はない。現實の世に積る難問の多いからこそ、その清算人として哲學の役割があるのだ。今迄のわが哲學界では只隱居仕事のやうに考へられて居た。誠に以てけしからん話だ。隱居哲學は早く死んだ方が良いよ。哲學が只形而上學だ、認識論だと云つてそれから一步も出で得ないのは、哲學その者がその人の身について居ない所爲

だ。生きて居ないからだ。隠居哲學でなくば人形哲學である。希臘に於るソフィストの出  
現は、時代の要求として必然であつた。彼等以前は只宇宙の成生許りを問題にして居た。  
現實の世とは直接の交渉をもつて居なかつた。これら堂奥の哲學を街頭に運び出したのが  
ソフィスト達だつた。ソクラテスは彼等のなかから生れたのだ。彼の哲學は實踐の哲學だ  
つた。曾廼家五郎は自分で脚本を作ることでも有名だが、彼は『喜劇のテーマは到るところ  
に在りますよ』と豪語したさうだが、成程彼は名人の域に達して居ると思ふ。哲學の問題  
はもとより到處に存在する。電車のなかでもおでん屋の内でも、ころがつて居る。文藝春  
秋だつたかに私を評して彼は哲學をやさしく説く事で知られて居る。但しそれ以上の何者  
でもない、と云つたやうな事が書いてあつたさうだ。それで澤山だ。やさしい哲學、それが  
街頭哲學であり、大衆哲學であらう。哲學者だとして石でない。やはり目は二つ鼻一つであ  
る。血あり肉ある動物なんだ。柳が灰色に見え、花が黒く見える譯はない。やはり柳は緑、  
花は紅に見ゆるのだ。と云つて、只淺薄皮相の哲學を賣物にしようとは思はない。そんな  
のはショウウ・ウキンドの哲學である。之を要するに常識を馬鹿にしてはいけなさと云ふ  
のだ。但し常識に止つて居ては學問は要らない。

こんなに常識哲學を強調すれば何だか功利主義の道德か、さもないと實用主義の哲學を  
思はしむるでもあらう。功利主義の倫理説は最大多數の最大幸福を以て善の極致となす。英  
國はミルやベンザムの學説であつて、どうも利害打算の道德となつて了ふ。實用主義は米  
國ウキリアム・ゼームスの唱へし哲學説である。『眞理とは現實の生活に役に立つ命題なり  
判断である』と云ふのである。一見極めて判り良いし、結構な學説思想とも思はれる。私  
がさきに説いたものを髣髴せしめるやうでもある。早い話が之等の思想學説に依ると學問  
をすれば、直ぐに俸給が上るとか、金が儲かるとか云ふ風に理解される。でも私の哲學に  
依れば、そんな縁日商品の類ではない。現實生活の活ける力となり、後見役を勤めると云  
ふ意味なのだ。私の哲學に就てもつと詳論する機もあらうが、肝心なところは、人生に於  
る諸般の現象に對する意義附けに在る。よく考へて見ると、世上一切のこと偶然でなく、無  
意味なものではない。皆あるべき理由に依つて斯くは現はれて居る。だからよくその理法  
を體得する事だ。さすれば喜びだ、幸福だとして有頂點になる要もなく、又、悲しみだとして  
愁嘆するには及ばない。かくて悲喜哀悅の外に超越して、悠々自得たる心境を把かみ得る  
であらう。凡てを『永恒の相』に觀じて明鏡止水の境に到り得る譯である。謂はゞ安心立  
命の福音である。釋迦や基督は宗教的悟得の方法でこの道に達した。そして夫れを宣べ傳  
へた。私は之を論理的思辯に依つて説かうと思ふのみ。こゝに至れば宗教と哲學の境はな

くなる。又強ひて區別する必要はないか。これが力でなくてなんであらう。之が現實世界の役に立たないで何とせう。よしや之に依つて俸給が上らなくても、金が儲からなくても、千萬金に代へられぬ福音ではないか。

### その三

Hよ！

今度は轉じて職業問題に就て書いておかう。卒業が間近くなつて來たので少しはお前もこんな事を考へて來て居るであらう。だが、若しかすると私が何とかして呉れると云つて居るかも知れない。おい戯談ぢやないよ。それは眞平だ。自分の兒にすら職業問題には一指觸れまいと思つて居る。自分の職業位ひ、大學を卒業するんだもの、自分で解決しなくちや困るではないか。もとく私は中學に居る頃から、

A、信仰問題

B、結婚問題

C、職業問題

の三つは誰れの容喙も許さないと、常々考へて居た。帝王の威を以てするも、斷乎として

自分の意見を枉げないと思つて居た。もとより親兄弟にも相談しなかつた。その信條通り私は貫いて來た。もちろんその爲めには悲劇の数々も経験した。犠牲にする處も尠くはなかつたやうだ。この三つの問題に於て、かくなせしが故に勝利者であるとは、我ながら思ひ得ない。併しよし失敗したにせよ、つまらない事をしたとは思はれない。我が信條を徹底せしめたと云ふ意味に於てだけならば、成功勝利と云ひ得るであらう。だが、之に依つて痛ましい血潮がいかに多く流された事か。それでも私は悔いやうとは思はない。凡ては良い経験であつた。波羅がその臨終に於て『凡ての事われに良からざるなかりき』と叫んだやうな感じで居る。だからお前も自分の職業は自分で決めるが良い。そして道を拓いて行くが良い。必要とあらば相談には應じやう。又手づるを得るために紹介なりが、入用の時には書きもしやう。これでは餘り水臭いだらうか。餘り親切がなさすぎると云ふだらうか。獨り兒、眞に對しても私はやはりさうしやうと思つてるのだが、彼が卒業の日にも同じやうに對岸の火災見たいな態度であり得やうか、一寸、實は疑はしいのである。一方は實子、一方は兄の子、そこにやはり争ひ難い愛の差別があるやうだ。何もこの問題に就て云ふのではないが、日頃そんな事を反省して見て、自分で嫌になる事がよくある。眞はまだ頑是ない幼な兒であるし、又母がないと云ふ、いたわりの心が動いて居るのも事實だ。

一方は併し兩親揃つて居るし、もう大學に入るまで成人してるのだから、とのハンディキヤップは付けられるものの、所詮それは遁辭のやうである。血の親疏はかく迄も現金なものかと、我ながら醜さに羞恥を覚える。でも又一步考へるとそれは醜でもなく、恥でもなく、人間の偽りなき自然であるかも知れない。

兎も角も大學を出で、私からほうり出されたとなると、愈々就職戦線に立つた譯で、風浪荒き街頭の惨苦が痛切に身に迫つて來るであらう。私がうちに居ると次から次へ訪問者が多いが、その人達の始んど八割は就職の相談である。責任上自分の學校の出身者は出来る丈何とかしなければならぬ。少くも自分の責任をもつ科の卒業者だけでも始末し度いと血眼である。それに京都大學、東京の帝大更に早稻田だ慶應だと云ふので、種々な因縁をもつてやつて來られる。履歴書がやたらに積るのみ。解決が出来るのが一割迄行つたら大いに自分で祝杯を擧げ度い位ひ。どうにも動きがつかない。まことに以て憂鬱の限りである。それも去年や今年の卒業生だと幾分諦めもつかうが、昭和四年三年大正十五年と云ふやうな處が、まだ残つて居る始末。一層悲惨なのは何處々々の高等學校教授の經歷者、或は陸軍大佐で元聯隊長と云ふに至つては、沙汰の限りである。年輩にすれば五十に近いのだ。之ではまことに由々しき社會問題たらざるを得ない。就職地獄と云ふのは決して誇張ではない。

併しね、これだけは云ひ得るやうだ。中年にして失業するのは、よしんば財界不況の所爲も、もとより多分にあるにはあるが、總じて性格的缺陷があるやうだ。妙に仕事に贅澤を云ふとか、不羈狷介とか、常識が何處かしら缺けて居るとか、一見すると直ちにあゝ病患がこゝに在るな、と思はしむるものが多い。こんな事云へば兎も角現在では職に在りつて居るから、あんな偉らさうな事を云つて居るとの非難があるかも知れない。私だつて今日あつて明日なきわが首である。餘り口はばつたい事は云はれないが、今の實感としては正直さう思つて居る。それは先づおくとして、大學出身者に就て反省して見度い。大學學生にして、私の極めて大まかな觀察であるが、家が何自由なく學資に事缺がないと云ふのは、先づ全體の二割あるかないかだらう。他の大部分のものは無理算段しての入學である。親類縁者の後援があつたり、町の出資があつたり、獎學資金であつたり、或はそれだけでなくも田地畑を賣拂ふと云ふやうな始末だ。あれが大學を出さへしたら、良い地位を得て、月給をふんだんに取れるんだからと云つたのが多い。之では無盡の掛け金か會社の放資的氣持ちである。そこで就職地獄の解決策としては、根本的に云ふならば社會組織の改造、或はそれ迄でなくも不況の打開が根本治療の道であらう。それは謂はゞ客觀的對策で

あるが、主観的對策も重大であらう。大學出て一向に職が得られないと云ふのが、大學の轉落を叫ぶものもあるが、之は何としても功利的近視眼であらう。もし俸給の打算に依つて入るものならば最初から、よした方がよい。それが目當ならば他の方法をとる可きであらう。大學は學問研究のところである。眞に學問愛好のもののみ來る場所である。學問と云ふものは、僅か大學三年の在學位ひで物になる筋のものではないんだ。三味線ならばやつと絲の調子が合せられる位のもので、うたを唄ふ段取りまでは行つては居ないんだ。それがすぐ役に立つたの、金に換算せられるなど考へるのが、まことに不心得千萬の話である。そんな時代も勿論あるにはあつた。それは文化未開な明治の初期の事である。現代では通用出來ない。大學位ひの知識は今日では普く行渡つて了つて居る。獨逸なんかでは二百年も前から、大學出たら家庭教師と相場が決つて居た。カントにしる、ヘーゲルにしる、シーラーにしる一代の碩學が皆家庭教師として十數年を送らなかつたものは殆んど居ないと云つて良い位ひだ。そこでお前は考へねばならぬ。一生涯の仕事として何をなすべきかと。學徒として立つつもりならば、最少十年間は、文字通りパンと水との生活であると覺悟しなくてはならぬ。果してその勇氣ありや否やだ。

#### IV わが後に來る若人へ

##### その一

私がN大學に職を奉じてから滿十年餘の歲月が流れた。何の因縁もなかつたのに、どうしてこゝに私の身を托するに至つたのか、顧みれば只かりそめの事であつた。あの時もしT君と銀座で遭はなかつたらば、こゝに於る私の姿を遂に見出さなかつたであらう。人の逢會と離別とは、思へば思ふほど不思議なものである。この一月創刊した藝術科の機關誌のため書いた『生れ出づるまで』の一文がある。それに私はこんな風に書いて居る。

銀座尾張町の角で私がひよつこり遭つたのはTだつた。大學を出て三年目のことである。その頃私は大阪のMと云ふ新聞社で働いて居たのだが、記者といふ仕事にかなり嫌氣がさして居る時分だつた。社の方は出張と云つたやうな名義で上京して居たものの、内心では既に退社の臍を決めて居た。手廻しよくA君に家をさがし貰ふやう頼んでも置いた。と云つて東京に生活するとしても、生計の方法が立つて居る譯では、無論なかつた。隨分亂暴な話であるが、無暗に東京生活がしたくて仕様がなくて、前後の辨へもなく、斯うと決

心したものである。花の都の生活にあこがれたと云ふのでもないが、只新聞社の仕事が嫌なのである。

ところで先きのTである。彼はK大學を出るとすぐ、母校だとの関係からN大で働いて、矢継ぎ早やに社會科を創め、美學科を興すと云ふ例のらつ腕振りであつた。銀座街頭で、彼とのゆくりなき邂逅は美學科が新設された年の晩春の頃だつた。「やあ」「おゝ」と云ふやうな譯で二人は、今はないが、當時文人仲間の流行兒であつた「うゝろん茶」に入つた。

『どうしたんだい』

『ぶらつと、やつて來たんだ』

『社の方は？』

『出張で出てゐるんだが、もう社をよして、こちらへ來よう思つてる』

『何の仕事だい？ するのは』

『別に當なんか、ありやしない。まあ當分落付いて勉強でもするさ』

『ぢやあ、僕の學校にでも來ないか。ちやうど美學科も出來た許りだし』

と云つた次第であつさり話は決つた。云ふまでもなく、この美學科なるものが、藝術科の前身なのである。

そんな譯合ひだから、何と云つたつて、彼はN大に關する限り、私の大先輩なのである。私もさうだが、彼に對しても殆んど年中行事のやうに排斥運動の絶間がないやうだ。どうせ浮世なんだから、嫉妬もあらうし、排擠もあらうが別に驚くにも當らない。まあ何にせよ、私一人になつたつて、どんなに水をさすやうなデマが飛ばうとも、彼を支持しないでは男の一分相立たぬ義理合ひなのだ。銀座で彼と別れた後、私は兎も角歸阪しなくてはならなかつた。すぐにも引返して上京の豫定であつたが、社の方ではなか／＼辭職を許してくれない。休講では困ると云つてTからは矢の催促だ。仕方がなくて、毎月一回宛、講義のため態々上つて來ることとした。かうして一學期は終つた。

やつと二學期になつてから、愈々東京に腰を落付けることが出來た。最初もたされた講義は『文學概論』、それに社會科のために『社會思潮』であつた。社會思潮など私の知つて居さうなものでも無かつたが、『英米に於る近世ヒュマニズムの展開』と云ふ講義題目にして、どうやらお茶をにごす事にした。『文學概論』にしても私の柄ではなかつたのが、處女作『現代人の藝術』を出版して間もない頃だつたので、あの分なら良からうとのTの話であつた。さて請合つては見たものの、どんな風に文學概論の講義案を作つたものか、薩張り見當が附かない。邦語は勿論、英獨の類書を涉獵したが、更に意を満して呉れるものがな

い。かうして随分悩み抜いたものである。懊惱の果てに、序論として『文學概論は學として可能なりや』となつて現はれた。結局文學概論に對する、私の反省、檢討、もつと端的に云へば私の煩悶を現はすものであるが、この序論は終に學年末になつても、終りさうにない。氣の早い學生はたまり兼ねて何時になつたら本論に入るのか、と悲鳴をあげるやうな喜劇もあつた。

斯うして二つの講座をTの好意に依り、持たしては貰つたが、勿論生活の保證を與へられた譯ではない。學校からもらう俸給なるものは、月々四十五圓の家賃にも及ばざること甚だ遠い。と云つて私に一文の貯へがあらう道理もないし、他に職があるのででもない。そこが亂暴で向ふ見すと云ふもの。併し一向職や口をさがす氣にもならない。と云ふのが、實は、第二の著作をするとの約束で月々半年なり一年なりは、前借の形で仕送りされる事になつて居た。夫れで先づ悠々太平樂を並べて居られた。だが、その本屋は私に約を果すこと二ヶ月か三ヶ月にして、つぶれて了つた。是では話にはならない。この時の私の青くなりやうたらなかつた。

さうかうする内に、學校での私の責任は少し宛重くなるし、Tは留學の途に上つた。私が留守を預かるやうになつて、Y博士は正式に私を學監に据ゑて呉られたりして、愈々學園との因縁は深まる許りであつた。それに美學科の方は、新しい試みだと云ふので學生が群り集つて來た。わけても元氣の良い秀才どころか、天才だと自負する青年が集つた。無理にも雑誌を出さうと私のところに、ねぢ込んで來るもの引きもきらぬ有様だつた。當時Y博士は法文學部長だつたけれども、やはり今のやうに事實上の學長であり、總長であつた。だから私は學生から要求せられる儘、何度となく嘆願に及んだものである。上に立つ人になると矢張り書生論ではいけない。すぐ實際の問題となつて、果して維持經營が出来るかどうかと云ふ問題になる。そこになると、なか／＼怪しいのである。數字の事だと、から駄目だし、一向に確信もない。さう無責任な出駄羅目も云へないとなると、勢ひ原案可決と云ふ譯に行かない。雑誌は兎も角美學科の目鼻が附かうと云ふ矢先き、あの關東大震災である。雑誌どころの騒ぎではない。學園それ自體が存亡の岐路にさへ立つた。幸にしてY博士の英斷と献身の努力に依つて、灰燼のなかより復活した。否數年を出でずして今の學園大殿堂が見られるやうな基礎が固められた。その緒についた頃、博士はしきりと渡歐を慫慂せられたので、その旅に上ることとなつた。首途に立つに臨んで、切りに氣になるのは、例の雑誌創刊の問題である。で、私は後事をI君に托して旅へ出た。I君は私のもつて居た『創作演習』の講座と雑誌の創刊を誓つて引受けて呉れた。……



と云ふのであるが、これは偶々雑誌出現の経緯を語ると共に、私がN大學に生れ出づる因縁談でもある。この一文に於ては、雑誌の性質として藝術科を中心に語つて居るが、右のやうな事情でこの科は獨り學的方面の事許りでなく、財政や經營上のことまで、私が責をもたねばならぬやうな始末である。

何しろN大學は發展膨脹したものである。私が入つて來た當時は校舎も千坪足らずの木造三階建にすぎず、中學、高等豫科専門部など何もかも雜居でもつて、學生數三千を出でなかつたものだ。社會的に云つたつて、まことに漂たる存在にすぎなかつた。それにあの大災厄である。再起を我人と共に疑つたのに不思議はない。凡ては灰燼に歸つて居る。これはあとで聞いた話であるが、役に立つやうな財産とて殆んど云ふべきものが残つて居なかつたさうな。私は二日の日大久保のうちから、大ゆれのなかを辿り辿つて行て見たが、無論跡方もない。習三日富久町なる學長を訪ねると、蒼白の顔をした博士は殆んど前途豫測がつかないとお話してである。只悲痛の氣が胸一杯になる。あの前後の様子では學校どころか、東京市その者が復興の見込もなく、遷都と云ふ流言すら、まことしやかに語られたものだ。さすれば小さい一學校のめどが付けられないのは、當然であらう。七八日頃からやつと一頁にも足りぬやうな新聞が出るやうになつた。すると十日の新聞に『十月一日か

らN大學は開校する、一同三崎町の焼跡に集れとの廣告が出た。これを見て私はほつとした。『これある哉之ある哉』さすがはY博士だと思つたのは、私一人ではあるまい。全國に散らばる學生、校友、講師、教授は皆限り不安に閉ざされて居たのに、この僅か數行の廣告に依つて、愁眉始めて開くの思ひがあつた。それから電車の便もあつたりなかつたので、鞋脚半の出で立ちで、三崎町に毎日通つた。テントのなかで蕪をしいて、握飯と罐詰を開きながら、多くの人達と開校の準備をした。顧みれば、まことに思出つきないものがある。十日のあの廣告こそはY博士ならでは、他の何人にも到底求められない英斷である。大なる投機と云へば云はれやう。そこには悲壯なる血涙の文字が秘められやう。もしY博士を當時學長としてN大學がもたなかつたならば、今日の大は愚か再び起つ日は斷じてなかつた、と云つても過言ではない。その創立者はY伯と知られて居るが、Y博士は何と云つたつて中興の祖に違ひないのだ。ところで準備だが十月一日ふたを開けて見て、果してどれ程の學生が集り來るであらう。それが氣遣はれてならないのである。凡て運を天に任かして、その事を待つのみだつた。がよくしたもので、『天は自ら助くる者を助く』と云ふ通り、殆んど全部の學生が歸つて來た。それから、大塚に校舎を借り池袋に借り、次いで護國寺にバラツクが立てられ、焼跡に建てられると云つた風に、次から次へと足ど

り早く進捗した。もとより凡てはY博士の經倫と畫策に依つて歩が進められたのであつて、私なんかは辛うじて手足の勞を致したにすぎない。それにしても人間の氣魄横溢するところ、全く『不能』な言葉はない。かく復興の業緒に就く頃私は旅へ出た。

## その二

都下凡ての私學は皆あの災厄から免れなかつた。が、N大學の復興は何處よりも早かつたし、又復興の王者である事も争はれない。彼をしてこの覇業をなさしめたのは、さきにも云つたやうにY博士を措いて他にない。全く博士の乾坤一擲の努力に俟つ。博士はかう觀來れば獨りN大學、最大の恩人である計りでなく、只その意味に於ても日本文化史に永久記さるべき人である。明治初期の文化史に三田の學舎は福澤翁と共に記されるであらう。その如く、震災以後の歴史にはN大學と博士の功業を没してはなるまい。一體文部省當局にしても、又社會の人達も、私學の文化史的位を餘り考へなすぎる。それどころか當局は常に私學に對して刑事が、犯罪者に對する眼を失はうとしな。八年度の豫算に依れば、軍部のみの費用だけで九億だの十億だのと云はれて居る。租税の全部を合せても七億餘、八億に足らぬと云ふではないか。國防費は税金に依る總歲入を以てして、尙不足を

生ずる。この是非に就て門外の私が批議すべき限りではない。が、かゝる折文部省に於る豫算はどうなのだ。學術や教育のために、果して幾許が費はれるのであるか。それを私は聞き度いのだ。それで以て文化の向上、教育學術の進展を計らうと云ふんだから、山は見えて居るではないか。かゝる國費に依る文化的施設の缺陷を補はんとする處に、私學の任務と使命とがあるのではないか。もし明治大正以來の歴史から私學を悉く排除して見よ。到底今日の如き文化の興隆を見る事が出来なかつたであらう。だのに私學とし云へば、道樂息子か刑事上の罪人であるかのやうに見るのは、その盲目さにも程があると云ふものだ。ともすれば官學が特權階級のみに門戸が開かれて居るとき、大學普遍化の役割を遺憾なく發揮し得たのは、私學ではなかつたか。今は大學卒業生の氾濫に苦しみ、卒業生また就職難に悩むの故を以て、大學無用論だの轉落だのと口にするものもあるが、我等はもとより、そんな近視眼的功利論に耳をかす必要はない。かゝる議論が出でるのは、却つて過去の私學の功績を物語るのみである。

私學當事者の教育學術の施設のため、國費が足りぬと、さきに私は云つたが、考へて見ると、餘りつき込まないが良いかも知れぬ。一月一日東京朝日で農相との對談に於て文相の語るところに依れば、左翼學生の一番多いのは、帝大であるとやら。すると帝大なるも

のは國費に依る左傾思想養成所見たいなものだ。全く有難いことだ。だからと云つて私は私學にもつと補助しろの、供託金を大目に見ろのと泣き事言はうとは思はない。もつと私學の文化史的地位に對する認識を求めるのである。汗水たらして事に當る勞を思ひやれと云ふのだ。無論なかには營利的にやらうと云ふ不心得のものもあらう。が、人を見たら泥棒と見る必要もあるまい。不心得のものは取締るがよい。凡てを檢事の眼で律する事はない。もつと深切な氣持ちでもり育て、行く心を養つてもらひ度い。試みに文部省に行つて見るがよい。人間扱されないのだ。かくても尙私學のために、力を致さねばならぬかと、私は泣いたのも珍しくないんだ。東京の市内電車が抑も、交通を助けるためのものか、夫れとも交通妨害のために存在するの疑はしいやうに、文部省なるものは文化進展のためのものか、それとも文化發展阻止の機關であるのか、まことに怪しいのである。それも私學がたんまりと基本金を擁するとか、寄附金が立派に集ると云ふならば、何も人にやかましく云はれなくても、どしどし設備や内容を充實せしめ、良教授を選ぼうと言ふのは、自衛策から見ても當然の事である。ところが日本の富豪には學校のために寄附を投げ出すやうな事は、先づないんだ。蓋し寄附には必づ三つの條件のうち何れか一つを満さねばならぬ。即ち

A、利權を之に依つて得るか

B 或は之に依つて社會的名譽を博するか

C 乃至は自らの弱點を握られて居るか

である。然るに私學はその性質として、その一つをも満し得ない理想主義的存在である。ここに云ふ可らざる惱みは秘められて居る。

私も自らその責に當つて見て、いかに至難の事業であるかが分つた。それにつけてもY博士の懸命の努力と並々ならぬ才腕の程が偲ばれる。殊に凡ゆる物質は缺乏し、國家社會の財政は窮迫し、金融は全く杜絶すると云ふあの難局に處して、愚痴一つこぼさないで、斷乎としてやつて除けられた水際だつた力には、驚嘆の外はない。只力の問題ではない。才腕の問題でもない。私は之を博士の情熱と信仰に依るものと観る。N大學の存在する限り、博士のこの宗教家的氣魄を到底忘れてはならない。だのに近頃兎角博士に難くせを附けやうと云ふものがある。誠に以てけしからん話である。學校が小さい折には顧みやうともしなかつたものが、大な殿堂が出来たと觀れば、食指を動かさうとするものもあるとやら。まことに淺聞しき浮世ではある。でも、學園の一木一草と云へ共、博士の血の通つて居ない處ない。よし時折「花園を荒らさんとする」もの現はれても、學園は教育の府である。大義の滅びるの日は斷じてない筈。

Y博士に就いてもう少し語らせてもらひ度い。私の身邊に就て問題がもち上がった折である。私は某新聞から散々たゞかれた。よしんば計画的に書かれた事であつて、事實の有無如何に拘らず、斯う社會的問題になるからには、到底教育者として看過出来ないものであつた。問題になる事自體が教育者として、學徒としての不徳を問はれるに十分であつた。で、私はその記事を見るなりに覺悟を決めて了つた。斯うなるからには仕方がない。未練がましい態度も取り度くない。さればとて釋明だの聲明だのと申譯がましい事云つたつて仕方がない。落ちなば浮かぶ瀬もあらん。さらば今兎や角云はないでさつと散らうではないか。斯う考へて來ると悄沈どころか却つて意氣旺んに昂がつて來た。一路邁進新しき天地を開く可く勇氣勃然湧くのだつた。

斯かる折博士からの電話である。「死刑の宣告」だと思ふのは、當然すぎる當然だつた。散々油を絞られた上宣告だらうと期待して會つて見ると博士は案外冷靜である。否日頃にも増して慈顔あふるるものがある。ちと様子が變だと思つた事である。博士は叱るところか私を心から慰められるのだつた。「君は家庭的にどうして、そんなに恵まれないかなあ」

と云はれた時には私はこらえ切れなくて泣いて了つた。それのみか「人生は波なんだ、君はちやうど今浮沈の波にぶつ付かつて居る。どうでもかうでも乗り切らねばならぬ。新聞記者位ひに大學教授の地位が左右されて、どうなるものだ。ひるまないで元氣を出して斷然戦ひ給へ」と鼓舞されるのだつた。私はまるで夢みる心地である。

お忙しいところを二時間許りも斯うしたシーンが續いた。私は涙をぬぐうて辭去した。情けのお言葉に甘へるべきではなかつたかも知れない。だが更に友達なども慰めて呉れたので、遂に事なく今日に及んで居る。いかに忘れんとしても當年の情景は忘れられる筈がない。勿論當時の私は瀕死の病人であつた。只博士の慈愛のカンフル注射一つで甦がへつた譯である。この注射がなかつたら今日の私はどうなつて居るか分らない。人生に於ける運命の岐路は只一つの點に在る。

元來私はN大學の出身でもないし、又博士と郷里を同じうするのでもなし、又専門が同じなのでもない。何の因縁もなかつたのだが、T君の推薦で風來坊のやうに入つて來たのだつた。もとより教授とならうの責任ある地位に就かうなど、そんな大それた野心など持つべき謂れもない。よしんば持つたところで出来る相談でもなかつた。それが思はずN大學に足をふみ入れた。今では忙しい、忙しいので、随分なまけるので、諸君にはまことに

氣の毒に思つて居るが、當時はかなり熱心なものだつた。學殖もとより淺くもあるので、懸命の努力を要した。併し純眞そのものの青年相手の仕事だから、とても愉快なんだ。新聞社の頃と較べて問題にはならない。そのきもちが感激性の強い學生に反映しない筈はない。私を心から喜び迎えて呉れた。それが感謝でなくて何であらう。そんなこんなで次第に深入りして、きづなが出來た。

それに私はK大學の教授達から容れられなかつたものだ。にも拘はらずY博士から知を辱ふし、厚く用ゐられたのは、何う考へても不思議と云ふ外はない。何故私が博士から重用されるに至つたか、未だに私には分らない。今では上司下級との關係とも思はれず、弟子と先生とだけでは濟まされず、全く私にとつて大恩深い慈父だと思はれない。博士なかりせば私は世に浮かぶ力とてはなかつた。自分自ら性格的破産者だと思ふ位なんだから、はたから見たら、どんなに非難が多い事だらう。私に對する論議論難絶え間もなく、排斥の聲が常に行はれるのは、怪しむに足らない。だのに博士は常に私をかばわれて來た。どんなに中傷攻撃の火の手盛んであらうと、いつも支持して來られた。曾つて一度だつて博士から叱られた事はない。思ふて此處に至れば涙滂沱として落つるを禁じ得ない。これ程大きな愛は親でなければ望まれない。こんなに書いて行くと餘りに感傷の涙に醉ふものだ

云ふでもあらう。だがこれが平素の胸中なのである。今に始つた感情ではない。

ともあれ學徒としてその學を講ずべく、大學の教壇を與へられるのは、無上の光榮である。その昔シバルーフ・スピノーザはバーデン公より、ハイデルベルクの大學教授たるべく、と鄭重に求められた。併し彼は、學の自由を禍れさるとなして、之を辭退したと云ふ。大學の教授にして、尙私の如く俗務に挾掌せねばならぬに至つては、言語道斷である。爲めに研究の歩みは阻害される。悲鳴を擧げ度いほどである。今のまゝでは諸君に對して申譯がなく、否自分に對しても濟まないと思つて居る。だが決して今の儘では居ない。必ず自分の思ふ境地を開拓しなければ已まない。私は勇敢に進むであらう。もとより他を排濟しよう云ふのでなく、權勢を收めんとする願ひもなく、希むるはひたすらにわが學の建設である。わが思想殿堂の建立である。例へばヘーゲルの理解にしても、まこと淺薄を極める。よしんば、かりに今尙私の中心テーマとして居るヘーゲルを理解したつて、只一片のヘーゲルの解釋者が何になるのだ。彼の哲學の研究は只遠き旅路への道行きである。遍歴の旅程にすぎまい。

態々斷るまでもなく、私の性格は多くの缺點に満ちて居る。現にこれまでの私の生活に於て、そのために、私は幾度も失敗を演じ、悲痛なる苦杯をなめねばならなかつた。而

も夫れは單なる秘事ではなく、多くは世上にさらされて來たし、物議もかましたのであつた。自ら之を知ればこそ、赤裸の姿をさらして來た。だのに諸君は何の責めるところなく、私を容認して呉れる。剩へ宗教的信頼の情さへ持つて居て呉れる。感謝なくては居られないのだ。もとより悉くの諸君がさうだと思ふのは、お目出度い事だらう。論難の中心に私をおく諸君もあるであらう。さう云つた諸君に理解を求めやうなども無論思はない。何時かは分つて呉れる日もあらうと、靜かに之を俟たう。かう云ふ次第でN大學は私にとつて至極の樂土である。今將た何處に行かんやだ。だがしかし地上の樂園は時に波浪を免れない。エデンの園からもアダム、エバは追放されねばならなかつた。何時地震が來ぬとも限らない。中興の祖Y博士の身邊すらすきを窮はふとする不心得者もあるんだからね。ここで私は親鸞を思出すのだ。彼は覺を得んとて出家得度して佛門に歸し、比叡の山に上つたのだつた。山は浮世の名利の外に超越して居るものだと言信して居た。ところが一時の望を聚めた叡山の座主阿沙梨が宮中の歌會に出席した。その席での座主の作歌が大變物をおかした。歌と云ふのは

わが戀は松をしぐれと染め兼ねて

眞葛原に風騒ぐなり

と云ふんだ。この歌が秀逸だつた。そこに嫉妬反感が猛然と湧いた。この歌は戀歌である。而も生々しき體驗より生れたものだ。體驗なくんばこんな歌の出来る筈がない。一山の大和尚、座主ともあらうものが、戀愛三昧とは何事だ。風かみにおけない奴だ。座主としてはおけない。引ずり下ろせと斯う云ふ譯なのだ。座主の身邊は爲めに、甚だあぶなしくなつた。そこで親鸞が思ふのだつた。浮世離れて名利の外に在る山ではないか。それだのに大宮人達の鼻息を窮はなくてはその地位が保てないのか。山も浮世にすぎない。と云つて彼は山をとぼくと下るのである。比叡の山にして尙この有様だ。いつ私に風浪切りなる場面が展開せないと分らない。下るべき場合には下りやう。追はるゝの時あらば、わが憩ひ家を求めても行かう。との覺悟だけはもつて居る。

併し私には尙殘された課題がある。只々哲學の組織體系化のみにつきて居ない。それは哲學と宗教との融合である。現に私の思想にしても、哲學のやうでもあるし、又宗教のやうでもある。更に考へて見ると、一體何の故かやうに分けねばならぬかと私には分らないんだ。こゝの處をもつと反省し、整理しなければならぬやうに思ふ。併しこんな事を何時までも語り続ける事は、餘り小供じみて居るやうだから、もうよさう。何にしても屈託する事なく一緒に勉強しやう。しつかり鞭つてくれ。

V 別れし妻に與ふ

その一

今はお前に對して云ふべき何者もない。又一片の感情すらない。われらの思出や美しかりし、との咏嘆の念も起さない。顧みれば私達の交りは、徹頭徹尾失敗の記録であつた。世間に對して顔向けも出来ないまでの悲痛なる失敗であつた。餘りに詰らないので、その愚ろかしさ次第を曝け出して懺悔の心とし、又若い人達へ反省を促かす術ともなればと思ふのみである。若き血に燃ゆる自由戀愛論の憐れな末路を述べるのは、自らの心に鞭をあて、自ら罪の軀を十字架につやけうとする心に他ならない。今お前はどこにさすらつて居るのか無論分らない。風の便りで友達なんかから漠然たる事を聞かなくもないが、深くつき止めやうとも思はないし、聞知らうとする關心も更らにない。只平安な生活でもない事を想像し、その日くくのたつきにすら困つて居るでもあらう。だがどうしなければと云ふ義理を感じるのでもない。今年年たけて、流浪の旅を續け倫落の群に投じて居るであらうと、思つては一抹の哀感を覺えぬではない。でも今となつては只返らぬ過去である。お互

ひ我儘なる身から出たさびとは云へ、まことに因果な私達ではあつた。私とて今尙漂泊の思ひで行雲流水の孤旅を續けて居る。が、もとよりお前に對するつき合ひの積りもなければ、貞節の念からでもない。私として見れば、盡すだけの事は盡した。義務だけは果たして信じて居るので、責任感に責められる道理もない。もしあの折に相會ふの機會がなかつたらば、お前は折角築き上げ得たお前の生活を破壊しないで、今頃安泰に左團扇で過ごされたであらうにと、返らぬ愚痴に迫められて居るだらう。と、道に迷ふ小羊に憐れを覺えるのみ。安心立命の境を招き得ないでもがく人へは、通りがりの路傍の人へでも、一掬の涙は灑がれるのだから。

私が愈々留學の途に上らうとする時であつた。私は亡父の墓參を兼ね、母や兄への別れを措しむ爲めに、國なるN市まで歸らねばならぬ。船にはM港で乗る事とした。では途中まで送らうと云ふことになつて、お前はO市までの途次京都や奈良を訪ねたのは、今一度わが國の古典藝術に關する印象を新にしておき度いと願ひもあつたし、一つにはお前にとつて未だ見ぬ關西の古都を、見せておき度いと心もあつた。

こゝらあたりの地は、私の學生時代から、新聞記者時代をかけて數年の月を送つたところなので、友人知己もかなりあつた。この機會に舊交を温め、旁々暫くの別離をも惜しむ

事が出来た。O市ではやはり見送りのため西下してくれたI君と一緒にたつて、大いにはしゃいだりしたものである。前途幾千里の旅を控へては居るものの、年來の希望が協へられると云ふので、只私は無我夢中に有頂天になつて居るのだつた。何故かお前は沈み勝ちで、一向と浮いた氣持が見えなかつた。が何にせよ、時はすん／＼と経つて、愈々O市を發車する時間が来て、勢よく首途についた。もとよりかく分れても只旅の間の分れであつて、永久の別離だと誰が豫期したであらう。すぐその夜お前も亦O市をたつて、東京に引返すのであつた。東京では私が留守の間、女中相手の女一人の生活では無用心でもあるし、生活費もかさむと云ふところから、牛込の伯父のはからひで、やはり親類先の小石川なるI家の二階に生活することになつて居た。あとに何の願慮する事もなく、私は西へ急いで一路乗船を志した。國では豫定の用事を済して、愈々M市から船に乗つた。こゝでの見送りは東京やO市とは違つて、さすがに淋しかつた。兄の外に臺灣から来て呉れた叔母との二人のみだつた。船では云ふ可らざる淋しさの念が今更こみ上げて來た。船がともづなを切り出すと、増々哀愁の情が深くなる許り、押へんとしても如何ともする事が出来ない。國の山河が見えなくなる時分には、まるで斷頭臺に上つたやうな氣持ち

思ふまじ見まじとすれど我家かな

の實感を始めて體驗した。出来る事ならもう留學は、取下げにしてもらひ度いとも思ふのだつた。「おい君じやう、談ぢやないぜ」と云ふ人もあらうが、國にのみある人には、あの折の感じは全く理解出来ないであらう。圖南の志を立てて鵬程萬里の旅に立たうとしながら、上海で下船したり、新嘉波から引返した人もあると聞くが、全く今となつては、決して一笑に附し去られないのである。だが船は容赦もなく、進航を續けるのみ。やつとこの辛い感情に打克つて、船に持ち込んだ仕事にかゝつた。仕事と云ふのは、ちやうど學年試験の時分だつたので、試験答案の調べがまだ済んでなかつた。これが一抱へもあつた。これは香港の郵便局から送つた。出發間際に東京で書き終えた『藝術の門』の序文をこゝの宿屋で、書いた事も思出である。勿論お前には着く港々からきつと通信する事を怠らなかつた。郷里の母へは書かなくも、お前にはよく書いたものだつた。四十日の航程を今や遅しと待ち兼ねて、マルセーユに一泊してバリへ急いだ。巴里の珍しい風景を待ちあこがれたのではない。そのこの大使館へは亞米利加經由でお前からの來信あるべきを期待したからだつた。で、その宿に著くが早い、慣れぬ言葉もどかしと、自働車を飛ばしたものだつた。もちろん巴里安着の打電することも忘れなかつた。約束の『宗教の門』の原稿が氣になつてならぬので、兎も角も暫く腰をすゑてそれを執筆することと決めた。カレージ・ドウ・フラ



ンセのほとりに下宿を探してもらつて、筆を執り始めた。見物だの観光だの云ふ氣にもならず、夢中に筆を走らした。その間大使館だけには、よく缺かさず通つたものだ。只一本の便りを求めてね。行きには元氣だが、歸りにはいつも失望あるのみ。まるで、京から赦免の便を待つ鬼界ヶ島に於ける俊寛の如きものであつた。が、新著の稿を終ゆるまで、その甲斐もなく影だに、香りだにかぐ事は出来なかつた。この間一ヶ月だ。だが、何しろ一度の通信にまづ五十日はかゝるんだから、こんなにせつかに考へても仕方がない。殊に國では獨逸に落付くものと思つてるのだから、寧ろ伯林大使館の方へでもあらうか。と斯ふ考へ直すと、矢も楯もたまらず伯林へと急ぐのであつた。

着くや遅しと大使館に駆けつけた。が望みは果敢なくも消えた。一體何とした事であらう。と、今ではヒステリー氣味も手傳つて腹も立つて來た。だが相手が居ないので喧嘩にもならない。悄然とパンクした自働車を引づりでもするやうな格好で、シユタイン・プラッツのホテルに歸つて來るのだつた。この宿の白いベッドに横臥しながら、輾轉反側すること二日二晩。いくら考へたつて、考へやうもない。とは云へ信じ切つて居る私に、どうしてお前の變心だの反抗だの、想像する事が出来やう。思ふだに恐ろしいことだ。今は只運命の來り開くのを待つ外はない。氣を落付けての豫ねて、計畫の如くハイデルベルグに落

付く途がある許りだ。再び汽車にのつて一人南獨へ志した行李をこゝで解いて、茲一二年の腰を据へることにした。やつとブルーメン・ストーラセ一八なるネフ夫人方に宿を決めた旨通電して、どうやら氣が靜まつた。伯林に着いた頃から、ぼつ／＼國からの通信を手にし始めたので、こゝでも大使館よりの轉送を徒らに今か／＼と待つた。が、その甲斐もない。名狀し難い愁の雲は漸く濃くなつて來た。待つお前の手紙は來ないでI家から簡單なる知らせがあつた。それに依ればお前が家財道具一切を仕末して、北の方指して、行方定めぬ旅に就いたと云ふのである。運命は決したのだ。今ではも早歸らぬ二人のなかになるのを決心しての、その旅だとしか思はれない。そこで思ひは自然、始めてお前と遭つた當時に歸らざるを得なかつた。外遊の途につくまで、お前と同棲生活を送つたのは、僅々二年足らずであつた。互に相知つたのがその一二年前であつた。

私が學窓を出でて再度の東京生活を營み始めた年の夏であつた。講演の旅へとA市地方へ出かけた折のことだ。ふとした、ほんとうに、ふとした邂逅であつた。其の地方に十日許りも滞在したであらうか。A市を立つときお前は汽車まで、教育會の人達と一緒になつて見送りに來て呉れた。それは皆の視線を集めるに十分な風景であつた。婦人達の見送りが、他にないではなかつたが、お前一人が他の女性と異つた仕事に携つて居るものだと、

一見分ることであつた。もちろん他の教育會の人々とも、よくり合ひになつて居るのだつた。それから私は、つれのO君とF縣のW市で分れて獨りH温泉へ行つた。O君は次の講演地へ向け、私は温泉で原稿を書かうとしたのだつた。そこから土産をもらつたお禮の葉書を出したやうに覺えて居る。でもこんな事書いて行くと、「良い氣な奴だ、馬鹿にするな」と半疊が入らないものでもない。で良い加減なところでよさう。その冬A市の教育會から冬休みの間を利用して、宗教講演會を開き度いから、一週間許り來て連続にやつて貰ひ度い、と云つて來た。寒がりの私だから雪の中に行くのは嫌だが、Hに遭へるし行く事にしませう。と云ふ風に戯談半分に返事したものだ。それが實現してとう／＼行く事になつた。定まりのK旅館に着くや、兎もあれ來た事だけを電話した。ちやうどお前は留守であつたが、夜になつて訪ねて來たのだつた。それまでは何の契りもないあわきロマンスであつた。だが何時までも清き私達ではあり得なかつた。「胸の清水湧れて遂に濁りけり、我も罪の子、君も罪の子」の二人だつた。時もあらうに宗教講演會のおりである。云ふべからざる自責の念に打たれた。身も世もあらず苦しんだが、遅かつた。悶え堪え兼ねて、聴講者の前に私は、詫びた。こんなに身を以て苦しんだ講演會は、恐らくこの時を以て空前絶後となすであらう。私が罪にもがいて泣く親鸞の姿に涙するのは、かう云ふ譯で決して、謂れなき事ではない。私は聲涙共に下つて語つた。

豫定の日を終えて私は都に歸つた。雪解けて東北の地に、櫻桃梅李一時の春が訪れる頃、お前は都へ私を訪ねた。その地に積年累ね來つた生活を凡て、かなぐり棄て、私のところへ走つて來た。そこにはもとより幾多の悲劇が待つて居た。どんなに悲劇が生れやうとも、私が辛うじて得た教壇から去らねばならぬとしても、又志を立て、學界に身を處せんと都に來たとしても、どうして後に身がひかれやう。意氣に感ずるのが男でないか。殊にもとはと云へば、道樂氣から出た事でなく、遊戯でもない。眞劍なるロマンスの花である。自ら責を以てその果をとらうとするのに、何の不可があらう。形式から論ずるならば兎角の議論も生れやう。併し人格と人格の交渉に、何の悪いところがあらうと決心するのだつた。もし形の上でいけないと云ふならば、學界への志を棄てれば良い。教育者としてあるまじき結婚だと云ふのなら、教壇から、身も引きませうとの悲壯な覺悟であつた。さう云ふ二人であつたのに、私の旅の間に而も、何の斷りもなく家に歸つて了ふとは、一體何と云ふ仕打であらう。身も魂も捧げて辭しなかつたものが、只三ヶ月も経たないのに、何うしてかやうな變心があり得やうと、私には餘信じられなかつた。その不思議さに堪えないのだつた。親類縁者からは不貞腐と云つたやうな罵言の言葉もきくが、私はそんな言葉で解釋

はつかない。何にしても不可解千萬なのは、お前の心理的推移である。何う考へても分らない。

## その二

いくら考へても、悩んでも解らう道理もない。まるで私は疾走する汽車から無性につき落されたやうだつた。でなくても激しい神経衰弱に襲はれやうとする異郷の生活である。I家に打電し、又行先きは北海道だと云ふから、心當りの親類にも電報を飛ばして見た。でも夫が何にならう。今では萬策も全く盡きた。元來が意地張りなので、現在の苦衷を人に語る事は忍べない私のだが、氣も心も弱り果てては、意地もない。張りもない。この街で、先輩とするM教授のところに駆けつけて、事の次第を語つた。だが、夫れとて勿論無意味だ。私は自らの學を成さんがためにのみ、望んでこの旅に出て來た。が、それが仇となつて、妻を失はねばならぬのだ。學問のためと云つて家庭すら破壊しなくてはならぬのだ。知識もとより大事だらう。學問もとより棄つ可らず。とは云へかゝる犠牲をさへ忍べと云ふのか。學的功名心に燃えて、あとさき顧みないで、ひたむきに駆け出して來た自分の短慮、焦燥さを恨めしく思つた。もとより自分の攻學も大切だが、その前に私はもつ

とお前の教養を考ふ可きであつた。お前のために基礎的工事を心懸く可きだつた、と云ふ事が、お前の態度を責むる前に先づ顧みられるのであつた。さうであるならば、何時迄異邦の地に留まるも詮なき事である。「田園將さに荒れんとす、歸りなんいざ」と云ふ氣持で一ぱいだつた。そろ／＼行李を片付けかけた。併し考へて見ればいくら私のなすべき事が足りないにしても、一葉の片信すら寄越さないと何事だ。況んや人のはやる心も知らないで、挨拶もなく飛出すとは何と云ふ事だ。それが人の妻か、女房か。よしや疑ふまいとすれども、どうして疑はないで居られやう。思へば又熱湯を浴びる思ひ。そんな女房を追ふて何しやうと云ふんだ。追つて行つて男の顔が立つと云ふのか。O市驛頭の別れは旅の別れでなく、縁の糸の切れる初めであつた。人間社會に於る逢會別離の果敢なきを思ふ許りである。かやうに考へれば飛立つて歸朝するのも、無分別の極みである。やつと少しは冷靜に返つて、その土地にふみ止るのであつた。かゝる頃友の『平家物語』を借りて來て、夜な／＼読み耽けつた。一つには之で郷愁を慰め、又一つにはあのなかに盛られた宗教的情緒によつて、魂の傷を救はんとするのだつた。

滯歐の日を豫定より約一年も早やめて歸朝の途についたのは、多分は經濟的事情に制約されたためであつたが、他面には諦めたものの諦め切れないで一日も早くお前の安否を

伺ひ度い氣遣ひからでもあつた。西伯利亞横斷以來の汽車を朝鮮ですてた身は、連絡船で先づM港につき國を見舞つた。その折に母や兄から、お前の事を聞かれるにつけても、返答する言葉もなく、只暗然たるのみだつた。東京に歸つて見ても、落付ける家もない。行李を解くべきところもない。それどころか、一枚の寝間着の浴衣さへないのである。アパートや、安いホテルや友の家などにあちこちと身を寄せて、數週間も過ごさねばならなかつた。わが妻はと云つて問ふ勇氣もなければ、又知己友人達は知つては居ても、この上の鞭を私にあてると思つてか、進んで聞かして呉れる人もなかつた。永年あこがれの留學の旅から歸つたと云ふのに、まるで亡命の客たる姿。これではいかに北海の地まで訪ねて行かうとしても、世間の義理からでも行けたものではなかつた。新歸朝者も漂々浪々の孤兒である。憂鬱の日續いて半歳位の時が流れ去つた。結婚問題があちこちから起きた。歸朝の事は新聞雑誌の消息欄なり、乃至は風の便りで分つて居る筈なのに、迎ひにも來ない。半年有餘も經つて居るのに、その風情すらない。だとすれば私に例へ未練があればとて、今更どうとは云はれない筋。のみならず客觀的狀勢は次第に迫つて來る。退引ならぬ義理にからめて、私を結婚せしめやうとする計畫さへ目前に、露骨に現はれるに至つた。本人の至純の情から出たのならば、もろい私はどうなるか分らない。が、權威と義理と計畫とで

陥られるとなると、一刻もじつとはして居られない。それに反抗せんとする氣持からでも、私は第二の結婚を急がねばならなかつた。

それに就ても考ておくべきは、何故我等の結婚は破滅したかと云ふ原因である。それに對する反省である。

- 一、餘りに自由戀愛論を文字通りに實踐したため、お互に規範なく、我儘であり過ぎた。仲人の束縛もなければ、お互ひ家庭的強制力もなかつた。これが良くない。
- 二、お互の教養が異なるため、卑下する心は被壓迫の感となり前途に對する恐怖となり、不安となつて現はれた。居ても立つても居られないお前の氣持であつた。それが私には分らなかつた。

と云ふやうな所に原因が秘んで居るやうだ。それならば今度はかゝる難點を除くやうな方途に出でねばならぬ。そこで私は目標を

- 一、先づ傳統的な媒妁結婚であるべき事。
- 二、相當な家庭の子女であつて、高等の教養をもつて居ること。

に重點を置いて、友人の勸説懲慚もある事だし、娶らうとしたのがI子であつた。この話が進捗してゐる頃、お前から思ひがけなき電報である。何日上京すると云ふ事を報じた。會つ

て見れば町の顔役を具して、陳謝のための上京だと云ふのである。ちやうど明後日は結納式と決つて居る時だつた。私はそれこそ嘔然たるのみ。だん／＼と云ふ處をきけば今迄私の反省し得なかつた非もあるし、その心境に同情を禁じ得ざる處もあつた。少からず心を動かされたのは事實である。併し私には結納はまだ済んで居なくとも、今となつては義理の手前、いかんともせん術なく、今は返らぬ事のみだ。皮肉なる運命の悪戯と呪ふより外にはない。折角のお前の上京もその甲斐なく、お前は北の國へす／＼歸つて行くのだつた。私は、私で斷腸の思ひしてお前を送り、義理と義理との前に従順に事を運ぶのだつた。T子との結婚は、お前の出立後一ヶ月足らずの内にあげられた。

### その 三

これで凡てが清算されたのなら始末が良い。お前も諦らめたであらうし、私も救はれたであらう。どこ迄因業な私達であるか、T子との結婚は一層深刻なる人間の闘争を私に経験せしむるのみだつた。悲劇を更に深刻にせしめてよいか、子供が與へられるのだつた。その子が生れた日がT子と永久に別れる日であつた。例へ子は死し、自分の身はなき者になつても、と私の胸中に燃えるのだつた。かく憤らしめたものは、誰あらうT子その人の家庭であつた。こゝで詳しく語る勇氣もない。私の結婚問題に就て一再ならず心配を煩はしたY博士は『どうして君はさう家庭に恵まれないかね』と述懐されたが、愚痴を出すまいとしても、不幸不運の我身が情けなくもなるのである。事をなすに當つて不純な気持ちでは毫もやつてる積りではないが、泣言こぼさいで居られぬ。

それでも悲劇はまだ終幕ではない。運命の翻弄はまだ終つたのでなかつた。幾度びとなき血税を拂つて、お前は又歸つて來た。と云ふのも併し束の間であつた。一年も経たないうちに、袖を分たねばならなかつた。親類縁者や友人諸氏を煩する一方ならずして、やつと復歸したのにこの始末だとは、何としても人に話された事ではない。四谷の家に漸く落付いて、どうやら家庭らしい家庭を営み得たのも、ほんの束の間、まる一年も來るか來ないに、お前はとて一緒の生活は出來ないからとの申出だ。別居の生活をやつて見やうとの話である。風波絶え間なく暮さうより、夫も一策、殊に來たかと思ふともう喧嘩だ、別れ話だとは、先輩や友人にもつて行きやうもない。波瀾なく行けるものなら行き度いと腹で、同じ区内の片町に家を借りて女中相手にお前は暮らすやうになつた。近代夫婦生活の新しい形式として、之を面白いと考へたのは、好奇心を満足させた當時だけの話し。之が抑も／＼の間違ひの第一歩だつた。第一瘦我慢はして見たものの、二つの世帯を張つて行かう

と云ふのは、我等風情には最初から無理である。内助の務をなすべき者の仕事と云ふものは、かゝる形式では一だつてもちろん出来ない。お互に苦勞を分かち合つてこそ愛も生れ、ほだしも付くと云ふもの。之では單なる事務的結合であつて流行の友愛結婚にも及ばない。

かゝる形をとらうと云ひ出した理由の最大なるものは嫉妬にあるやうだ。世にも恐しきものは女性の嫉妬だと、私はしみく思ふのである。世に處して行くのは、いかに敵多からうと、暴風雨が強からうと、必ずしも切抜けることは難しくはない。併しこの氣持には何とも始末の付けやうがない。常識で判断の出来ぬ世界が嫉妬の世界である。もとより私は善根功德に専念する聖人君子ではない。が、淫蕩極まりなき野良息子でもなからう。身の不徳を責めてこそ居れ、放從懶怠の生活に日も足らない極道でもあるまい。それで私の社會的責任が保たれようか。返らぬ今となつて、申譯する必要もないが、それが破局の根本動因と云ふに至つては、只あはれの一語につきる。よしんば私が嫉妬に對する罪業がないにしろ、私が之をよく制御指導するの力量徳望の缺乏して居たのは事實なのだから、今はた何をか云はんだ。殊に一度ならず二度ならず失敗したのだから、私に責の大半があるのだらう。かくて私にとつて結婚は、世間で一番恐ろしいものになつて了つた。夫がだ、皮肉にも學説としては、家庭が人倫生活の出發點となして居るのだから、猶更に悲惨である。

幾度の悲惨事に生々しき傷手の新しいものがあるにしろ、この信條をすてる事は出来ない。と云つて花よりもめでにし我が子よ、頼みなき旅路を何處にさ迷へるか、と云つたやうな感じは、正直のところ微塵もない。只お前に望むところは、乏しきにかこつ事なく、與へられたる處を至極の地として安住すること。「盗人のとり残したる窓の月」と云ふ風懷だけ持つたらば、と思はぬでもない。その心こそ眞の救ひなのだ。でないならば、昔に變らざる苦悶焦燥に悩むのみであらう。私は數々の苦杯をなめたおかげ、痛みが骨に徹して、「右の頬を打たれなば、左の頬を向けよ」との言葉の味が分つて來たやうである。反叛の提婆提多に善知識だと云つて、感謝した釋尊の心境が味讀出来るやうにも思はれ、打たれても、ふまれても「凡ては皆感謝であるやうに思はれて來た」雲は流れ、水は逝くのだ。今はた何を恨みやうぞ。

B 現代哲學の動向

現代哲學の動向は、その本質から見て、  
その歴史をたどることは、その本質を  
理解するに必要である。その歴史は、  
その本質を表現するものである。その  
歴史は、その本質を表現するものである。  
その歴史は、その本質を表現するものである。  
その歴史は、その本質を表現するものである。  
その歴史は、その本質を表現するものである。

I 街頭哲學の論理

—

先達て偶々日比谷を歩いて居たら、ひよつこり社會學者Tに遭つたので近くの美松の階上に上つて、歳末風景でも眺めようではないかと云ふ事になつた。ここの食堂で紅茶を飲みながら、豫て私の思索の問題でもあつたので

『戦争の理論的根據をば、君の立場から一體何う見るかね？』

斯う私は彼に問ふのであつた。すると彼は

『人を殺すのを眼目とする戦争を××すべき根據は、君いくら考へたつて、ありやしないよ』

と彼はあつさり答へるのみだ。それから彼がこの夏以來しきりに涉獵耽讀したと云ふ日米戦争に關する蘊蓄をば披瀝するのであつた。私にとつて興味をもたれたのは、戦術に關した話であつた。いかにも夫が學問上の方法論に似て居るし、又人生に處して行く處世術をも思はせたりして、なか／＼に面白かつた。それからウヲターローの戦ひこの方、日露戦



争に至る戦術の變遷に就ても彼は語つた。とは云へ、いかに興深ければとて、私の肝心の謎は依然解けなかつた。

かうして私は再び深い疑惑に陥るのだつた。そして幾週幾旬かを過した。かゝる折端なくも可憐な現象を見出した。と云ふのは他でもない。私の獨り兒が春から近所のルンビニ幼稚園に通つて居る。そこに一人の腕白小僧が居て、始末に終へないさうである。私のうちの兒は、私に似ないで内氣な上に小さくもあるし、力も足りない。腕白なのは、それが覗ひで、毎日うちの兒をいぢめては泣かすと云ふ事である。子供は一向に之を話さなかつたので、私は知る由もなかつたが、二學期も餘程経つてから、始めて之を他の者から聞き知つたやうな次第。只親心から、かよわい幼兒の上を思ふては、心を暗ふするのみであつた。

よし夫れならば、他に幼稚園がないではなし、かへてやらう。したら毎日泣かされるやうな氣遣ひもない、とかう決心するのであつた。だが待て暫し、他に移すとしても腕白者は世間に只一人ではなし、何處に行つたつて一人や二人はきつと、つき者である。なまじい轉校さしたつて仕方がない。と思つて始めて私は頑是ない子供の世界にも亦、免れ難き争闘の姿を發見するのであつた。エデンの園とも思はれる幼稚園も、決して平和の天國ではない。争ひの巷であつた。して見れば人生寧んぞ争闘絶えざらん。されば「門を出づれば敵あり七人」と云ふではないか。昨日の味方は今日の仇、兄弟内にせめぎ、父子相争ひ、身も心も許す愛人ですら、仇敵とならねばならぬ浮世の定めである。マルクスが云ふやうな闘争は、只階級の間に限られた問題では決してない。一個の人間と人間との間に、既に斯くの如く、争ひが絶えないものならば、國家が一存在である以上、國と國との間にいさかひのあるのは、何も不思議でなからうでないか。「軍縮」とは畢竟人道の××にかくれて相手の攻撃力を弱めるべき手段に他ならない。國際聯盟の馬脚は既に十分明かにされた通り、××的平和主義者の討論會以外の何者でもない。もとより大した期待を持つ必要もなければ、恐れるにも當るまい。

カントは誰もが知るやうに「永遠の平和」を書いて居るが、それは争ひ餘りに繁き人の世に於ける久遠の理想を説いたにすぎない。遂にこの現世に見る可からざる夢である。治亂興亡の人類歴史の跡は、只々争闘と破壊の連続ではないか。何を嘆き、何を悲しむと云ふのだ。平和が只徒なる夢であつて、争ひこそは如何ともし難き人生の姿とするならば、一體之を何と説く可きか。争ひとは矛盾の對立である。AはBでなく、BはまたAでない。かくてAとBとは矛盾の對立となり、衝突せざるを得ない。個人と個人と角つき合ひ、國

家と國家との戦ひは免れ難い。相異なるAとBどころか、同じ個人のなかに、同一存在のなかに、既に矛盾が包藏されて居るのであるも。

考へても見るが良い。我等人間は生れ落ちたと喜んで居るが、やがて死なねばならぬ。生をこの世に享けると同時に、我等は死の運命を擔ふて居るのだ。どうせ死ぬべき人の命ならば、生れて來なければ良かった筈ではないか。この位矛盾の甚だしきはあるまい。だからヘーゲルは云ふのである。凡ての存在、凡ての概念は、その存在自身のなかに、その概念自體のうちに矛盾を宿すと。世の葛藤と云ひ、悩みと云ひ皆この矛盾の現はれである。とは云へ、悲しむ必要は毫もない。死せるものには死なく、悩みもない。悩みも死もつまりは、生けるものの光榮であり、慢りである。

かく矛盾あるところに争闘がある。争闘のあるところ變化がある。變化はやがて發展である。蓋しAとBとの對立は統一される。かゝる統一は前の段階よりも深められ高められた姿である。それだから發展とは呼ばれるのである。この統一をば平和の境地と云はば、謂ひ得るであらう。而もこの統一は何時までも統一平靜の状態には在り得ない。生命は不斷の流れであつて、暫くも停滯して居ないから再びそれ自身のなかに矛盾が包藏される。かうして人間の歴史は進展を續ける。それ故國家の存在を認める以上、又國家が生きて居

る以上、戦争は避け難き運命であらう。こゝに私は生きて居る以上と云つた。生ける者には當然生存權の主張がある。どんなに小さい動物といへ共、如何に生存權の主張のために渾身の努力を捧げて居ることか。國家だからとて聖人君子を氣取るものでもなからう。

だと云つて、私はホップスが云つたやうに『人間は人間に對して狼である』と説いて、犬でもけしかける工合に、只吼えろ、かみ付けと云ふのでもない。人間の動物性のみを高潮して帝國主義、侵略主義を説かうとするものでもない。國家はもとより人倫生活の舞臺である以上、正義や道徳を無視しては在り得ない。

こん度滿洲問題にしてからが、何も高利貸みたいな侵略がそのイデオロギーになつて居るのではない。その端を日清戦争に發する、と私は觀る。それは支那の侮辱に對する義憤であつた。次で三國干涉などに依る極度の壓迫が、日露の戦ひとなつて現はれた。それらの戦ひに依つて結ばれた公約は併し一つも果されなかつた。支那の無誠意と不實とは曆年累積した。滿洲事變の勃發は、かくして何うにもならぬ公憤であつた。かくなるべき歴史の必然性を、私は肯定し得ると思ふ。

かやうに凡ての現象をば歴史の必然の上から觀ようと云ふのが、即ち辯證法的考察なのである。歴史的必然とは一寸一般にまだ慣れない言葉であるが、『謂れ因縁の理法』とでも

云ひ得られやうか。哲學の仕事はつまり、人生諸般の現象に對する意味を與ふるに在り、と私は思ふのである。ところが、カントのやうな考へ方からは、この意味が與へられないのだ。何故とならば、彼は『現實の世界』と『理想の世界』とを全く離して了つた。そして彼は只もう『理想の世界』許り考へて、現實界を顧みやうとしなかつた。永遠の平和などを論ずるのでつて、さうである。だから彼の哲學は夢談議とならざるを得ない。現實を顧みないので、勢ひ内容空疎な形式一點張りのものとなつた。形式論を以て終止する生命なき哲學となつた。謂はゞ動かぬ花電車に過ぎないのである。

彼の用ひる論理は徹頭徹尾形式論理であつた。また其哲學の中心を形造る『理性』にしても單なるミラーであつて生命あるものでなかつた。かやうなミラー哲學に對する反動として生れたものが即ちヘーゲル哲學である。カントに於て『理性』の役割を演ずるのがヘーゲルに在つては『精神』なのであるが、この精神は生々發展、暫くも已む事なき生命その者である。又彼の用ひる論理は、かゝる生々流轉の姿を把まうと云ふ『辯證法』である。辯證法とは夫れだから、發展の論理であり、生命把握の論理である。否生命その者の論理である。さればこそ、之に依つて現實の人生をさながらに認識し得るであらうし、人生の意味を見出す事も出來やうと云ふものだ。即ち歴史的關聯の上に、凡ての事象の必

然的な理法を見出さうと云ふのである。

人間の精神は思想である。精神が生きて居る如く思想はもとより死んでは居ない。思想は哲學である。かくて哲學は又潑刺として、生活を續けてゆく。こゝに人間の面目は存する。かく世を眺むれば、所謂『柳はみどり、花は紅』であつて、一切が興趣少からず、物皆感謝の極みとなる。如何に生活苦に惱んで居やうとも、『焚く程は風がもてくる落葉かな』の悠々たる氣持で居られやう。この心境こそ、哲學が實踐し生活する姿なのだ。

## 二

こゝに私の云ふ『生命の哲學』がある。生命哲學は『生の哲學』乃至『生活哲學』である。謂ふところの意は、哲學をして現實の實踐に生かさうとするのである。従前の哲學が餘りに抽象の理論にのみ終止して居た。そこに云ふべからざる不満がある。現實の活ける生命や生活から離れて、何の哲學ぞや。象牙の塔に立籠つて、論理的遊戯にのみ耽けつて居た哲學を先づ大衆のものとしなければならぬ。雄々しく街頭に進出しなくてはならぬ。『街頭の哲學』とはかくて生命哲學の街頭進出の謂となる。我等の生活に力を與へ、光を與へ、更に生活の力となり、糧とならしめやうと云ふのだ。併し、スチュアート・ミルやベンザ

ムなどの唱ふる功利主義的倫理を説かうと云ふのではない。又或はウキリアム・ゼームスが説くところの實用主義なる哲學たらんとするのではない。希臘は亞典華かなりし頃哲人ソクラテス現はれた。謂はゞ彼の姿にも似て居るであらうか。彼はソフィストの一人である。ソフィストと云へばわが國では詭辯派と譯せられて居るが、實は學匠とも云ふべきものである。彼等以前に哲學はあつた。併しそれ等は只宇宙の發生や、世界の起源と云つたやうなものを論じて、大衆の生活とは何の關りもなかつた。そこに出現したのがソフィストであつた。彼等は街頭に躍り出でて、學藝をば青年學徒に授くるのであつた。ソクラテスも亦街頭に出でて彼の哲學を説いた。彼の哲學は勿論理論の遊戯を以て満足しないで、説く處は『哲學の實踐』であり、『實踐の哲學』であつた。さるにても彼の實踐の哲學は道德的色彩を多く出でなかつた。私の説かんとする生命哲學なり、乃至は街頭の哲學は只道學なり倫理に終るものではない。寧ろ哲學と宗教との融合である。現實の生活に安住の地を見出さんとするのだ。彼岸の淨土を夢想せしめて、阿片性を強調せしめんと云ふのでなく思惟必然の上から生命を把握し、自己を認識せしめやうといふのである。かゝる再認識の上に、勇敢なる生活の行進曲を奏でんとするものなのだ。乞ふ今暫くその論理を展開しようでないか。

昨年の晩春だ。東京放送局で講演の放送をやつた。日曜の朝十時からの『修養講座』の時間だつたが『現代生活の哲學』なる題であつた。寢坊の私は朝の講演は一寸困り物で、とう／＼五分許り時間を遅れて了つて、放送局をばら／＼さしたものだつた。ちやうどその日は朝からの雨であつたので、先づ私は次のやうに話を始めるのだつた。

「今朝起きますと篠突く雨でありました。昨日の天氣豫報では、からつと天氣が良くなる」と聞いて居りましたにも拘らず、今日は大變な雨であります。一寸見當が違ひますし、昨日の雨で、随分損害を受けた方々もあるやうに聞いて居りますし、今日も復たそんなことではないかと言つたやうなこと迄、案じられました。變な氣持になりました。無論私も雨はあまり好きでないんで、いやな氣持も致しました。が、考へて見ますと、この雨も私に取つて大變感謝しなければならぬといふ氣持にもなるのであります。何故と言つて、若し今日が朝から日本晴に晴れたとすれば、スポーツだの、遠足だの、ピクニックだの、郊外散策だのと言つて、出掛けて歩かれる方が多いでありませうが、雨がしと／＼降るので、私をつまらない講演でも、お茶請け代りにお聞きになるでせう。聞いて呉れる人達は、晴れた日より多いだらうなど考へて見ますと、雨が寧ろ私にとつては感謝しなければならぬ、有難いことだと思ふのです。」と。

斯ういふ風に、ものは考へやうである。憎むならば、どんなにでも憎らしい。呪ひたいと思ふならば、呪ふべきものが数々あるであらう。だが考へを一步轉ずるならば、一切のものは盡く自分に取つては感謝に價する。有難いものだといふ氣持になるものであらう。世間に生活を立てて居れば、色々な方面から色々な壓迫を加へられたり、苛められたりするやうな場合も少くない。私なんかはもと／＼弱點や不徳が數々多いので餘計にそうなのだ。現に一昨年暮あたりから昨年初頭にかけて、私が責任を持つてゐる科の生徒が盟休をやつた。これは私にとつては始めての經驗であつたが、眞におぞましい限り、全く恐ろしい氣持に襲はれるのだつた。決して朗かなものではなかつた。さういふじめ／＼した氣持の中に幾日となく、一ヶ月續き、二ヶ月といふ風になると、益々神經衰弱になつたり、果ては氣も狂はん計りになつた。呪しいと思ふ揚句に、浮世がどうでも厭になるのだつた。併し考へて見れば、さういふ盟休なんかに依つて、私はどれだけ磨かれて行く事か。一寸言葉が變かも知れないが、つまりさういふ事が、どんなに私に反省を與へて呉れる事か。學生達から色々な問題を持ちかけられ、又は色々な人が考へさせて呉れる、緊張の氣持を與へて呉れる。恨むどころか、盡く私に取つて有難いものになつて來る。キリストやトルストイや、將又ガンヂーなどの説くところのやうな、『絶對服従の氣持が、どうやら理解されるやうである。釋迦に對して、それまで彼と一緒に仕事をし、教を宣べ傳へることに働いて居つた提婆達多が自分に反逆し、裏切つてしまつた。そんなにした彼をば善知識だと釋迦は呼ぶのであつた。自分に反逆した人、自分に背いた人さへも憎まないで、自分に取つて善知識であつたといふやうな考になつたといふのは、釋迦がいか許り宗教的であつたかといふ事を思はせる。その氣持こそ宗教の極致ではないか。そこにこそ本當の宗教的態度があるだらうと思ふ。

以上はむしろ、私の哲學的反省から得た結果である。さうした氣持は、やがて宗教と一味相通するものがある。かくて宗教的慈度と哲學的反省は最後に於て一致する。更に一步を進めて云へば、私の考へる處では、宗教と哲學とは別なものではない。一つのもので、一點に到達しなければならぬと思ふ。何も哲學は飽く迄も哲學であり、宗教は飽く迄も宗教であると言つて、お互に各自の領域を守つて侵さないといふ必要はないであらう。どうしても兩者を別々にしておくと言ふのがカント流の考へ方である。が、極力私は夫に反對したい。この間も、ある講演會の席上で、宗教と哲學とは同じものだと言つたら、その中の一人が猛然と、『さういふ考へはカントにはない。桑木さんには無い』と言つて抗議を申込んだ。私自身の考へでは、誰が何と言はうと、カントの哲學に従ふ必要もなければ誰々さ

んの考へ方に従ふ必要もない。私は私自身の立場に於て、哲學と宗教とが一つだと云ふのである。思ふても見よ。昔から、どんな宗教でも、その根柢に於て哲學的でなかつた宗教はない。又どんな哲學でも、その氣持に於て宗教的でなかつたものはなかつた。その誕生から考へれば、哲學にしても、宗教にしても、その出發點は人生に對する不滿、焦燥、或は苦悶、苦惱、懷疑であつた。夫れが宗教を生み、哲學を生んだ。従つて宗教の背後に哲學があり、哲學の根柢に宗教がある。かくて兩者は最後に於て一點に會する。否、兩者は毫も異なる所は無いんだ、といふ結論に達するだらう。

釋迦が反逆者提婆達多をば善知識と言つた、そこに宗教的な氣持があると、私はさきに云つた。私は私自身の考へからして、總てものが自分に取つて意味深いものだといふ事を考へるやうになつた。一體哲學は何であるかといへば、哲學は人生に於ける意味の發見といふ風なものではないか。つまり色々な事象、様々な事件、難かしい言葉で言へば文化と云つたやうな、人生の諸相に對し一々意味を見出すのである。さういふ考へ方からすると世の中の一物と雖も無意味なものはない。總てのものはそれ／＼の意味を持つて居る。かかる考へ方から、始めて降る雨を喜び、反叛者に對し感謝の心が向けられるであらう。かういふ考へ方をする哲人は、ヘーゲルを措いて外にないと思ふ。

ヘーゲルに「現實のものは合理なり」と言つた言葉がある。云ふところの意味は、現在するものは總て合理的であるといふのだ。何だか大變難かしい、開き直つた言葉のやうだが、これを碎いて云へば、何でも在るものは尤もなんだ。合理的だといふ事は尤もだといふ意味である。天理教などに於ても、因縁の理を説くが、夫は現在の姿に對して、尤もだと云ふ考へ方ではないか。在るが儘の姿に對して歴史的必然の理由を與へんとする態度ではなからうか。

私がヘーゲルの研究に没頭して居るからとて、その説を上げる必要は少しもないのだが、たゞ私はその考へに深い意味を見出したいのである。彼の考へ方は世の中の一切のものに意味を見出さんとするのである。即ち彼の考へ方は歴史的に、歴史の上から、眺めるといふのである。史的必然の姿に於て見やうと云ふのである。普通に使はれて居る言葉で云へば、總てのものは因縁があつて生れたといふ事になる。總てのものは因縁があつて、それ／＼の因縁とそれ／＼の理由とを以て生れたといふのだ。この考へを發展せしめたものが辯證法の論理である。

近頃議會淨化、政黨淨化といふ事がしきりに用ひられて居る。かういふ言葉も、やはり斯くある所の理由があつた。憲政布かれて幾年、その間にごたく／＼があり、色々な罪惡も

生れたと世間では云つて居る。だから斯くなるべき又淨化されなければならぬ理由と根據とが、今迄の間に積み重ねられて居つたのである。即ち議會淨化、或は政黨の改革といふ事は歴史的必然なんだ。斯くしなければならぬ因縁があつたんだ、といふ事になる。

斯く、總てのものを歴史的に眺める。詰り一切は因縁に依つて生れた。それに謂、因縁があつたのだといふ風に見るのが即ち辯證法である。世の中に呼ばれる辯證法といふのは大變七難かしいやうに考へられて居るが、要するにかやうな考への外には出ないのである。

斯ういふ風に考へて來ると、それでは一切のものは縁であるから、在るが儘に放つて置き。なるが儘に放つて置く事が良い、といふ宿命觀、所謂運命に捉へられはしないか、と虞れられるでもあらう。同時に又我々は目的を持つてはいけない、或は理想を持つてはならない。否、持つても詰らない、目的や理想などは持つても仕様がなない、といふやうな議論になりはしまいか。言葉を換へて云ふと、歴史的な考察、辯證法的な考へ方は無理想となり、無目的になる虞れがある。ところで、理想を遠い彼岸の彼方に眺め。目的は天上の彼方にあるとする。我々は現在目的に適ふものではない、亦價値があるものでもない。蘇東坡だつたか、『赤壁之賦』でと詠んだやうに、『美人を天の一方に望む』天の一方にかすかにきらめく光が理想であり、目的である。そして現實にはさういふ事は無いんだ。これ

が所謂カント流の考へである。併し我々はさうは考へない。我々が歴史的な關係に於て眺めるといふ事は決して目的を廢し、理想を沒するといふ事ではない。寧ろ理想なり、目的なりをば現實の中に發見するのである。今有る所のものに見出すといふやうに考へる。譬へば、メーテルリンクの、有名な『青い鳥』といふ戯曲がある。チルチルとミチルといふ二人のきょうだいが青い鳥を追つて、遠い旅に出る。『青い鳥』は無論目的なり、理想なりを象徴したのであるが、人々はそれが遠い彼方にあると思つて居るが、實は我々の足もとにある。『盡日春を訪ねて春を得ず却つて在り窓前一枝の梅』と云ふ工合に我々の脚下にあるんだ。眞理を求めて遠くに旅をするよりも、足もと三寸を掘るならば、そこに眞理は泉のやうに湧いて居るのではないかこの考へは即ちどうしても我々自身が我々自身に歸る、我々の精神そのものに歸つて行くといふことになる。それが即ち哲學であり、宗教であり、又凡ての文化の動きでもある。

## II ファツシズムの論理

ファツシズムと云へば、我等は直ちに獨逸に於けるヒットラー運動を思ひ浮べるであらう。何しろ彼の國では、近頃素晴らしい優勢さを示して居るので我等の聯想を誘ふのである。と云つて、ファツシズムと云ふのは、もと／＼獨逸語ではない。ファツシオなる伊太利語にその源を發する。ところが此の伊太利に於けるムツソリーニのファツシズムと、ヒットラー運動とは一脈相通するものがある。のみならず近時我國に擡頭して來た國粹主義思潮もそれ等と思想的關聯がないとは云はれない。先づヒットラー運動であるが、之は、一口に云へば、赤色運動に對する極右的組織であり、行動なのだ。と云つて極右的反動のテロではない。ピストルや爆彈ではない。彼等の標語は燃ゆる意氣と、合法的な力なのである。元來一九二一年から一九二三年の獨逸に於ては、白色テロ横行時代であつた。この間に行はれし、暗殺事件だけ數百に上つたと云ふのである。然るにかく獨逸國民を恐れしめた極右暗殺の横行が、ヒットラー運動の大衆化と共に其跡を絶つた。このヒットラー運動とはアドルフ・ヒットラーに依つて起された獨逸國民社會運動である。彼の國民社會主義は戰鬪的社會主義であると共に戰鬪的國民主義である。そして先づ共產黨と戦ふことか

ら始められた。當局は共產黨と聯合して彼等を彈壓した。併しこの彈壓も無意味であつた。一昨年の總選舉では十二名から一躍百七名を贏ち得た。のみならず最近の大統領選舉ではヒンデンブルグ元帥の一千八百萬票に對し一千百萬を得た。遂に再選舉せざるを得ない破目に迄立到らしめた。民族主義に依つて立つた彼の素晴らしい人氣推して知る可しである。之に依つてみても、又獨逸に於て如何に民族精神なるものが鬱勃として居るかを察し得られるであらう。更に昨七年の春頃の情勢では獨逸大統領は緊急令を以て、ナチスの頭首ヒットラー氏の褐色隊に對して解散を命じたと云ふのである。何しろヒットラーは最近突如として現はれた巨人である。名もなき一青年の身を以て、輝かしく武勳をもつたヒンデンブルグの老元帥を向ふに廻す程の代物である。前回の大統領選舉では老ヒンデンブルグは、譯もなく絶對過半数を勝ち得たが、一度びヒットラーが現はれると苦戰の結果、再度選舉の後辛うじて、その地位を保つ事が出來た。

殊に又今度の大彈壓に對しては、褐色黨は些かの痛痒を感じざるかの如くである。彼等は語つて居る。『褐色黨解散の緊急令は結局政府に對する國民の反感を喚ぶ許りである。緊



急令は四十八時間以内に無効に歸するであらう。大統領に對する國民の信頼は覆り、政府は自らその首を縊るの醜態を曝す外はあるまい』と豪語してゐるやうに傳へられて居る。

以上でファツシズム的氣分のヒットラー運動の狀勢を大體述べた。そこで私はファツシズムその者に急がねばならぬ。元來ファツシズムとは邦語に移して國粹主義と呼ばれやう。種々の説もあるが、在伊十數年にして伊國通として知られた下位春吉氏に依れば、このファツシオは「束」と云ふ意である。大根や菜葉の一と束を伊太利語では一ファツシオと云ふのださうである。この説に従ふと即ちファツシズムとは「束主義」である。然らば伊太利にどうして此のやうな主義精神が生れたのであらう。彼の國に於るファツシズムの發生に就ては最も深い關係のあるのは歐洲大戰である。一九一五年、洞ヶ峠を下つて聯合軍に味方した伊太利は、戦局の展開につれて、國力を盡して戦はざるを得なかつた。この際、第一線に馳驅して護國の楯となつたのは主として學生と農民とであつた。古來征戰幾十回と、唐の詩人も歌つたやうに、伊太利が受けた戦争の打撃にも、亦傷ましいものがあつた。聯合軍に加擔した伊太利は、豫期の酬を得たであらうか？ 密約は裏切られて、嘗めたのは、苦い屈辱に過ぎなかつた。ダモンツイオのヒューメ占領は、即ちこの屈辱に對する止み難き反抗であつた。一方では、勝利の喜びに酔つた若い戦士達が、國民の盛な歓迎を豫期して還つて來た。だが此處でも酬ひられたものは、只冷い失望のみであつた。經濟力の疲弊、戦時に於ける婦人の社會的進出など、時を得顔に、はゞをきかせてゐた者は、鐵砲の音も知らずして、懷を肥した工業資本家の一團であつた。この有様に我が時到来りと起つたのが、社會主義者である。參戰當時、頑強に戦争反對を主張した彼等は、我が豫言を見よとばかりに、運動の烽火をあげ始めた。露西亞の革命は、更にこれに油を注いだ。地方には小作争議、都會には労働争議、怠業、罷業、工場占領等々、頻々として勃發した。更に議會に多數を擁してゐた社會黨は、「不斷の擾亂を惹起すべし」とまで威嚇するのであつた。而も當時の内閣は、これを如何ともなし得なかつたのである。伊太利の天地には暴風雨の前の雲行の頗る暗澹たるものがあつた。遠からずして、伊太利全土は、血の洗禮を受けるであらうとは、一般の豫測であつた。この危機に於いて祖國を救へと起つたのが、ムツソリーニを中心にして集つたファシストの一團である。かくて最初ミラノ市に現れた黒シャツの一團によつて愛國運動の烽火があげられたのであつた。ファシストの愛國運動は、やがて農民の支持を得た。一九二二年ローマ進軍の後には、僅かながらも議會の椅子を獲得したのであつた。

大略かやうな過程をとつて、現れ出たのがファツシズムなのである。従つて、ファツシ

ズムには、本來理論は無い。「伊太利が要求したものは、救済プログラムではない、人と意志であつた。」と云ふムツソリーニの此の言葉に、ファツシズムの本領を見ることが出来るであらう。プログラムが無いといふことは、往々にしてファツシズムに向つて投げられる一つの非難である。然しながら此の非難は必ずしも、正鵠を得たもの、とは言はれないと思ふ。凡そ如何なる場合にも、實踐は理論に先立つものなのである。希臘の哲學は、自然に對する驚異に始つた。近世に於ける自我の自覺は、中世紀に於ける教權の壓迫を外にして考へることは出来ぬ。又理論の精銳を誇るマルキシズムにしてからが、當時の社會狀勢をぬきにして考へられるものではあるまい。ヘーゲルの言「ミネルヴの梟は、せまり來る夕闇に始めてとび出す」とは即ちこゝのところを指す。火事の原因を探り、消火法や豫防法の理論を整へることも、勿論大切な事ではある。然し現に燃えてゐる自分の家を見て、今更火事の理論でもあるまい。「堀割の水より、奔流の方がいゝのだ」とは、或るファシストの言葉である。ファツシズムは、焦眉の急に對する生命の奮起であつた。内にひそむ民族精神の躍進であつた。ファツシズムに従へば、國民の利害休戚は一にかゝつて國家に在る。國家はその終局的の爲めに、國民各個の能力を發揮せしめなければならぬ。個人の慾望や團體の意志は國家目的の爲めには、必ずしも顧るを要しない。祖國愛をば、國民の胸の中に喚び起すことが、ファツシズムの最高の義務である。これこそは、ファツシズムを支へる唯一の礎石なのである。政策も理論も、他のすべては、これから派生した幹であり、枝である。ファツシズムが、短い時日の間に、大衆の心を掴み得た所以も亦こゝに見られるのであらう。

理論は抽象である。生命の色あせる處に理論は生れる。生きた人生の問題は、生命のひからびた様な理論を以て解き得るものではなからう。かやうに考へるのが、ファツシズムである。だからファツシズムは、理論を有たぬといふよりも、寧ろ理論をば嫌ふのである。此の點に於いて、ファツシズムには、スチルナーの思想を思はしむるものがある。然しながら、スチルナーが、個人をば唯一の實在唯一の價値と見る時に、ファツシズムは、國家至上主義の福音を説いてゐる。こゝにファツシズムは、ヘーゲルの思想に接觸するのである。ヘーゲルに於いて、國家の本質は、倫理的生命態なのである。個人や個々の權利は、全く國家意志に溶け入らなければならぬ。國家は、ヘーゲルにとつて、理性的道德的實體であり、個人は此れと合體して生きねばならぬ。ヘーゲルに従へば、國家は其の決定に對して、「然り」「余は欲す」と答へて、身を捧ぐる個人を必要とするのである。ファツシズムに於いても、最高の目標は國家である。民族意識に出發する。だからファツシズムは

國境を認めない労働者の國家主義をば排撃するのである。さあれ現代に於ける社會問題の核心をなすものは、労働と資本との關係である。此の問題を解き得るものにして始めて現代の勢力となり得るであらう。ファツシズムは、此の問題に對して、果して如何なる解決を與へんとするであらうか、私は進んで此の點に觸れなければならぬ。

第一にファツシズムは、不潔な腹を憎悪する。貨幣を生む資本を嫌忌する。ファツシズムは、生産者と單なる消費者即ち資本主義の腐敗せる果實とをば區別するのである。そこでムツソリーニは、ブルジョアジーをば、二つの範疇に分けた。即ち一つは尊敬し得ぬ無用の者であり、他の一つは尊敬し得る勤勉の士なのである。だからファツシズムは、一概に企業家の敵たるものでもないが、さればといつて、必ずしもブルジョアジーの味方でもない。ファツシズムのかやうな資本觀も、理論的に見れば、必ずしも完備せるものではない。然し其の思想の背後に流るゝものは、若々しい理想を以て、沈滞せる國民を更新せんとする烈しい情熱である。家庭や、社會や、政治的の道德に飽く迄も忠實に、徹底的に純潔ならんとする騎士的な道義心である。此の純潔を穢す者には、直ちに峻嚴な制裁が與へらるゝことを見ても、其の一端を伺うことが出來やう。「支度は出來た、さあ來い、何時でも」ファツシストは此の意氣を以て、總べての障礙をば克服して行く。其の目標となるも

のは、常に國家の繁榮であり、國民精神の更新である。まことに此の意氣と此の思想こそは、混沌たる伊太利の天地に、光と秩序とを與へた原動力なのであつた。「義務有つて權利なし、但し己の業務を主張する權利のみ」これがファツシストのたてまへである。國民は舉つて、國家の爲めに働かねばならぬ。この點に於いて、ファツシズムは、共働主義とも言ひ得るのであらう。然しながら、ファツシズムは必ずしも労働を強制するものではない。ファツシストの考へによれば、總べての個人意志を奪ふ時は、國家の進歩と繁榮とを阻害するのである。だから國家は、國民各個の自由意志を伸ばさしめて、之をより高き國家目的に適合するやうに指導して行かなければならない。國家の發展は、國民各個の奮勵に依る。こゝに、ファツシズムには、英國流の自由主義の香りを宿す。

此の様にファツシズムは、いろ／＼な對立する思想の奇異なる混淆をば示してゐる。理想主義と現實主義、國家主義と個人主義、保守主義と急進主義、これらの對立せる思想の統一が、ファツシズムの特色だとも言はれやう。だがファツシズムの本來の面目は、現實の問題をば如何にして解くかに在る。他日更に異つた問題が現はるれば、又異つた思想異つた政策がとり入れられるであらう。だから私は、ファツシズムの本質をば、生命主義神祕主義に在ると言ひ度い。ファツシズムはまた國家主義とサンヂカリズムとの結合である

とも言はれてゐる。ベルグソンの哲學と結びつくサンデカリズムは、同じく神祕主義の色彩をも多分にもつてゐるのである。個人主義、機械主義、科學主義、唯物主義、反宗教主義、これらはまさに現代を彩る著しい特色であらう。これらの思想を採り入れぬ國は、遂に時の潮に乗り得ないかの觀があつた。見よ亞米利加は、近代思想を以て、世界の大勢を指導した。マルクスの唯物論は、ツァーの帝國を覆へした。この現代の主潮に棹さゝぬ者は、つひに世界史の舞臺から、消え去るのではないかとさへ思はれるのであつた。滔々たる此の時代思潮の流れに、敢然と反抗して起つたのがファツシズムなのである。即ちファツシズムは個人主義に對して、家族主義を標榜する。社會主義に對して國家主義を主張する。又機械主義に對する生命主義である。科學主義に對する神祕主義だと云はれやう。そしてルネッサンス以來の現代思潮に反して中世の羅馬時代へと歸つて行くのではないかとすら思はれる。さもあらばあれ、伊太利人はつひに自己を主張し通した。到る處に蔑視と屈辱を受けた伊太利人は、今や世界の指導者の一人となつたのである。

ファツシヨの標榜する虞は右に述べたやうに資本閥の打倒である。議會政治の否認である。その方法としては直接行動である。その抱負や理想を實現すべき術は先づ差當り他にないので、彼等が直接行動を選ばんとする氣持は分る。でも之では、黃白を以て懷柔を事

とする政治家の陰性的策謀に對する陽性的態度たるまで、あつて、單なる從來の政權亡者と變りはないであらう。で我等はかゝる態度に勿論同する事は出来ない。之にはその方法戰術の上に更に反省考慮の餘地があるのは、云ふまでもない。ところが更に吟味せねばならない點がある。と云ふのは、かゝる思想の根柢に潜む處のものである。それは民族意識國家的自覺である。獨逸ヒットラーの褐色シャツ隊にしろ、又伊太利ムツソリニーの黒シャツ隊にしろ皆かゝる民族自覺の上に立つて居る。彼等最大の強味はそこに存する。かの血盟團にしろ畢竟ファツシヨの具體的表現であるが、彼等には志士の矜持すらもつて居るのは、その爲めに外ならない。

ファツシヨに於ける革命的態度は心しなければならぬが、かゝる民族意識はまことに尊いものである。之を大事に育てねばなるまい。元來我國に於けるこの氣運の擡頭は滿洲事變を直接の原因だと私は見る。ところが、日露戦後、昨秋の事變までは、民族意識など全く地を拂つて居たと云つて良い。銀座街頭の店頭裝飾やその建築構造や、人の服裝などはいかに米國の模倣が多い事か。鶴見祐輔氏や森本厚吉氏と云ふやうな人から、いかに多くのアメリカ享樂主義をば文化生活の名の下に學んだ事か。人々はこれで以ていかに得々たりし事か。と思へば新渡戸稻造氏の如き國際聯盟の××なりから、いかにインターナシ

ヨナリズムにかつがれた事か。平和と云ふ空念佛をきかされた事か。斯やうにして國家は骨抜きにされやうとした。と云ふのは、國家から民族意識を取除いて何が残ると云ふのだ。個人から自覺を除けば、只生ける屍ではないか。我等は維新當時の思想家の如く攘夷論を唱ふるのではない。人類永遠の文化創造を念ずるが故にわが國民的自覺を説くまである。その舞臺としての國家を強調するに過ぎない。又軍部の走狗となつて無論主戰論を説くものでもない。それにしても世界の各國が虎視たん／＼たるの頃に何が世界の平和だ。口に平和を唱へ乍ら、陰に戰備に急なる陰險邪惡な偽善者達の前に、何故叩頭しなければならぬ義理があるのだ。

我等は確信を以て民族自覺の信念の下に、堂々と進退するが良い。國際聯盟脱退するの時が來たら、潔く脱退も結構である。人間が生れた。生れたものに生存權がある。又民族には民族の生存權がある、生存權の主張するのに何の畏怖すべき處があらう。かゝる自覺を喚起したものととして滿洲事變に對し私は多くの意味を見出す。又ファツシヨの主義主張にきく可き多くのものを發見する。併し唱ふところの民族自覺も、只戰を好むものであつてはならぬ。單なる侵略的帝國主義であつてはならぬ。民族全體の文化的自覺が伴奏されてゐなければ困る。夫につけても思出さるゝはわが國の歴史である。我等はわが歴史の

偉大と尊貴とを知らねばならぬ。わが國民は餘りにもわが國の歴史を知らなさ過ぎた。と云ふのも學校の教育が悪い。否學校の歴史教科書が悪い。學校で教へられるのは、只日の丸御旗と軍人の強さだけではないか。歴史は、單なる政治史ではなかつたか。否、單なる政權移動史に過ぎなかつた。之だけで以て歴史の偉大さを知らさうとしても知らされる道理もない。

歴史に對する認識は、祖先の傳統に對する把握である。傳來積み累ねられたる精神生活をば認識することである、傳統的文化財に對する新しき意味の發見なのである。否我等が今日に於ける生活が歴史的必然の法則の下に存するものと云ふ事を知らねばならぬ。かゝる歴史的認識を教へてくれたものはマルクスの學說であつた。併しそれは歪曲されたる辯證法であつた。即ち唯物辯證法的把握であつた。この唯物辯證法の上に唯物史觀が成立つ。唯物史觀は唯物論に依つて形作られる。而も唯物論には避ける事の出來ぬ小兒病的認識不足がある。我等は正しき辯證法に立つて、ファツシヨの勃興を機縁としてわが歴史を反省しやうではないか。それが流行思想轉變の與ふる教訓であらう。

### III 國家の哲學

私が職を奉ずる大學は無論私學ではあるが國家主義的色彩の濃厚で知られてゐる。むしろ帝國大學などよりもが、つちりその傾向を示してゐる。その爲にか私を以て右傾に屬するものとするものもゐる。ところで昨年來國粹主義が擡頭して來た、それは街頭に進出したのみならず、肉弾を以て敵陣に乗り込む凄じい勢ひであつた。此思潮の流れには是非もなく所謂無産黨すら國家社會主義にその旗色をかへねばならぬ事となつた。大衆文學の作家すら軍部に共鳴しなくては其作物の賣行に影響する時代となつた。然るにファツシヨとか國粹運動とかは一體何を意味するか。それに就ては前章に於てその論理を反省して見たが、更にそれを要約すればそれは大體左の如きものであらう。

一、反動思想の極端化せる直接行動

一、政黨否認より成る××的行動

一、財閥に對する徹底的反感憎惡

その基調をなすのは云ふまでもなく國民主義乃至は民族主義である。別言すれば國家主義である。かゝる出所から發して國家社會主義ともなつて現はれたのが夫れである。しかし

かく國家社會主義を標榜しては居るものゝ、其實は國家資本主義である。超政黨の政黨をすら窺つてゐるものである。

現實的にはかやうな風潮を爲したのは滿洲事變であらう。他面軍部の飛躍も亦與つて力あることも否まれまい。何にしても金權者流と黨人とが敵視されてゐるのは、社會風景として變化に富んだものである。

ファツシヨの動機や思想的背景が何であらうと、無論我等は直接行動に同感をもち得ない。従つて主義そのものの根本思想に對する検討を忘れてはならぬ。ファシストのいふやうに議會政治の弊が、その極に達したる今日に於て之を否認せんとするものも亦同情すべき處がある。超政黨の國民一黨の議論も亦賛成である。資本閥に對する反抗より出發して生産の國家統制を説くのも異議はない。かくて彼等は國家社會主義を題目とはするものの、實質的には國家資本主義であることは前にも述べた。だがこゝに最も我等の興味をひく點はその思想の基調をなすところの國家主義である。そこにはマルキシストの如き無信仰と、反宗教的なる事實に反して、寧ろ偏執的な狂信者的態度さへ見られる事實があることだ。かゝる國粹運動が擡頭した時に我等は國家に對して再吟味を試むべきであることは勿論だ。つまり國家の意義と職分に對して正しき認識と自覺とをもたねばならないのである。

實のところ、今日まで國家に對する檢討は十分なものではなかつた。之までの國家主義の議論は科學的基礎と合理的根柢が甚だ薄弱であつた。さればこそ青年をして心ならずマルキストたらしめ、無政府主義者たらしめたのだ。例へばわが國家を絶對なものとなし之を禮讚するのは良い。併しその根據を悉く古典に仰いでゐるのは如何であるか。古典も結構だが古典に對して何等の吟味と反省を加へないのみか之を金科玉條として青年學生に強いるとする傾向をもつ。青年は近代科學の洗禮を受けてゐる。特權階級に都合の良い古典の解釋にどうして満足することが出來よう。その反動は反抗となつて現はれるの外はない。とは云へ、我等はわが祖國を忘れ得ない。この祖國なしにわれらの存在も亦あり得ない。されば徒らなるマルキストの輕擧に同じらる可くもない。同時に古典的國家論者の説に傾聽する雅量をもたぬ。こゝに新しき國家哲學を打樹すべき時が來たのだ。即ちフアツシヨ運動はよき機會を與へてくれた。その直接行動には感心しないが、この機會に我等に祖國の哲學的基礎を顧みる時を與へてくれたのである。かゝる時に私はヘーゲルの國家哲學を考へる。

今ヘーゲルの國家論を説くにはカントの學說との聯關を顧みなければならぬ。カントが不朽の名をなしたのは云ふまでもなく「純粹理性批判」であつた。それは自然科學に對する基礎を與へたものである。彼の道德論は「實踐理性批判」に於て我等は聞く事が出来る。之に於て彼は實踐理性の優位を説いた。即ち知的活動よりも道德生活の優越を明かにした。この思想はフキヒテに於て更に徹底した。カントは道德性の至上を主張したものと、それは彼一流の抽象論に終つた。彼が道德の理想を説いても只「善のための善」を云ふのみであつた。何が善であるか分らない。そんな事では道德的行爲をなさうにも爲されぬのである。とかう鋭く難ずるのはヘーゲルであつた。そこにヘーゲルとカントとの相違がある。カントの學說は徹頭徹尾形式論の一點張である。内容には少しも觸れない。之に反してヘーゲルのは具體的で内容的である。そして具體性の存するところにのみ眞理はある、と彼は考へる。カントの道德性に満足しないで彼は「人倫の王國」を説いた。そして彼に於て人倫の第一歩は家族であつた。

かく彼に依れば家族生活は人倫の世界に於て極めて重要な意義をもつ。之を事實の上にて見よ、學校は我等を教育する處であらう。社會も亦我等にとつて大いなる學校であるに違ひない。いかに此れ等によつて我等が教化せられる事か。だが、學校や社會にも増して我等を教へるものは我等の家庭である。家族である。よしや我等の父や母が一文不知の徒であらうとも我等は兩親によつて學ぶ處が大きい。又父母の教育力よりも更に偉大な

のは我等の配偶者である。妻は夫に依り夫は妻に依り、~~育される。~~又我等の兒は我等を教へねば已まない。實に「兒は大人の教師である。」~~し~~家庭は單なる知識を授ける所ではない。人倫五常の道を實踐する舞臺である。道德生活を躬行する最初の道場は家庭を措いて外にはない。

ヘーゲルに依れば「人倫の世界」とは客觀的精神の完成される處である。否、主觀的精神及び客觀的精神そのものの具現したる形態である。その第一の段階が家族である。之が發展して市民社會となり、國家を形作る。この國家は自覺的なる人倫の實體である。と云ふ意味は自覺の下に營まれたる道德的生活の統一態なのである。家族と市民社會との原理が、融合結成されたる姿である。かゝる統一組織が國家の本質をなす。更に別言すれば國家の本質は絶對的普遍者である。主客合一の一般者だと云へる。合理的なる意志の顯現なのだ。

彼の思想學說に於て最重要の契機をなすものは、精神である。低き程度の意識の状態から絶對精神に至る發展を示したものが彼の所謂大著『精神現象論』である。かやうな過程が即ち人類進展の歴史の姿である。世に云ふところの民族精神はかゝる絶對精神に至るべき階梯に外ならない。この民族精神が絶對精神に至る舞臺として國家が作られたと考へねばならぬ。かやうな發展の記録こそ歴史である。否、精神の働きが、その動きが歴史をなすのである。否、歴史とは精神が自覺せる表現なのである。

かやうな次第で國家と歴史との深い内面的關係を知る事が出來よう。國家は我等が意志の生活を營まんとする上に必然形作らねばならぬ形であつた。道德生活になくて適はぬ場所であつた。こゝに我等はヘーゲルの國家論がプラトリーの夫れに髣髴して居るのを見出すであらう。併しプラトリーの國家説は形而上學的理論であつた。だがヘーゲルに於ては歴史の必然を語らねば已まない。彼が國家を以て合理的意志の顯れだと云ふのが即ち夫れである。彼に於て合理的と云ふのは歴史の必然をもつとの意味である。フキヒテの文化國家と云ふのは只理想の國家であつた。國家がかくあるべき任務と職分とを説いたにすぎない。併し現實の國家に深き歴史の意味を與へたのは即ちヘーゲルである。かくて彼は獨逸國家否、プロシヤに對し合理的基礎を與へるのであつた。こゝに我等は深く學ぶべきところがある。

かゝる事情で國家は道德的意向に依存するのであるが、この道德的意向は宗教に深き聯繫をもつ。眞に具體的なる道德性は畢竟宗教の系列でなければならぬ。その爲に宗教は眞の内容を持たなくてはならぬ。換言すれば、神の觀念は具體的にして且つ眞なるものであ



るべきだ。かくて宗教は自覺ある精神に在つて道德生活や人倫世界及び國家の根基をなす。彼に於てはかやうに宗教と國家とは離ち難き關係が存してゐた。かう考ふれば明治初期に行はれたやうな教育と宗教との分離を策する如きことは愚の至りであつた。廢佛棄釋の反宗教運動は無分別も甚だしいものであつた。尤も宗教をば教育より放逐したのは、むしろ反基督教思想の現はれであつたであらう。又廢佛棄釋は宗教否定の運動と云はんよりも、神道擁護の政策であつたのかも知れない。

我が建國の歴史を顧みれば、わが國の建設に當つては、不思議に宗教と國家とは融合一致してゐた。兩者は不二の關係にあつた。政事は即ち祭事であつた。故にわが古典は宗教上の聖典であると共に政治的基礎を與へる寶典でもある。建國の偉人は又宗的尊崇の對象であつた。かゝる意味に於て私はわが祖國を、世にも不思議な存在だと思ふ。

と云つて、今私は世の國粹主義者や國本論者に同じく、古典を盲目的に無條件に容れよと云ふのではないことは前にも述べた。私は思ふ。人類生活の光榮は歴史を措いて外には存しないと。又歴史は祖先傳來の至寶の集積であり精神生活の結晶であると。われらは我祖國の歴史の偉大さを知る。この歴史の必然の運命を離れて何處に我等の存在があるか。この國土を離れて何の我等の歴史があるか。又我等の宗教があるか。

わが國家と深き關係をもつ宗教として神道がある。神道は所謂我等の民族宗教である。だが今日迄神道思想は粗笨のまゝに永く残されて居る。之を私は深く憾みに思ふ。民族自覺の時にあたつて宗教清算の日が來た。神佛基などと徒らなる宗派心に囚はるゝことなく、我等の民族宗教を創造する。これが時代思潮の間に見る示唆であらう。

#### IV 『危機』と『戦ひ』の哲學

何かしら暗い雲が我等の頭上に蔽ひかぶさつて居るやうな気がしてならぬ。今にも大なる轉變があるのではないか、との豫感さへ意識せらるる。否大衆の氣持から云へば、むしろ夫を待望してゐるのではないかとさへ思はれぬでもない。よし實際はさうでなくとも、今日の實狀勢は、そんなに迄切端詰つた有様なのである。斯る感じをば濃厚ならしめたものは、例の五・一五事件である。昨年五月十五日に行はれた首相暗殺事件は何しろ未曾有の出来事であつた。世に暗殺は必ずしも珍しい事柄ではない。殊に一昨年以來、斯うした事が相繼いで現はれたので、言葉は變だが、慣らされて居た。であつても、あの號外を手にして只々愕然たらざるを得なかつたもの、決して私獨りに止らなかつたに違ひない。關東大地震にも増した國家的大震災の襲來とさへ思はれるのであつた。一犬養の不慮の災難でなく、一政友會の事變に止るものではなかつた。

こんな事書いて行くと、それで哲學界の回顧と何の關りがあるのかと、難する人がある

かも知れない。斯う私が氣をもむ程、哲學と時代の交渉に就ては關心を持つて居らないのである。と云ふ事はいかに哲學が時代から取殘されて居るかを物語るであらう。時代から離れるのは生きた人生から遊離するの謂ひである。生ける人生に關りなくて何の哲學ありやと私は思ふのである。かう云ふ見解に立つて、昨年現れた印象に就て、その哲學的意義を尋ねてみたい。そこから更に、哲學界の動向を眺める事と仕度い。今年現れた我國最大の事件と云へば、云ふ迄もなく、滿洲國獨立及びその承認の問題であらう。その背後には軍部の偉大なる犠牲と努力の捧げられた事は勿論である。こゝに思想問題として看過されな

いのは、前にも述べたやうに軍部の暗躍に依る國家意識の擡頭である。世に云ふファシズムとは、即ち之を云ふ。之に就ては私は既に批判檢討する所があつた。今一度ファシズムの内容を分析するなら、前さきに云つたやうに

a 資本主義の打倒

b 議會政治の否定

c 國家主義

の三要素なるのである。更に見逃すべからざるは、暗に直接行動の認容と云ふ事がその根柢をなしてゐる事である。五・一五事件などはその顯著なる反映とみてさしつかへな

いであらう。

かゝるフアッシュヨの擡頭はマルキシズムの没落をも意味すると考へられ、恐る可きギヤングの出現は、左翼に對する彈壓の急とその一黨の切なる焦燥とを物語るものでなくて何であらう。しからば、マルキシズムは思想的に全く清算されたであらうか。思想界の一面には尙割切れない物として残され、唯物論争は今だにその跡を絶たない。精神文化研究所が官設せるに至つて、マルキシストや唯物論者から批難の刃は愈々鋭い者がある。マルキシズムの検討も數年前迄は只經濟學のらち内に止まつてゐた。しかし今年の狀勢に依れば、この主張學說に於る哲學的基礎を究ねば止まないと云ふ傾向が濃くなつた。と云ふ事は、その議論の如何を問はずその事それ自身が今年の大きな收穫と云はねばなるまい。唯物論の説く所は、哲學的教養の素朴なものにあつては受け容れ易いし、現實の認識の爲には極めて簡單直截である。しかし哲學的教養を経たものに取つては、之では満たされないあるものが存する。觀念論の魅力はそこに存しやう。果して、唯物論と觀念論とを綜合止揚した境地がないであらうか。この兩者にめざめて惑ふものは最もめざめたる近代人であらう。スピノーザが今更のやうに顧み初められたのは、かゝる所に出發する。彼の二百年祭に當つて新しい生命を得んとしつゝあるのは、かゝる契機に基く所あるを忘れてはならない。

しかし、何れにしてもスピノーザが一般思想界の動向と深き因縁を有する迄には立ち到つてゐない。

哲學と、思想界一般の交渉は、マルキシズムを樞軸として動いてゐるのは争はれない。さきのフアッシュヨの如きはマルキシズムに對する反動と云はれるのであらう。否寧ろ、その史的展開だとみられないであらうか。そこに私はマルキシズムの齎したる歴史的功蹟を認めたいと思ふ。今一つ彼らの齎したる功業をば、その歴史的考察の上に見出するものである。かやうな考察の態度は云ふ迄もなく辯證法の論理に由來する。辯證法と云へば、今日非常に通俗的に用ひられて文壇の評論などにさへ頻出する様子がある。世の一般的用法に依れば、何でも對立する二つの要素の統一をば、譯もなく辯證的法展開であるかの如く考へられてゐるが、之は誤用も甚だしい。マルクスにしてもヘーゲルにしても辯證法をばかやうの意味には解しなかつた。一つ概念や一つの實在の内に矛盾が含まれてゐる。かゝる矛盾によつて概念そのものや、實在そのものが、變化や發展の過程をたどる。それが彼等の辯證法の論理であつた。辯證法を眞にかゝる姿に把握してゐる人は必ずしも多くはない。

マルキシズム凋落は、一面時代の推移によるであらうが、その最大の原因は、ヘーゲルルネッサンスに負ふ所が多い。ヘーゲルの復活は一昨年其百年祭に當つたと云ふ偶然的な理由も

あつたであらうが、勿論我が哲學思想の流れの必然に出でたものと云はなくてはならない。昨年我國に於て出版されたる邦文の哲學書は、哲學書目録によると、四十三種類を數へる事が出来る。しかし内四割強は、ヘーゲルに關する著作であつた。これによつて彼に對する熱の如何に強いかは伺はれるであらう。かゝる熱情を呼び起した最大なものは、云ふ迄もなくカント哲學に對する不満である。我が國に於て、新カント學派の黄金時代は、千九百十年前後即ち明治末期から大正の初頭にかけての事である。大體から云つて大正時代は新カント哲學の黄金期だと云つてよからう。この時代に於て、我が哲學界は、漸く組織時代には入つたと見られ得る、ギリシヤ時代に之を例ふるなら、先ずプラトンの頃と比較出来なうであらうか。新カント主義によつて我が國人は、認識の批判と云ふ事を教へられた。組織ある姿に於て理想や價値の根柢をも尋ね得た。色々の學問の領域に於て方法論上の反省をも促す事が出来た。誠にこの學派の流れに、憩ふ事によつて、價値の世界を懂れる事も知つた。認識の對象が當爲である事も分つた。しかし、存在について果して何を學び得たか。實在に就ては何を把握し得たであらうか。顧てこゝに到るとき彼らは啞然として答ふる所を知らない。こゝにカント哲學のかけ移ろひ行くべき因由がある。同時に代つてヘーゲル哲學が、熱望もて迎へらるべき契機があつた。

かくて、ヘーゲルは我が哲學思索に於ける必然の展開として生れるのであつた。それならば、ヘーゲルは、よく我哲學界に把握せられたであらうか。さきにも述べたやうに著述に或ひは雜誌に彼に關する論作は極めて多かつた。然し不幸にして、ヘーゲルの正しき理解と認識とは多くを期待する事が出来なかつた。況はんや一般民衆に對しては、いかに彼の哲學が難解のものであるかを教へる外何ものもなかつた。彼に關する著述として田邊博士の「ヘーゲル哲學と辯證法」の如きはその代表的な力作であつたと云へやう。しかし、後章私が論ずるやうに、カント流のヘーゲル解釋以外に一步も出でてゐない。かくては千萬の努力も遂に無益の徒勞たるに過ぎない。博士の偉大なる思索力を以て尙且かくの如くんば、他は寧ろ推して知るべきのみ。この思想が又大衆に影響を及ぼし、大衆のものとなる爲には、自ら別に途を求めねばならない。

カントの批判哲學は、認識の妥當が問題であり價値論を以てその中心課題となす。ヘーゲルは是に反して、認識よりも、更に廣範圍な精神一般の現象を探究する所にその任務がある。更に別言すれば、現實では正しき姿に於て把握する所に中心問題が存する。辯證法の論理はその方法であり、精神發展の序列であり、又發展段階の方法である。彼の哲學的方法が、既に辯證法の論理であり、又哲學の中心任務が、實在の世界であると云ふ所以で、

その方法と、その対象から云つて、當然歴史哲學にならねばならなかつた。彼の哲學は、勢ひ歴史哲學たらざるを得なかつた。私のヘーゲル解釋は、かゝる見地を取らうとするものである。

然るに他方に於て、近時、哲學界の最も新しい動向として、人間學や、生の哲學或ひは又存在論、と云ふやうなものが、頻りに紹介せられ論議されてゐる。是はしかし乍ら、ヘーゲル哲學復活と、同じ動機によるものと私は思ふ。カント哲學に於る認識論中心の思想學說に一般の哲學思索が満足しなくなつたのである。マックス・セーラーやハイデッカーやハイネマンと云ふやうな人達が、素晴らしきスターとなつてデビューし初めた。そこで再び認識論的時代に舞臺が遠のいて、新らしい姿相に於て形而上學が呼び起されて來た譯である。これは、この二三年來殊に昨年にとつて愈々その姿をば鮮明に地上に描き出し來つた。

現代が危機に直面するとは、深淺の差はあれ誰しも意識するところである。世界全體が文化的危機に立つて惱んで居る。山の奥にあるべき神學さへもが、ゴッタルテンなどの説く「危機神學」が流行の形である。然らば斯かる危機に當つて哲學はどのやうな役割を演じ得たであらうか。一體危機と云ひ、非常時と云ひ、如何なる部面に形作られて居るのか。

普通の意味で概念せられる處に依れば

a 滿洲問題を中心とする國際政局の紛糾

b 極度の財政經濟的行詰り

c 社會及び政治組織の破綻

などを以て、非常時の内容をなして居るかに見える。わが國傳統的な哲學的見解に依れば、一見之等の問題と、哲學とは何の關係を、もたなくも良いやうである。だが私の觀るところに依ると、國際關係に在て、何よりも大事な事は確信を以て處するところに在らう。此の確信はがむしやらの押でもなく、單なる外交的手腕でもあるまい。國家としての信條が根幹でなければならぬ。今度の問題に就て云ふならば、只三百式の議論でなく、何故我等は滿洲の地を生命線として確保しなければならぬのか。支那の宗主權を離れても良い哲學的根據は何處に在りや。又一朝議論に敗れた場合に、敢然戰爭をも辭せないと云ふ理由は何處に存するのか。尊い生命を犠牲にしても良い合理的根柢は、何であるかを確認しても良いではなからうか。果してかゝる基礎附を政治家や軍人にのみ聞いて満足し得るであらうか。

次に財政經濟問題であるが、之こそほんとうに哲學とは縁が遠いやうに思はれる。然る

に今年夏農村救済の目的で臨時議會が招集された。そして所謂匡救豫算が成立した。だが六十億の負債に對し三億のみに、やつと成立しても子供だましにも當らない。そして首相の云ふことが良い。曰く自力更生であると。これはつまり政治や政策では何うにもならないので、政治家として投げ出した言葉である。さて自力更生を計るには、指導精神がなくては協ふまい。その指導原理を與へるものとして、哲人に之を求めより外はあるまい。ではわが哲學者にして、かゝる用意ありや否や。熱情と氣魄なき多くの彼等を觀て、まことに遺憾に堪えぬと思ふのみである。

夫から社會制度や政治組織の問題であるが、之こそは最も思索を要する處であらう。而もかやうな制度組織の動搖が、非常時や危機の根柢をなして居るとさへ思はれるのである。この問題を契機としてマルキシズム現はれ、或はファツシヨとなる譯である。勿論マルキシズムに於る科學性の強味を見出す。けれども幾多の論理的缺陷を見逃せない許りでなく、この國土を背景として考ふる場合に、その實現性甚だ乏しいと云はねばならぬ。ちやうど基督教がこの國に育たなかつたやうなものではなからうか。

その點になるとファツシヨは國土や國家を以て出發點とするだけ、實踐に富んで居る。だが非合法だの暴力だのを以て基調とするのは、まことに沙汰の限であつて、我等の斷じて同じ得ざるものであるのみならず只夫れは思索の不足不充分を示す許りではないか。資本主義の否定と云ひ議會政治の否認と云ひ、その弊に惱まされて來た國民には受容られ易い。併し論理の基礎に至つては少しも反省されて居ない。その大事な國家的精神や、日本主義なるもの、哲學にしても夫が組織をなして居ないのである。勿論哲學者としてかゝる旗幟の下に働く勇敢なる闘士を見出す。併しその日本精神や日本主義も只片々たる隨想にすぎないのではないか。

でも日本民族精神の自覺は何にしても喜ばしい現象と云はねばならぬ。我等は昭和七年に於てはその氣運の勃興を以て満足すべきであらう。その整頓せる組織化體系化は來るべき哲人の課題として殘されて居る。

## 二

危機だ非常時だと云ふのは、經濟的の行詰りからでもあるが、一つには對外關係が切迫して居る所爲でもあることは、さきに述べた。今凡ての國が危機の情勢に在ると、云つても差支へない位ひ風雲を孕んで居る。こゝに戦ひの哲學が當然生れねばならぬ。と云へば思ひ出すことがある。私の内の庭は荒れ果てゝ居るが先づ二百坪許りもあらうか。中央に竹

の藪がある。晩春初夏の頃にはそれが風情を添える。それはまあ良いとして、その邊りに切りに墓が徘徊するのである。餘り格好のよい動物ではないので、好きにもなれないのだが、じつと眺めて居るとあの怪奇の風態をして居るなかに、何處かに思索的な態度がある。のろい動作で、考へ考へ足を運んで居るところを見ると、暗示的な風さへ見える。だが墓の屋敷でもあるまいに、どうしてこんなに多いのかを不思議でならなかつた。で、來訪の友人に之をたゞすと、竹藪には蚊を喰ひに来るんだとの事。成る程見て居ると、盛に大口開けて蚊を喰つて居る。夜になると私達が蚊軍になやまされるのだが、彼等にも思はぬところに敵がある事を見出したやうな次第。狭い庭にも弱肉強食の現象がまざぐと見られる譯である。生物のあるところ之は又免れ難い命數ではあるのだ。

B篇の冒頭『街頭哲學の論理』の章中にも書いておいたのだが、子供の生活にもかゝる姿を發見して、その感懷をのべて筆を進めたが、今一度それを書かしてもらつて、『戦ひの哲學』を展開せしめやう。

私のうちに當年六つになる子供が居る。幼稚園に通つて居るのだから、毎朝私なんかより早くから起き出でて、嬉々として行く。この春通園するやうになつてから、ずつと快活にもなつたし、元氣にもなつたので、私かに私は喜んで居るやうな次第だつた。ところが聞

けばやはり彼にも小供相應の悩みがあるらしい。と云ふのは斯うなんだ。何しろ今春創設された許りの園なので、園児はそんなに多くはないのだが、年嵩の腕白小僧が一人居ると云ふのである。それが體は大きく力もあるし、頗るいたづらつ、兒ださうだ。うちの兒はな、りも大變小さいし、私と異つて内氣でおとなしい方なのである。だから常も泣かしたり、いぢめたりして仕方がないらしい。保姆の先生は氣を配つて呉れて居るものの、常住眼を放さぬと云ふ譯にも行くまい。そんなすきを覗つては、鎗玉に上げるのださうだ。これが何よりも、うちの兒にとつて憂鬱の種であるらしい。

それを私は少しも知らなかつた。つひ二三日前、送り迎への女中から、始めて聞いて知つた。幼稚園の生活は彼等幼兒にとつては、驚異と感激の對象なので、うちに歸つて來れば一日中の出來事を、細かに且つ雄辯に物語るのが常である。が、子供の口から一度もそのいたづらつ、兒に就て聞かなかつた。で、つひ夢々そんな事を私が知らう筈もなく、憂きも悩みもなき彼の天國だ、と思ひきつて來たのだ。今始めて之を聞くに及んで、思はず眼頭があつくなるのを覺えた。頑是ない幼兒の世界もエデンの園ではないのか。花園を荒らすメフキストがやはり居るんだ。居ないと思つたのがいみじき認識不足だつた。だが兒は一語も夫れに就て語らなかつた。と云ふのはその小さき自尊心をけがすとも思つたので

あらう。その可憐な心境を思ひやつて、私は暗然たらざるを得なかつた。

折角行つても、そんな惨めな處であるならば可愛想だ。只一つの幼稚園ではないし、何處ぞ他のところに轉ぜさせてやらうかとも考へた。併し待て暫し、園も一つではないが、腕白小僧もこの一人に限つたものではない。何處にも居るんだ。どのクラスにも必ず存在するんだ。處を換へて見ても夫れが何になる。さうだ、園だとして小さき人間の集りである。浄土ではない。やはり人間社會の縮圖である。雨も降り、風も吹く。闘争も亦避け難き運命である。出家遁世の聖達の集團なる、あの比叡の山にも浮世の浪は寄せて來た。失望の胸を懷いてとぼくと親鸞は山を下らねばならなかつた。是非なき人のさだめと云ふべきだらう。

我が兒のいじめられるを聞いて、私は人知れず涙したものの、それは只束の間の感傷にすぎない。考へて見ればそれが人生なんだ。闘争が偽らざる人間の姿であるとは、餘りにも分りきつた事ではないか。などと涙するのだ。さればこそマルクスは歴史をば、闘争だと觀た。併し彼は只階級の夫れだとしたが、豈労働者對資本家の間に限らんやである。「門を出づれば敵あり七人」とも云ひ「人生は戦ひなり」とも云ふのではないか。見渡せば四圍皆敵なんだ。友とは何ぞや。利害相分るるところ、昨日の味方、今日の敵である。親子も

思想相容れず、夫歸や愛人の離散も決して珍らしいものではない。否「最も親しきもの、最も遠し」である。悲しい極みながら愛すればこそその憎しみなのだ。まことに思へば、悲痛やる方なき人生ではある。

と云つて、斯う人生を悲しみ、人を恨んで見て、そこに問題は盡きるであらうか。むしろ問題はその奥に秘んで居るのではないか。誰やらが云つたやうに「山中の賊は征し易く心内の賊は征し難し」とか。四面楚歌のなかに敢然と戦ふのは實は、そんなに難しくない。恐ろしい敵は、我等の心の裡に巢食つて居るのではないか。もとく三界の火宅が恐いんではない。胸裡の地獄が恐いのだ。見よ善人と悪人とは二人の異なる存在ではないのだ。天國と地獄とは天上地下の二つの世界ではない。共に我等のなかに善惡二人の人間が住居して居る。二つの世界が互に鎬を削つて居る。我等自身のなかに血みどろの修羅場を現してゐるのだ。

かくて私は人間自身の矛盾を見ないで居れない。私は之を個性の分裂と稱ぶ。之が戦でなくて何であらう。闘争と云はずして、何と稱ばん。否人生最大の悲劇的闘争であつて、むしろ階級の戦なんぞは、茶飯事でしかないやうに思はれる。

とは云へ私はマルクスの階級闘争の學説に、深甚の興味を見出すものである。蓋し彼の



闘争の理論は、云ふ迄もなく、彼の唯物辯證法に出發する。然るに私に於ける思索は人生の苦惱に生れて居る。人間の矛盾に對する覺醒から出發したのであつた。マルクスの唯物辯證法がヘーゲルの辯證法に出て居るのも、言を俟たぬ。辯證法の論理とは、畢竟するに『矛盾の論理』に外ならない。私がマルクス學說に興を覺えざらんとするも得ないではないか。併し斷つておかねばならないが、マルクスやヘーゲルに於ける矛盾と、私の夫れとは同じ矛盾であつても概念を異にする。さすがに彼等のは、はるかに私の思索よりも深い。

マルクスに依れば、資本主義は資本の増大をひたすら念とする。その結果資本家は出来るだけ、可變資本(労働即ち手間)を省いて、不變資本(機械)を以つて生産しようと努める。その方がはるかに利潤を得るからである。つまり餘剩價値の搾取に對し、はるかに効果的である。更に換言すれば、かくする事が資本主義的精神の本旨に協ふ所以なのである。かくして省かれた労働者の群は巷に滿つる。無數の産業豫備軍が現はれて來る。階級意識は尖銳となり、『萬國の労働者よ團結せよ』との聲は高くなる。果ては資本家への戦が宣せられる。遂に『工場に響くいんくたる鐘の音は資本主義の没落を告げ知らしめる夕の鐘』となる次第なのである。即ち資本主義は己れ自身の精神より、必然に轉落の一途を辿るのである。こゝに辯證法が極めて鮮やかなる姿に適用されて居る。

マルクスがかう云ふ限りに於て、我等は文句をさしはさむ餘地がない。まことにこれはヘーゲル辯證法の正しき適用である。ヘーゲルに依れば『凡てのものは、己れ自身のなかに、己れ自らに反對するもの、自己に矛盾するものを含む』と云ふのである。夫は生ける者の定業である。例へば。既に死んで了つたものは最早死ぬ事はない。生命のあるもののみ死なねばならぬ。即ち死とは生命のなかに含まれてゐる。生命その者のなかに死があるのだ。資本主義制度も亦此運命を免れる事は出来ない。かくヘーゲルに依れば、一切のものは矛盾であり、否定である。つまり辯證法とは矛盾の論理である。否定の論理である。否闘争の論理である。之がヘーゲル哲學の核心であつた。私がヘーゲルの哲學を以て『戦の哲學』と云はんとするのに何の不思議もないであらう。彼の史觀は、即ち辯證法の展開である。つまり歴史は、戦の連続であり、破壊と轉落の記録であると云はれやう。カントが永遠の平和を書いたが、それは十萬億土にのみ現はれて居る姿にすぎぬ。夢の如き理想の影にすぎない。

ヘーゲルの哲學は斯かる空想のあわき像を追ふて満足するものではない。現實の世界に對して把握しなければ已まない。その確實なる認識である。之が具體的眞理だ稱ばれる。カントの單なる形式的抽象的の眞理と異ふのである。かゝるヘーゲルの眼から視れば、一

切のものは矛盾である。絶えず否定が行はれる。否定のあるところ闘争が行はれる。ところが闘争が行はればこそ、變化があり進展が見られるのだ。辯證法とは斯かる觀方を教へて呉れる唯一つものである。歴史的必然の姿を以て、把握せしむるのは、辯證法の論理の外にはあり得ない。

ちやうど今ジエネーブに於て例の滿洲問題に就て國際聯盟で大變な騒ぎである。どのやうに展開するのか、我等はもとより之を知らない。でも之を史的に考ふるに、滿洲事變にしろ、滿洲國の獨立にしろ、避く可らざる必然の運命であつた。今更兎や角云つた處では非もない。蓋し嚴然たる事實ではないか。然るにヘーゲルに依れば『現實のものは合理的なり』である。合理的とは歴史的必然の意味なのである。そこに私は滿洲問題の哲學的基礎を見出し得ると思ふ。

さもあらばあれ、戦は平和の反面である。否平和を豫想する。闘争と平和とは互に他の一半にすぎない。戦ひあらば平和あり、平和あれば葛藤がある。そこで『亂に居て治を忘れず、治に居て亂を忘れざる』實踐の中道が生れて来る。

## V 現代哲學の展望

少しの閑を得たので、去る頃例ものやうに、私は關西地方への旅に出た、その旅で最近の哲學關係の著作や、雜誌などを出来る限り、携へて出た。このあひだに、わが國に於る近頃の哲學界の動向を知らうと努めた。今、夫れ等に關する自分の考へを纏めて見たいなと思ふのであるが、元來私は哲學の學徒を以て任じながら、私程哲學の知識に缺けて居るものも少いと斯ふ思つて居る。もと／＼「哲學は知識にあらず」と云ふのを信條として居るので、知らなくも幾らかそれで以て自ら安じて居る所爲もあるのだが、何としても知らない事は、餘り賞むべき話でもない。嘗々以て旅の閑を得て、涉獵したやうな次第だつた。

去年はヘーゲル没後百年だと云ふので、彼に關する文献が夥しく出版された。ヘーゲル復興の聲と共に、彼がマルクスに代つて、思想界の王座を占めるやうな勢ひだつた。他方にハイデッカーだのマクス・シェーラだの、或は人間學だの存在論と云つたやうなものが、取扱はれたり、論じられたりしたそこで私は神妙にそれ等なものについて讀み耽けつた。

だがどうしたと云ふのだらう。いくら讀んでも印象に残る何者もない。だいたい何が書いてあるのか、薩張り分らないのであるこれは自分の頭が餘程悪いのかと讀み返して見ても、

矢張り駄目なのである。まるで霞のなかを自動車でドライブした跡のやうに、何の印象されるものもない。是では哲學が馬鹿にされる筈である。私はよしや頭が悪いにしたところで、兎も角専門の學徒である。それで居て解らないのなら、普通の人に解らうとも考へられまい。

そこで、そんなものを書いて平氣で居られる人達へ問ひ度いのだが、一體諸君は書いて居る事が自分で解つて居るのか。否自分の哲學があるのか。自分の血となり肉となつて居る哲學があるのならば、何も人に解らないやうな文章を、ものしなくとも良い譯ではなからうか。と思はずには居られない。

先達もあるところで一場の講演をやつた。都下各大學の少壯學者達も集つて居た。従つて私の講演に於る論旨に就ても、異論がいろ／＼と出るのだつた。ある青年論客などは、むきになつて「××博士に依れば、そんな事は云はれないが」と云ふ抗議も出た。私は即座に遠慮なく「大體××博士に哲學がありますか」と反問した。餘りのぶつつけに度ぎもを抜かれたものか、その博士の支持者であるらしい人は、黙つて了つたやうな有様だつた。何も大きな顔を私がする譯でないが、老大家の××博士にして然り。群少の哲學者知るべきものではなからうか。斯やうに自分自身の身についた哲學をもたないで、誰れにも勝る

文章が書けないのではないか。

そこに行くに福澤諭吉は偉かつた。あの人の功利説には徹頭徹尾同感出來ないし、かゝる人生觀倫理觀の上に立てられた三田學園の創設は、日本文化に對する貢獻であるとするか、大なる冒瀆であると、さへ私は思つて居る。だが兎も角も彼の影響感化は素晴らしいものであつた。明治大正を通じて最大の出版部數を占めたものは「不如歸」でもない、「死線を越えて」でもない。福澤氏の「學問のすゝめ」であつたと云ふ。むべなるかな彼の功利的倫理觀は、明治大正時代に於る一般民衆の人生觀を形作つた。果ては歷乎として小學校の修身讀本にまであの殘影を、鮮明に止めて居る。

かく考ふれば大正時代の哲學界の巨星西田博士もはるかに福澤氏に及ばざること遠い。いかにも知識階級にして博士の名を知らぬはない。その名著は津々浦々に到らぬところもないであらう。併しながら、一般思想界は果して博士から何を學び、何を教へられたと云ふのだ。博士の哲學がどれだけ理解されたと云はれやう。いつか某縣の教育會に行つた折に、曾てその教育會の研究會で發表されたと云ふ「自覺の體系に依る道德教育論」なる著を見せられた。夫は笑ふにも笑へない滑稽至極なものだつた。博士の「自覺に於る直觀と反省」中の言葉をば、あちこちから集めて、道德教育論がでつち上げられたものだつた。何

小大印本  
こそ目録なり

を云はんとするのか、意圖那邊にあるか皆目分らないのである。

さう云へばこんな事を思ひ出す。ある時私は某大學の教授と講演の旅を共にした。教授は倫理學專攻の學者だつた。汽車のなかでその教授は西田博士の素晴さを激賞するのである。で私は「博士のどの著作を読んだか」ときいた。するといや何も読んで居ないと云ふのである。多くはこの類ではないのだらうか。之では博士も御迷惑だらう。

何と云つても時代の巨人である。だから解らないと云へば、自らの低能を示すやうだし、質問しようにもされない状態にある。かゝる折柄、先達「讀賣新聞」の宗教欄主催にかゝる「西田博士に聽く座談會」は全く興味多い試みであつた。引續いて前後二回に亘つて開かれたやうで、その談話の速記が同紙上十數日間連載された。聽くべく集る面々、三木、宮本、本莊と云ふやうな俊英揃ひ。後の會には石原博士の顔も見へたやうだ。會の速記のあとには各出席者の感想をば、一々掲載すると云つた鹽梅で、社では大した熱心さであつた。

取扱はれた問題は、宗教、哲學、文化の諸問題で、殊にそれらの結付きに重點がおかれた。それらは、勿論我等の興味を呼ぶものであるが、更に關心がもたれるのは、博士がいかなる姿で之を説かれるかに在つた。元來博士の哲學はその名高きと共に、難解を以て聞へて居る。もとより私は博士の門に學んだものであるし、その著をも幾度びか讀いたもの

ゝ、遂に博士の哲學の正體を掴み得て居ないのである。それが、かやうな機會に於て、優秀の人達に依つて、端的に叩かれるのであるから、豫ねて抱いて居た西田哲學に對する疑問の數々が今度の機會に、釋然解かれるであらうとすら期待して居た。

第一回の座談會の速記を讀んで、この期待は見事裏切られた。問ふ人達にしたところで、會後の感想には大變感激したやうな事を書いて居るし、ど偉いものにぶつ突かつた風に述べてあるが、多くは顧みて他を云ふにすぎない。速記面に現はれた處に依ると、一向油が乗つて居ない。かうした座談會では油が乗つて來ると、問ふ者と答へる者との間に、火花が散らす思ひあるものだ。もちろん意見や學說が同一である必要はない。違へば違ふで火花が散る。左なくともせめて双方のいきでもしつくり合ひさうなものだが夫れもない。兩方で別々な世界を歩いて居るとしか思はれない。そんな事は先づどうでも良いとしても、肝心の西田哲學の核心は依然として解け難き謎である。こゝに於て私が知り得たところは、博士の中心問題が、「人格本立の論理的構造」を出でない、と云ふことであつた。

とは云へ第二回に至ると、前の場合よりも餘程明瞭になつて來た。その表現はかなり切實になつて來る。西田哲學に於て自覺や人格が、いかに重要な意義をもつやも我等は教へられる。かくて歴史にも決して閑却されない事情も知り得た。夫れにも不拘、私にとつて

は所詮異邦人の説教としか思はれない。西田哲學に於ては辯證法を説かれ、歴史性を語られるにしても夫れは只論理的構造の範圍を出でぬではなからうか。凡そ辯證法的思索とは、凡ての事象を史的聯關の上に於て考へ、發展の相に於て眺めるところにその最大の特質がある、と斯う私は考へる。私の不明の致す故か博士の所説に於て、私はその片鱗にも接し得なかつた。歴史の重要性を見出す西田哲學に於ては、さすがに人格の背後に在る非合理性を説く。それにしても、その非合理性たるや、人格成立を可能ならしめる契機として、論理的に要求されたに止るものではなかつたか。結局博士自ら云はれるやうに、只「自分の論理的體系より考へ」られるに止つて居るのではないか。それならばむしろ史的考察を私が求めたのが、無理であつた。西田哲學に於ては歴史も遂に論理的範疇を出でないのであつた。

博士の學の該博なること、思索的沈潜の深きこと、或は太洋の如く、或は深淵のやうに思はれる。殆んど國寶的存在とすら許されて居る。だが遂に我等の生命には觸れないのである。いかにタートハンドルグやアクションや創造を説かれても、我等の實踐にとつては彼岸の美辭にすぎまい。現實當面の問題や精神生活に迫る迫眞力は遂に期待出来ない。博士の深き思索は要するに論理的公式を解くの類ではないのか。かくて時代人心の精神生活

に残されたる足跡は案外少いものではなからうか。只その嚴肅なる學的精進と、沈潜倦むなき思索的態度とは、後進のいとよき大導師であつた。博士の功績はかゝる處に、記念するべきではないか。

何としても博士は遂に過去の人である。特別保護建造物である。博士をのみ語らんとするのだが、私の眼目ではない。博士の跡をついで、今切りに學的活動を續けて西田哲學の大成に精進されて居るのは、田邊博士である。西田博士が非體系的なるに反し、田邊博士は體系家である。恰も西南學派に於るヴンデルバンドと、リツカートのやうな關係にあると云ふのは、不當であらうか。

田邊博士はこゝ數年の間辯證法に没頭された形である。昨年出版された「ヘーゲル哲學と辯證法」はその記念の塔である。博士に依ればマルクスの唯物論は勿論のこと、ヘーゲルの觀念論的辯證法も共に、辯證法の偏れる觀方に過ぎない。兩者を綜合止揚したところに、辯證法の眞諦は存する。かくて博士は進んで絶對辯證法を提唱され、之を以て博士の一大創見だと自負される。何は兎もあれ甚だ遺憾なことであるが、博士の作物もやはり最も難澁な書物の一つである。だが右に述べた事だけはやつと私に理解された。併し兩者をかく等分に觀られるのは、月並な御挨拶と云ふべきもの。唯物論に對峙する觀念論と取扱

はれるのが、抑も辯證法自體に對する認識不足である。觀念論と唯物論との對立は、所詮常識的解釋の外何者でもない。

更に辯證法に對する博士の認識不足は、次の點に見出されるであらう。本多氏が雑誌「理想」上に於て「總じて博士の所説には、社會學的なるものが缺けて居る。博士が共同體、あるひは全體的共同社會などと云はれるものゝ本質が明かでない。博士は社會的實踐と云はれるけれども、謂うところの道德的、宗教的實踐とは明かに個人的實踐である」と指摘して居る。かやうに難ぜられる所以のものは博士の辯證法に於ても、やはり歴史的考察が缺けて居るからである。

もともと辯證法の論理と云ふのが、精神發展の秩序であり、序列なのである。ヘーゲルに於るかゝる論理の方法は、彼をして歴史的考察をなさしめるのには、屈強な武器を與へるのであつた。否歴史に對して彼は生れながらにして、關心をもつて居た。かやうな興味と關心とはどうしても、辯證法的考察を採るの外なかつた。だから歴史性を離れて辯證法はあり得ない。歴史性を第一義におく處にこそ、辯證法の特徴は存する。のみならず、彼の哲學の特殊性は悉く之から出發すると云つて差支へない。カント哲學は現代人の精神生活に對し指導的地位を保ち得ないのに、ヘーゲルが時代人の關心の中心と成り得るのは、之

あるが爲めではないか。夫れだのに、歴史性を顧みない辯證法に何の權威があらう。現代にヘーゲルを語る可き資格は、始めからないと云はねばならぬ。

元來博士のこの著述は序文にも斷つてある通り、過去五年の間にヘーゲル哲學の理解と辯證法把握のために書かれたものである。そして特に目につくのは排列の順序が起草の順序と正反になされて居る事だ。最も新しいものが冒頭におかれてゐる。かゝる博士の排列には深き意味が存する。蓋し博士のヘーゲル解釋は、前後に甚しき相違がある。最後に到達せる境地が、ヘーゲルの眞意を體したものとなし之を冒頭においたとされる。従つてそれまでは眞にヘーゲルの論理が、根柢から理解されたとは自分でも思ひ得ないと博士は云ふ。最初博士を支配して居た倫理學的立場は、マールブルク學派なる新カント主義であつた。ヘーゲル解釋も自然、専らこの立場からなされた。然るに「之は今にして思へばヘーゲルの極力斥けた悟性の立場を固執して、外から辯證法を論議すると云ふ所謂抽象論であつた」と博士は告白する。

最後にその非を悟り、辯證法は倫理と云ふ觀點から觀られない、運動であり、行爲であると云ふ事が理解されて來たと。然らば博士が以てヘーゲルの眞の理解とされる境地に於て、果して云ふが如き効果を收め得て居るであらうか。ところが夫には先きにも云つたや

うに歴史性を缺いで居る。夫れだからヘーゲルが重視するところの、具體性と云ふものは出て來ない。論議は依然として抽象論に終つて居る。結局博士の意圖に反し、カント流のヘーゲル解釋を出で得ないのである。カント流の抽象論、形式論的な考へを全く脱けて了はなくては、ヘーゲルの辯證法を眞に會得する事は出來ない。「人若し新に生れずんば天國に入る能はず」なのである。

大正初頭に於て新カント哲學は、我が學界思想界を賑はしたが大正の幕閉ざされる頃、それは凋落した。人間學や存在論などが、今切りに論議されて居る。つまりそれはカント哲學に對する不滿をば満さんとする者に外ならぬ。詳言すれば形而上學的要求や、生命的欲求希願の現はれなのである。正直に云ふと、併しそれ等の聲もいと細き秋の蟲の音みたやうに思はれる。だいち輸入紹介につとめるものに、如何程の熱意があるのかと云ひ度くなる。熱意や關心があればこそ、論議するのではないかと、異論も出やう。ではほんとうに熱意があるものならば、眞に理解されて居るのかと私は疑ふ。實際解つて居るならもつと解りよく書いても良いではないか。日本哲學界に於る昔からの傳統たる眞正直な註釋叙述許りが、能でもあるまい。あんなに生硬なものでは、哲學が自分の血となり、骨となつて居る事が先づ覺束かない。之れで居て時代民衆の精神生活を指導するなんぞと、まづ期

待も出來ないであらう。従つてこれらの哲學が時代の要求に觸れて居るとしても、時代思想の主流を形造るとは考へられない。

然らばマルキシズムは一體どうであらう。世界大戰に依る資本主義の爛熟と共に、大正中期よりマルクス學説は、次第に勢力を得て、昭和初頭の思想界の王者として君臨した。この思潮と握手し、聲援するものがジャーナリズムであつた。マルキシズムと資本主義的ジャーナリズムとは、その原理の上に相容れないものがある。だが利害共同の場合に苟合するに願慮する彼等では、勿論あり得ない。かうして一にもマルクス、二にもプロレタリアの威力と云ふあひ言葉を去年までは、我等は聞かされたものだつた。併し時は流れて止らず、この流行思想も暗轉すべき秋が來た。

もとよりマルキシズムも一個の經濟思想の體系である。だからこの思想學説が經濟學者に依つてのみ、論議されたのに不思議はない。と云ふ譯で哲學者は之を措いて顧みやうとしなかつた。こゝに所謂教壇哲學者達の大きいなる失態がある。その無能無爲なる姿の現實暴露がある。元來マルクスの學説は只單なる經濟現象の説明叙述ではない。彼の體系は經濟學であるのみならず、歴史であり、史觀であり社會學であり、哲學である。それ等が渾然融和したところに一大特徴がある。殊に物質が宇宙全體を支配する。經濟が社會組織の一

切を動かすと云ふのである。して見れば、いやしくも社會の動向と民衆の生活に深き關心をもつ可き哲學者がこれを顧みないと云ふ法はない、無能でなくんば不誠意極まる話ではないか。さあれ時の王者たりしマルキシズムにも秋風は吹き初めた。マルキシズムに代るものとしてその實踐の面にあつてはファツンズムがあり、理論の方面ではヘーゲル哲學の復興がある。

「萬國の勞働者よ團結せよ」と叫ぶマルキシズムはどうしても國際主義である。このスロガンの上に立つて、彼等は階級闘争のためにあえいで來た。大衆の生活を極度に壓迫してゐる資本主義の否定は、無論結構である。大衆にとつて大きな福音でなくて何であらう。だと云つてその國際主義には破綻が現はれた。國際聯盟や軍縮會議などは必ずしもマルキシズムの説より生れ出たものでないにせよ、その原理には勿論一脈相通するものがあらう。だがその現實の姿はどうだ。

凡そ現代で最も無力を痛快に示して居るものに我が議會政治がある。二に國際聯盟がある。三に軍縮會議であらう。三大無能ナンセンスである。と云ふ事は畢竟パーリメンタリズムの没落と、インターナショナルリズムの轉落を物語るものではないか。こゝにファツンズム擡頭の契機がある。我國に於る國家社會主義や、國民社會主義は伊太利ムツソリーニ

の模倣でもないだらうし、又獨逸ヒットラーの追隨でもないだらう。だがそのイデオロギ  
ーに至つては、さきとも指摘した通り、多分に共通な點を發見する。即ち彼等は共に

#### A、民族意識の強調

#### B、資本閥の打倒

#### C、議會政治の否定

を主張するのである。無論私はファシストではない。又國家社會主義などと行動を共にしやうとも思はない。併し輓近哲學の中心勢力たるヘーゲルの哲學は、やがてそれ等に對し思想的基礎を與へるものではないかと思ふ。でも實踐の面はこゝに深く立到る要もなからう……。いざ私はヘーゲルの哲學に急がう。

私が獨逸留學から歸朝したのが大正末期だつた。その頃私は當來の哲學思想として、ヘーゲル哲學の興り來るべきを豫言したものであつた。何も別に豫言者めいて利いた風な言を云はなくとも良いのだが、その主張は適中したかのやうに思はれる。その根據として私は三つをあげて置いた。即ち

#### A、カント哲學に對する不滿

#### B、マルキシズムの清算



### C、國家理論の整理

と云ふやうな必要から、必ずヘーゲル哲學の要望現はるべしと説いた。

だが我等の説かんとするヘーゲルはエルドマン流の夫れではない。汎論理的解釋ではない。第一、ヘーゲルに於る論理と云ふ觀念は元々、カント流の論理とは根本的に異なる。カントに於る論理とは、靜的な動かない形式にすぎない。我等はよき其例を西田哲學に於て見出すであらう。それは内容なき抽象の論理である。併しヘーゲルに在つては生々流轉の姿である。その法則なのである。彼に於る觀念にしてもさうである。彼の哲學の中心をなす精神も亦、不斷の發展と展開とを續けて居る。「精神現象論」とは低い人間の意識から、次第に發展して遂に絶對精神に到る相を整叙したものではないか。

永久不斷の發展、絶えざる躍動と創造とが、精神の本質である。彼の用語に従へば、所謂精神の概念である。精神とはかくて、ベルグソンの云ふが如き生命その者である。但しベルグソンに在つては、生命は生物學的生命を出でないが、ヘーゲルに依れば、思想的生命である。それだから私はヘーゲル哲學を以て「生命哲學」だと観るのである。ベルグソンの生命哲學は、生物學的根柢に依つて、多少學的構造は有するとしても、哲學的訓練を経たものにとつては、常識哲學でなければ、概念的詩歌としか思はれない。

往年ベルグソン哲學に私が慊らなかつたのは、そんな點に在つたヘーゲルの生命哲學は斯る不滿を滿して餘りがある。ではヘーゲルに在つて、生命と云ひ精神と云ふ何處に、その具體的姿を見出し得るや。夫を我等は歴史に發見するであらう。彼に於る生命とは歴史性の謂ひである。かゝる生命的な歴史展開の論理が、即ち辯證法なのである。かなる生命の發展も、この理法の外に出づる事は出來ない。

マルクスに於て封建制度、資本主義制度、共產主義制度などは、論理的な區別ではない。史的範疇なのである。かゝる歴史的考察に於ては、マルクスはさすがに深く精到なものである。こゝに我等は彼の大な功績を見出すものである。これあればこそマルクスは、凡ての物を個々に觀ないで史的聯關に於て眺めた。

ヘーゲルの有名な言葉として「現實的のものは合理的なり」と云ふのがある。之はカント流の考へに依れば、如何にしても理解出來ない。「あるもの」と「あるべきもの」とを峻別しやうとする觀方では、到底解釋されない。現實と理想との對立的な考へでは、解く可き術もない。だがヘーゲルから觀れば譯もない。即ちありとし凡ゆるものに、必然的意味を見出さうとするのである。一切のものは、生るべくして生れたのだ。つまり必然の理を以て、現在するに至つたのだ。必然の理法と云ふのは、歴史的必然性との謂ひなのだ。更に詳しく

云ふなら、かくなる可き因縁をもつて生れたのである。この一語こそは彼の史的考察の學風をば端的に、且つは雄辯に物語るものでなくてはならぬ。

凡そ哲學の職分は、私に依れば意味の發見に在る。人生に對する意味付けであらう。果して然らば、ヘーゲルのこの態度こそは最もよくその使命を果すものではなからうか。殊に彼の説く歴史的必然の理法と云ふのが因縁の理法だと云ふならば、わが思想界には、よく理解さる可き因縁をもつ。こゝに彼の哲學が歴史主義と云はれる理由がある。併し歴史主義とは、過去の歴史を以て、將來の運命を豫斷するの意味ではない。哲學者は斷じて豫言者ではない。現存するものに對して、その存在の理由を説けば足りる。哲學は依然ミネルバの鼻であつて良い。黄昏する頃、ねぐらを出で、灰色の筆もて、灰色の大地に描けば、その職分は果される。今日の仕事の整算が出来たらば、明日は進軍の喇叭勇ましく創造の旅に出でられるであらう。

## VI 哲學の豫望

危機だ、非常時だと云ふ聲喧しく昭和七年は遂に暮れた。それらSOSの語は、併し、一九三二年と共に消えて無くならしとして居るのではあるまいか。もとより新年を迎えんとする心は、何時の日とて、希望と輝きとを持たぬ事はない。が、この年頭に當つては、殊更この感が深いようだ。我等の魂をまで脅かして居た非常時は、事實、今にも解消しさうに見えるのである。と云つて、穴勝ち、一時の氣休め計りとは云はれない。所謂危機を形造つて居た滿洲事變に由來する國際政局も、どうやら我に取つて好轉しさうな形勢に在る。と觀るのは、餘りに苦勞知らずの坊ちやんの樂天論とも見られやう。國際聯盟に於ける今日までの情勢は、我等の期待通りに進展して居ない。が、國論の異常なる統一と、それに伴ふ當局の強腰と松岡全權の健闘とは、極めて効果的のやうに見える。理事會から總會、總會から十九ヶ國委員會と云つた風に解決延期の策は、どう考へたつて我に押され氣味なのは争はれない。この押しの一點張りで行つたら、勝算疑ひなしと云ふ處であらう。

次に經濟財政の非常嗽叭は、農村匡救の臨時議會に依つて、けたましましくも、吹き鳴らされた。全く農村と云はず都市と云はず、財政の行詰りは名狀すべからざるものがあつた。

民に生色なしとは、決して誇張でないかを見た。併し、夫れもインフレ政策に依つて、  
どうやら吹飛ばされたのではなからうか。實云ふと、空前の大豫算と、十億に近い新規公  
債の募集とは、財政の前途に暗澹さを思はせるものがある。でも、それは玄人筋のこと。  
一般の大衆は金がうなつて、仕事があれば、何よりの仕合と云ふもの。一圓二圓の忘年会  
や、新年宴會の洪水が如實に之を物語る。要するに景氣は人氣なんだ。通貨が、實際如何  
に動くか云ふ事よりも、沈滞した人心が生新潑刺となるのが肝心なんだ。今やその兆十分  
に現はれたり云へないだらうか。

ところで非常時直接の端をなしたのは、例の五・一五事件なのである。之を契機として、  
或は之と前後してファツシヨの擡頭となり、横行となつた。むしろこの事件はファツシヨ  
の表現とまで見られた。此年に於て最も人心を寒からしめたもので、政治の行程は之に依  
つて急角度に轉廻した。此のファツシズムの基調をなして居るのは、直接行動である。夫  
れに對しては、大衆は反感よりも、むしろ戰慄を感じる。とは云へ、そのイデキオロギ  
なる議會政治と資本主義の否定打倒に對して、彼等は共鳴を感じないで居られぬ。金權と  
政權の握手に依る積年の罪惡が因をなして、ファツシヨは大衆の支持を得るのであつた。X  
部付ファツシヨにあらず、と云はゞ云へ、X部が此種社會思想の偉大なる指導的地位に在

つた事は否定されまい。果ては内閣組織に對してすらX部が最重要なる發言者となつた。  
獨り思想やイデキオロギに止らず、X部は政治の前面に躍るに至つた。かくして所謂非  
常時内閣は成立した。併し數ヶ月の試練は協力内閣は必ずしも強力内閣を意味しない事を  
教へた。又何時迄もX部が政治の一線に立つとなると、政權武門に歸する譯で、立憲政治  
が泣く事にならう。かくては大衆の支持共鳴を得るの覺束なさも、聰明なるX部の覺らな  
い筈はない。意氣當る可らずと見えたファツシヨも、此處に轉向しなくてはならぬ氣運に  
迫つたのである。

之が昭和七年歳末の大勢である。斯様に觀て來るならば、非常時は次第に解消しつゝあ  
るのではないか、と考へられる。さてこんな事をのべ去り述べ來れば「時論」でも試みれる  
やうに思はれやう。時論ならば、馬場氏か大森氏あたりの舞臺であつて何も私の飛出す幕  
でもなからうが、私はこゝから哲學の問題を見出し度いと思ふのだ。もとより哲學とて時  
代の見である。時代の客觀的狀勢との關聯を持たぬ哲學はあり得ない。そんな哲學があつ  
たら、早く死んで了へた。一體今迄餘り用がなく、死んで終つて良いやうな哲學が幅を利  
かし過ぎた。所謂講壇哲學とは、かゝるミラー哲學の稱呼ではないのか。この種のもの  
がさも本格的哲學であるかのやうに考へられた。以つての外の事だ。かやうな認識不足を

ば何よりも早く清算しなければならぬ。少くともそれは昭和八年に於る急務であり、最大課題であらう。

十八世紀中葉に華かなりし、獨逸浪漫期に對し、私は限りなき思慕をもつ。この期の哲學や文藝に共鳴を見出す許りではない。獨逸浪漫期の思想文學の花が咲き出でたのは、ワイマー宮庭を中心とした土壤であつた。ワイマー宮庭を背景とする雰圍氣が私の心をつぶるのである。この宮庭に集つたのはゲーテやシーラーの如き文藝の人のみではなかつた。思想家もあつた。哲學者も交つて居た。斯うして彼等は交遊密にして、特種のアトモスフィアを醸し出すのであつた。文人は思想家に刺戟を與へ、哲學者は詩人に思想的背景を裝置する事をば忘れなかつた。之等の豊かな教養人は、政治家に感化を與へないでは濟まない。普魯西亞の勃興、獨逸文化の興隆は、かくして決して偶然ではない。

翻つてわが國の現状を顧みよ文壇と哲學界と何の交渉があるか。政治家と文人思想家といかなる聯關にあると云ふのだ。各自は夫々狭苦しい孤城を守るに汲々たるのみではないか。文化の各領域は夫々の封建制を固持して互に動かうとしない。あだかも窻なきモナドの如きものではないか。文化の有機的關聯を求めるのは、我國では不渡手形の支拂を請求すると同じである。かゝる意味からでも、私は哲學の問題をば、實踐の動向のなから見出し度い。否かゝる中にこそ哲學の課題はひそみ、生ける哲學は在ると思ふのだ。

それならば前に述べたやうな客觀的動向に於て、いかなる哲學の問題が見出されるか。國際聯盟は十三對一の狀勢にあるにしても、さきに述べたやうに、無策無定見のハムレットを決め込んで居るのだから、強く押してさへ行けば大した事はあるまい。が、何時形勢が急轉しないとも限らない。となると我國は今更後に退く譯にも行かぬだらう。勢の向ふところ遂に全世界を相手に、一戰又辭してはならぬ。所謂國を焦土と化しても行くところ迄は行かねばならぬ。さうなつては單なる事變ではない。愈々本當の戰爭である。さすれば幾萬の精靈を犠牲にして國を焦土化する慘劇をば、何故我等は忍ばねばならないのか。こゝに重大なる思索の問題が存する。戰爭の理論的根據は、一片のヒューマンニズムの思想では解け難い。人道主義どころか、カントの哲學といへ共、戦ひを肯定する論理を見出されない。夏の臨時議會に於る内田外相の聲明や、壽府に於る松岡全權の雄辯は、國民をして意を強ふせしめるものではあるが、其處には戦ひの哲理は求められないのである。ではわが哲學者にして、果して斯かる準備を誰れがもつて居るであらう。十九世紀の始め、勝ち慢つた奈翁は獨逸に攻め入つた。獨逸の全土は殆んど彼の蹂躪に任せねばならなかつた。書齋の深きところよりフキヒテは、遂に街頭へ跳り出でた。獨逸文化の高貴なる

所以を説いて飽迄之を擁護すべき任務を教へ道德的緊張を要求して、敢然戦へよ争へよ、と叫んだ。それが彼の「獨逸國民へ告ぐ」なる講演である。彼のこの主張は歴史的哲學的見解に本いて居る。我國でもこの二三年來、歴史哲學は漸く世の關心を惹くに至つた、だが多くは模倣議論の範圍を出でず、只理論の型をあげつらつて居るに過ぎない。

ファツシヨの問題にしてもさうである。その基調をなすテロ的傾向は大衆の支持を、勿論、享け得ないが、議會政治の腐敗に對する打倒の叫びには誰とて賛成しないものはない。資本主義の横暴に對しても、皆反感をもつて居る。更にファツシヨが時流に迎へられたのは、その國家主義的イデオロギーなのだ。だがファツシヨには理論がない。組織ある哲學的根柢がない。何にしても之はマルキシズムに比して大なる缺陷であらう。何にしる滿洲事變に依つて生れた即興詩的思想なる憾み尠しとしない。議會政治や資本主義に對する検討も勿論緊要に違ひないが、この機會に、國家主義なり或は國家の哲學的基礎を與へる事は、國際政局紛糾の折柄、國家的統一を與へるのに、最大急務でなければならぬ。

ファツシヨの叫びと呼應して日本主義や日本精神の聲が高らかに叫ばれたやうだ。文部省による精神文化研究所の設立は、かゝる氣運の産物と見られる。遅まきながら結構な事に違ひない。でも之は直接マルクス排撃を目的とするものである。勸善懲惡の傾向的作物

が、大した藝術的價値を要求し得ない如く、かやうな御用的番犬に、多くの期待が出来ない。師範學校の卒業生を收容して思想的改心を計ると云つた工合に、全で感化的院仕事であるらしい。大して期待がもてる筈もない。國民精神の研究はかやうな傾向的イデオロギーなしに眞に、國民文化の尊貴と價値とに目覺めたものが、より集つて自發的に研究するものでなければならぬ。斯やうな事では獨りこれを嘲笑するもの、マルクス・ボーイだけであるまい。また日本精神の高唱にしてからが、國民として大變愉快な事だが、謂ふところの日本主義や、日本精神の本質特徴に至つては、甚だ曖昧である。或は中正公明の心と云つたり、或は清明心と云つて見たところで、漠然たる抽象的名辭であつて、仁丹の効能書程でもない。

往年高山樗牛が日本主義を唱へ出した事がある。今迄ニイチエなんかを、かついで美的生活を論じたりして居たのに、一度日蓮の遺文を読むに及んで、彼はすっかり感激した。それから全く彼は日本主義の導者になつたのだが、近頃の日本主義はさすがに彼程安價な感傷に出で、居るのでもない。だが未だジャナリズムの域から脱して居る事餘り遠くもないやうだ。中江藤樹の作物一二典を讀んで、新カント哲學と結合して見たり、或者は日本の古典二三冊讀んでヘーゲルを持つて來たりするやうでは、折角の日本精神も臺なしであ

る。まるでレデキ・メードの洋服でも作るやうな態度であつた。眞に根柢的に日本精神を闡明にする態度ではあり得ない。ちやうど此の一文を草する頃雑誌「理想」を手にした。これを通覽して、杏村氏の態度に最も私は心を惹かれた。彼は日本固有の思想はいかなるものであるかを先づ考へた。この問題の解決がよほど困難なものである事を指摘し、「今よりもずつと細かな觀察を過去の歴史的進展と、その文化的所産の上に集注するやうな周到の努力」を要求して居る。かゝる細かな用意あつてこそ、日本精神の本質特徴を闡明し得る。世の多くの日本主義者は餘りに結論を急ぐ緣日商人見たやうである。兎もあれ私は國家の理論的基礎を要求して已まぬ。それも只普遍的國家理論では未だ足りない。日本國家の理論には日本國家の特質から明かにされねばならぬ。もとより夫れは日本の歴史や文化の展開の上に樹てられねばなるまい。これ等はまだ解かれない哲學の問題として、殘されて居る事を指摘するに止めやう。

一方に官設の國民精神文化研究所が出現したが、他方に於て秋に民間少壯學者に依つて、「唯物論研究會」が創立された。これは注目に價する現象である。マルキシズムはジャナリズムの上に既に凋落した。それに今迄餘りに經濟的方面のみに力が注がれた。がその唯物史觀や唯物論なりは、まだ十分究明の餘地が殘されて居るであらう。この研究會は勿論マルクス研究のみに止つて居るのでもあるまいが、彼に示唆を受け精細なる研究の歩をこの方面に辿らうとして居る。獨り唯物論的組織の大成のため許りでなく、觀念論哲學の進展のためにも、大きな鞭撻刺戟であるに違ひない。

一九三二年に於ては、生の哲學、人間學乃至は存在論と云つたやうなものがしきりに問題となつた。之は明かにカント哲學に對する反動だと、私は觀る。彼の哲學に於ける中心問題は、いふまでもなく認識論であつた。只認識や理性の吟味に終始して形而上學的思索を以て哲學問題の外に驅逐しやうとした。カントをば形而上學的に解しやうとする一群の思想家もないではないが、そこに彼の眞意が存するのではなかつた。然るに哲學思索の誕生を反省して見るならば、誰れにも必ず形而上學的な要求が潜んで居る。かゝる要求も生れ出でゝ居るのに、彼は之を以つて、學の越權行爲だと云つて、強ひて除去しやうとする。さらば哲學は自殺するより他あるまい。私が「哲學の破産」と會つて叫んだのは、誤解した人もあるやうであつたが、右のやうな譯合からであつて、間違ひだとは今でも考へてゐない。現に存在論たるオントロギーだのと叫ばれ出したのは、カントの宣言に對する反抗の現はれでなくて何であらう。やはり誰れもが知識の吟味や方法論だけでは満足されぬ。現實在そのものを把握せねば止み難きものがある。そこに存在論が今更のやうに擡頭した理由

は存する。

生の哲學や人間學と云つたものも、流行の哲學を餘り私は讀んでゐないのでよくは分らないが、やはり同じ動向なのである。カントの哲學は文化を問題にしたが、それは只文化の理想であつた。理想の型であつた。従つて生ける人間を彼は閑却した。現實の人生を顧みなかつた。そこに動く姿もなければ、生命の影も見出されない。彼岸の寂光淨土が垣間見られるのみ。かくては實人生との交渉もなく、現實を動かす力ともならない。その色香褪せて生の哲學の叫びとなり、人間學の生々しき要求となつて現はれたのは蓋し當然である。そこでマックス・セーラーやハイデッカーが、時代の寵兒となつて登場して來た。併し何も彼等のみを騒々しく、持ち廻るのは、餘りに流行の急を追ふ銀座街頭の斷髮嬢の態度にすぎない。何も哲學の學徒が、ジャーナリズムの提燈をもつて、はやりにも焦燥しなくも良いではないか。右の諸々の流行哲學に包含される契機は、ヘーゲル哲學に凡て包攝されて居るのではなからうか。一九三一年は彼の百年祭に當つたので、その復興熱が旺んであつたけれ共、一年もたつと、すっかり忘却されたかの如くである。

もつと我等は彼を深く究めて種々の思索問題を解決すべきであらう。さきの國家の問題にしる、日本精神に對する反省にしる、ヘーゲルの歴史哲學的考察に於て、十分その解決

の關鍵は與へられて居る。他面又私は彼の辯證法の哲學をば、生命哲學流に解釋したいのである。彼の哲學は精神の哲學であつた。精神はカントの理性とは異つて、生々發展、暫くも止む事なき生命の實體なのである。辯證法の論理とは、つまり生命發展の姿相である。一切の現象、生命全體を肯定する處に、辯證法の特徴は存し、ヘーゲル哲學の核心は在るのだ。又生の哲學や人間學が叫ばれるのは、非合理性を生かさんとする要求に出で、居ると思はれる。啓蒙期の合理主義に多分の影響を受け否一步も合理主義より出で、居ないカント哲學に對する反動である。青年ヘーゲル學派の解釋に、まつ迄もなく非合理性を肯定しやうと云ふのが、むしろヘーゲルの出發點だと云つて良い。辯證法は、概念その者、實在その者の矛盾を認めて、始めて成立つ論理である。天下之位大きな非合理性の肯定が又とあらうか。

そこで私は云ふのである。セーラーだのハイデッカーだのと無暗に流行を追ふて走る必要はない。それ等に對して向けられて居る要求は悉くヘーゲルに依つて示されて居る。私はヘーゲルをば一時の流行に終らせたくない。もつと我等は彼に沈潜すべきであると思ふ。彼の思索の態度を、ほんとうに自分のものとして、問題の解決に努力する處がなければならぬ。我が國の哲學徒は餘りに新しき名前にあこがれ過ぎる。斷髮嬢が不當な評語で

あるなら、文學青年の域を一步も出でないのである。と云ふのは、自分固有な問題を持たない所爲であらう。思索の問題は他から與へられるものでなくて、内から生れたものでなければならぬ。不可避必然の問題をもつて有てこそ、心魂を捧げて猶足らぬ思ひがあらう。かかる問題を秘めて居るならば朝には、マルクス、夕にはキヤルケゴールなどゝあわてる要もない。未だにこの病癖が抜けないのを心から私は遺憾に思ふ。

クローナーであつたか、ヘーゲルを以つて生命哲學に近いものとして、解釋しやうとした。私はもつと徹底して彼をば生命哲學その者だと觀やうとする。この點を明確に力説した「生命哲學物語」を近く私は出版しやうと今企てゝ居るところである。もし夫が餘りに過ぎた觀方であるといふなら、ヘーゲルに出發する私自身の哲學であると云つても良い。必ずしも徹頭徹尾ヘーゲルの名を冠しなければ、といふ義理合ひもない。それは兎もあれ、ヘーゲルの哲學に對して向けられる非難に就て、看過されない重要な二つのものがある。それは

A、彼の哲學は沒理想主義ではないか

B、彼の哲學が宿命觀に終らないか

といふ點である。カントが理想や價値を明瞭にして呉れた事は良い。併し前に説いたや

うに、遠い彼岸の光であつて、現實を動かす力でないやうな沒交渉なものでは仕方がない。かゝる時に「現實のものは合理なり」といふヘーゲルの語は貴い福音である。かうして彼に依れば、一切は肯定され、凡ては是認され、ネロ皇帝の罪過も亦許されねばならぬ。かく一切の行爲も現象も理想的價値だといふ事になる。沒理想主義と觀られ無目的主義だと斷ぜられるのは、斯かる點にその由來がある。いづれも尤も至極な非難である。かくては殺人強盜、ギャング、テロ勝手たるべしといふことになりはしないか。

こゝに我等はカントとヘーゲルの考へ方、或は考への態度が截然異るところを明かに認識すべきである。カントは現實と價値とを明確に區別した。現實を描いて問はないが、價値の形式を考へ、價値體系を作るに餘念がなかつた。然るにヘーゲルは飽迄現實を離れなかつた。諸々の現象がかく現はれるに至つた理法を考へた。そして凡てのものが必然の理法に支配されてゐて、一つとして偶然でないことを知つた。彼はかくの如き結果を生むに至つた因縁の理を究めるのであつた。「現實のものは合理なり」とは斯かる因縁の理法の働きのなるを教へたのである。必然の運命に支配されて生れた次第を語らうとするのが、彼の辯證法の論理であり、彼の「精神現象論」なのである。それだから、ヘーゲルの謂ふ合理的とはカントのやうな現實に對立する形式的價値の謂ひではない。歴史的必然の理法といふ



意であるそれだから、彼はカントの如く理想や價値をば、遠い。彼岸に求めやうとしない。之を單なる抽象的な空想として斥ける。然らば目的や理想を求めて努力する目的論的理想主義の態度はなくなるではないか、との非難が當然生れて来る。

こゝで私は大乘佛教の主張を顧みたい。大乘精神の極致が何處にあるかは、様々説かれるであらうが、一念三千の思想に在りと私は觀る。煩惱即菩提、娑婆即寂光土といふ處に在らう。一度び念佛申すならば成佛するといふんでは、泥棒自由たるべしとの議論が出るであらうか。でもそれは宗教の極致である。哲學思索とは自ら選を異にすると論者はいふでもあらう。さうだ、所謂デウス・エキス・マシーネ見たいに怪しくなると、宗教に逃げやうといふのではないが、そこで難者に向つてヘーゲルの精神の本質を理解してもらひたいのだ。幼稚素朴な意識の状態から絶対精神にまで到達せんとするのが精神の實相である。斯る動きは、精神が己れ自らに歸る事を措いて他にない。自覺とは之を謂ふ。既に精神の本質が斯る處に在りとすれば、論者の非難は只一片の杞憂ではないか。

次にヘーゲル哲學は宿命觀ではないか、との批議に就て語らねばならぬ。が、之は私自身もつと考へねばならぬ事であるから暫く、問題として残しておき度い。

## C 哲學思潮の展開

## I 哲學の曙

基督生るゝの前、凡そ二千年の昔に溯る。大八洲は未だ開けず、クラゲなどして漂ふてゐた頃の事である。歐羅巴の内陸からバルカン半島を南下して、風暖かな地中海沿岸に移つて來た一團の民族があつた。「豊葦原瑞穂の國は」など、宣言はしなかつたが、橄欖の葉茂り葡萄の果實る豊饒肥沃な地を見て、彼等は我が意を得たりと許りに、其處に永住の計を立てた。これが希臘民族の祖先である。丁度其の頃ペロポネソス半島の南、クレテ島を中心し、エーゲ海沿岸一帯の地には古い民族が住んでゐて、華かな文明を作つてゐた。古代史では之をエーゲ文明といつてゐる。そこで二つの異つた民族の間に争鬪が起つた。勇敢な希臘民族は、既に凋落の氣運にあつた先住民族を驅逐して、この文明を消化しつゝ、徐ろに自分の力を養つて行つた。かういふ風で西紀前凡そ十世紀の頃になると、希臘人の勢力は隆々として揚り、東は小亞細亞沿岸、西は伊太利半島の南部にも及んで、潑刺たる新興民族の意氣を示すに至つて居た。この頃から希臘史は漸く中古時代に入る。「都鳥浮く大川に、夢多かりし我が身哉」——と詩人は歌つたが、思想史上空前の偉業を完成した希臘民族の若き日の夢は、流石に幽玄な趣きをたゞへたものであつた。ホーマヤ

ハシオドスの詩篇は、彼等が残した若き日の夢の記録である。天馬空を行くやうな奔放自在の空想と典雅華麗な詩情の結晶たるこれ等の中にこそ、後年の榮えある希臘思想の萌芽が、深く秘められて居たのだつた。版圖の擴るにつれて産業は振興し、貿易は活潑となり、本國並に植民地の富は次第に増加した。それと同時に、個人の位置は向上し、人格を尊重するの傾向は著しくなつて來た。かくて希臘民族は古き信仰、古き習慣より漸次解放せられて自由な學問の研究へと進んで行つた。少年期を過ぎた希臘人は、おそらく沈み行く夕日を見ては、自然の不思議を感じたであらう。一葉の船に身を乗せて地中海を走る彼等は、蒼天にきらめく星影に宇宙の神秘を思ふたであらう。日、月、星、辰とは果して何ぞ。何處より來り亦何處へ行くか。この國土には、もとより數々の神話的な宇宙開闢説が説かれてあつた。併しそんなものはや、彼等の知的要求を滿すに足らなくなつてゐる。彼等は自らこの神秘を解かなければならない。こゝに希臘思想否歐羅巴思想の黎明は輝き初めたのである。

#### a イオニア學派

「水は萬物の根源である。薄れては空氣及煙となり、凝つて大地及巖となる」と説いたの

はタレースであつた。タレースは紀元前六世紀前半、小亞細亞イオニア植民地の一都市ミレートスに生れた。故に彼の一門をミレートス學派、若くばイオニア學派と呼ぶ。通例希臘哲學の鼻祖たる榮冠は彼の頭上に與へられて居る。タレースの水を、今日普通に謂ふ化學的水と解するのは穩當でない。アリストレスの説く如く、彼は植物の液、動物の血をそれ等の生命と見てこの説をなしたものであらう。根源たる水が他の物に變じて萬有となるは、水に生命あつて自ら動くからだと彼は考へた。勿論今日では少しく科學の教養ある者は、その素朴な見解に驚くであらう。されど彼の考の素朴を謂ふ前に、翻つて少しく考へて見ねばならぬ。森羅万象の流轉に驚異を感じるは既に一樣尋常のことではない。万物の流轉を一の原理によつて説明せんとするに至つては、更に數段の進歩である。

個人精神の發達は、民族が進化した跡をたどると心理學は教へる。幼年期には、我（自分）と非我（他人或は自然）との區別はない。兎が餅をついても、桃から人が生れても平氣である。兎が餅をつくのが不合理だと笑ふには、少くとも何年か教育の厄介にならねばならぬ。子供と同じやうに、原始人にも夢と現とのけぢめはない。同じ意識の内容も時は夢であり、時には現であると知るのは餘程經驗を積んだ後である。なほ又兎が餅をつくの不合理は笑つても、林檎の落ちるのに對して疑をもつやうになるのは、鼻の先の蠅を拂

ふやうに易々たる業ではあるまい。「明日ありと思ふ心のあだ櫻」と歌ふことは歌つても、それはほんの一時の感傷に過ぎない。多くの人々は、咲いた櫻は散るものだと心得てゐる。生れた者は死なねばならぬとあきらめてゐる。そんなことはどうでもいふと言ふのなら、豚やマンモンを無闇にかつぎ上げぬがよからう。時は一九三〇年である。飛行機ラヂオの高速時代といふに、自ら新人を以て任ずる人々に於て、尙ほ且つさうなのだ。如何にタレース以前の人の多きことか。頼山陽は齡僅かに十歳にして、「天とは何ぞや」と問ふたといふ。彼は流石は一代の秀才であつた。セーラー・ズボンに引き眉毛も結構ではある。けれども、願はくは新しき革囊に、古き血を盛るの滑稽を演ずる勿れである。新人とは人眞似をするものではあるまい。猿と雖もなほよく冠をかむる。自らの思想を高め深めてこそ始めて新しき革囊に、新しき血を盛ることが出来やうではないか。日出で、耕し、日入つて息ふを以て無上の樂土だと云ふのなら、吾人また何をか言はん。哲學の道は峻しく、光明への道は暗い。輝かしい文化の華も、其の根は悉く憂鬱と寂寥の住む、地下の國に在る。幼兒の如く與へられたるものを與へられたるがまゝに受け、娼婦の如く吳越の客を送迎して何の憂をも感ぜずんば、また何の哲學をか要しよう。吾人とは相距る正に雲煙萬里である。吾人にとつては眞に縁なき衆生である。されど苟くも現代に生き現代を解せんとの志

あらば、タレース以前の人であつては相濟むまい。なほ進んで思索の道をたどらんとする者は、飢えたる獅子の如き要求をもたねばならぬ。憂なく、悩みなき者には哲學の要はない。この悩みこの憂の爲めに、一粒の眞珠を獲んが爲めには、渦巻く深淵にも入る勇猛心を有たなければならぬ。

既に希臘の地には、文化の曙が訪れて來た。タレースの門下、アナクシマンダロスは、師の説を承けて、之に驚くべき展開を與へた。乃ちタレースに於ては、經驗界の事を考へて居た。併しアナクシマンダロスに至つては、考へが一躍經驗界を超脱したのである。彼は謂ふ「有限なるものは不斷の生産によつて消盡されるであらう。故に根源は知覺せらるべきものに非ずして、一切の經驗界を超超せるものならざるべからず」と

彼は彼の所謂世界の根源を名づけて、ト・アパイロンといふ。ト・アパイロンとは「限り無きもの」の義である。彼によれば、ト・アパイロンは經驗せらるるものではない。不生不滅不壞不盡であつて、空間的には無限であり、時間的には無始無終である。萬物はこれより出で、萬物はこれに復る。其他なほ彼はこの「無限なるもの」に、神の性質を與へた。こゝに於てあらゆる神話的な神の觀念は、哲學的思索のために其の衣をはぎとられ、理論的傾向をとるに至つたのである。